

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告Ⅱ

横マクリ遺跡

2008

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号
糸魚川東バイパス関係発掘調査報告Ⅱ

横マクリ遺跡

2008

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、京都市に至る日本海側の幹線道路であり、北陸地方と京阪神地方を結ぶとともに新潟県の産業・経済・文化の発展に多大な役割を果たしてきました。しかし、糸魚川市域の国道8号は、交通渋滞・降雪時の交通障害・騒音等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。国道8号糸魚川東バイパス建設事業はこのような問題を解決し、幹線ネットワークの充実と強化を図り、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

本書は、この糸魚川東バイパスの建設に先立ち、平成18年度に実施した横マクリ遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、古墳時代前期の生活跡が発見されました。特に、土器や玉の未成品・原石・工具などの遺物が集中する地点を多数検出したことは、糸魚川市内に多く存在する古墳時代の玉作り遺跡との関連も含め、極めて重要な事例となります。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々が埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。最後に、この調査に関して多大なご協力とご援助を賜りました糸魚川市教育委員会ならびに地元住民の方々、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字田伏字横マクリ749-1ほかに所在する横マクリ遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い国土交通省から新潟県教育委員会が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団に調査を委託した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社みくに考古学研究所に委託して発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物および調査に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、横マクリ遺跡の略記号「06ヨコマ」とし、出土地点や層位を統けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
- 7 本書に掲載した遺物番号は種別を問わず通し番号とし、本文および挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版において全て統一している。
- 8 引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 10 自然科学分析に係る各種の同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 11 遺構断面図のトレースおよび各種図版作成・編集は株式会社セビアスに委託した。
- 12 本書の執筆は、渡邊裕之（埋文事業団調査課長）、入江清次（同主任調査員）、桑原 健（株式会社みくに考古学研究所）がこれにあたり、編集は渡邊が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章、第Ⅱ章…入江、第Ⅴ章2B・第Ⅶ章4…桑原、その他…渡邊
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる（敬称略　五十音順）。
赤澤徳明　金子拓男　木島 勉　笠澤正史　佐藤雅一　閑 雅之　久田正弘　山岸洋一
国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所　糸魚川市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査・整理作業	3

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定	10
2 微地形と基本層序	10

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要	15
2 古墳時代	15
A 方形区画溝	15
B 遺物集中ブロック	16
3 平安時代以降	20
A SD001	20
B SX003	21

第Ⅴ章 遺 物

1 概 要	22
2 弥生～古墳時代	22
A 土 器	22
1) 分 類	22
2) 出土土器の観察と記述の方法	25
3) 遺物 各説	26
B 石 器	33
1) 概 要	33
2) 内磨砥石の分類	35
3) 遺物 各説	36
3 平安時代以降	42
A 陶 磁 器	42
B 木 製 品	43
C 古 銭	43

第VI章 自然科学分析

1 花粉分析	44
A 試料と分析方法	44
B 分析結果	44
C 遺跡周辺の古植生	46
2 樹種同定	48
A 試料の採取と方法	48
B 結果と考察	48
3 プラントオパール	50
A 試料と分析方法	50
B 分析結果	50
C 稲作について	51
D 遺跡周辺のイネ科植物	51
4 テフラ分析	53
A 試料と分析方法	53
B 鉱物分析結果	53
C おわりに	54
5 放射性炭素年代測定	56
A 試料と方法	56
B 結果	56
C 考察	57

第VII章 まとめ

1 出土土器群の編年位置と特徴	59
A 編年の位置	59
B 各器種の特徴	60
1) 壺	60
2) 高杯	61
3) 器台	62
2 遺物の分布と出土状況	62
A 遺物集中ブロックの認定と記録化	63
B 遺物集中ブロックの形成過程	63
C 接合および同一個体共有関係	64
3 方形区画溝	66
4 玉作関連資料と内磨砥石	67
A 玉作について	68
1) 管玉製作工程についての予察	68
2) 勾玉について	69
B 内磨砥石について	69
1) 「浜山型内磨砥石」の特徴	69
2) 横マクリ遺跡出土の内磨砥石	70
3) 内磨砥石Ⅲ類について	70
《要約》	72
《引用文献》	73
《観察表》	75

挿図目次

第1図 国道8号東バイパスの路線と遺跡の位置	1	第22図 Ⅲ区 滑石製剝片 長幅比	40
第2図 試掘調査トレーンチ位置図	2	第23図 Ⅳ区 滑石製剝片 長幅比	41
第3図 試掘確認調査出土のチャート製石核	2	第24図 主要花粉化石分布図	46
第4図 横マクリ遺跡周辺の主な遺跡	7	第25図 横マクリ遺跡の花粉化石	47
第5図 グリッド設定図	11	第26図 木製品の材組織の光学顕微鏡写真	49
第6図 遺物出土状況および地区設定図	13	第27図 プラント・オバール分布図	50
第7図 土層柱状図	13	第28図 プラント・オバール	52
第8図 I・IV区遺物出土状況	17	第29図 堆積物の鉱物組成	54
第9図 II区遺物出土状況	18	第30図 堆積物中に含まれる鉱物	55
第10図 ブロック10 セクション図	18	第31図 腺年較正結果	58
第11図 ブロック1 高杯・内磨砥石出土状況	18	第32図 上越市津倉田遺跡	60
第12図 Ⅲ区遺物出土状況	19	第33図 貢底部の調整方法	61
第13図 土器分類図	23	第34図 高杯の製作手法	61
第14図 器台脚部の透かし配置（上面観）	24	第35図 高杯50の接合関係	65
第15図 貢の口縁部形態	24	第36図 貢102の接合関係	65
第16図 貢A類の法量分布図	25	第37図 貢164の同一個体共有関係	65
第17図 器面調整と工具の方向	26	第38図 佐渡市畫場遺跡	66
第18図 器種組成グラフ	34	第39図 管玉・剥片類 長幅比分布	68
第19図 内磨砥石分類概念図	35	第40図 管玉・剥片類 厚幅比分布	68
第20図 I区 滑石製剝片 長幅比	36	第41図 勾玉・剥片類 厚幅比分布	69
第21図 II区 滑石製剝片 長幅比	38		

表 目 次

第1表 貢A類の法量分類	25	第12表 器種組成表	34
第2表 器種構成比率（ブロック10）	28	第13表 内磨砥石分類別点数表	35
第3表 貢口縁部形態（ブロック10）	29	第14表 木製品観察表	43
第4表 器種構成比率（SD004）	29	第15表 産出花粉化石一覧表	45
第5表 貢口縁部形態（SD004）	30	第16表 木製品の樹種同定結果	48
第6表 器種構成比率（ブロック12）	31	第17表 試料1g当たりのプラント・オバール個数	50
第7表 貢口縁部形態（ブロック12）	31		
第8表 器種構成比率（ブロック18）	31	第18表 テフラ分析結果	54
第9表 貢口縁部形態（ブロック18）	31	第19表 測定試料及び処理	56
第10表 器種構成比率（ブロック11）	32	第20表 放射性炭素年代測定及び腺年較正の結果	57
第11表 貢口縁部形態（ブロック11）	32	第21表 貢の底部形態	61

図版目次

図版 1 遺跡全体図	図版 7 古墳時代の土器（5） II区ブロック10・
図版 2 道構個別図	ブロック外、III区SD004
図版 3 古墳時代の土器（1） I区ブロック7・8	図版 8 古墳時代の土器（6） III区SD004・ブロ
図版 4 古墳時代の土器（2） I区ブロック8・	ック16・12
17・ブロック外、II区ブロック5・3	図版 9 古墳時代の土器（7） III区ブロック12
図版 5 古墳時代の土器（3） II区ブロック6・	古墳時代の土器（8） III区ブロック18・
2・1	11
図版 6 古墳時代の土器（4） II区ブロック10	図版 11 古墳時代の土器（9） III区ブロック11・

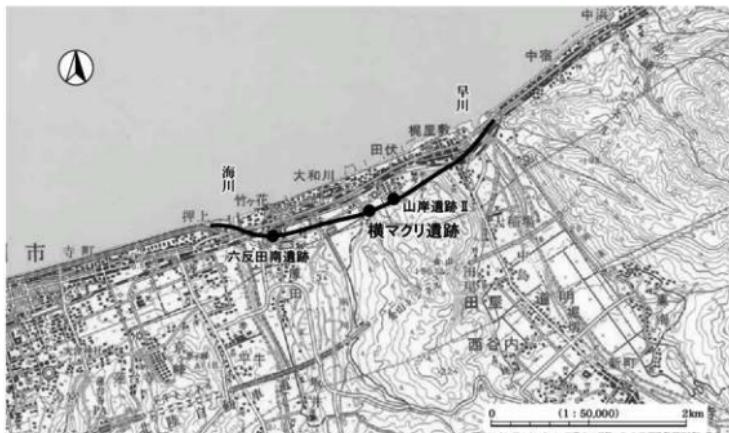
	ブロック外、IV区ブロック 14・ブロック外		
図版 12	古墳時代の土器（10） SD001、古代以降 の遺物	図版 25	写真図版（7）
図版 13	古墳時代の石器（1） I区	図版 26	写真図版（8）
図版 14	古墳時代の石器（2） I区・II区	図版 27	写真図版（9）
図版 15	古墳時代の石器（3） II区	図版 28	写真図版（10）
図版 16	古墳時代の石器（4） II区・SD004	図版 29	写真図版（11）
図版 17	古墳時代の石器（5） SD004・III区・IV 区	図版 30	写真図版（12）
図版 18	古墳時代の石器（6） IV区	図版 31	写真図版（13）
図版 19	写真図版（1）	図版 32	写真図版（14）
図版 20	写真図版（2）	図版 33	写真図版（15）
図版 21	写真図版（3）	図版 34	写真図版（16）
図版 22	写真図版（4）	図版 35	写真図版（17）
図版 23	写真図版（5）	図版 36	写真図版（18）
図版 24	写真図版（6）	図版 37	写真図版（19）
		図版 38	写真図版（20）
		図版 39	写真図版（21）
		図版 40	土器部分写真

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

国道8号は、北陸自動車道とともに、関西・北陸方面と新潟県域を結ぶ主要幹線道路である。また、地元においては、山地と海岸を結んで、南北に延びる道路を東西方向に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。しかし、近年の交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川市域で慢性的な渋滞を引き起こし、地元からは、渋滞の解消や交通安全の確保を含めた交通環境の改善を求められていた。建設省(現国土交通省、以下、国交省とする)はそのような状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実・強化を目的に、国道8号糸魚川東バイパス(糸魚川市間脇～同市押上に至る6.9km)の建設を平成元年に事業化した。これを受け、国交省と新潟県教育委員会(以下、県教委)は、計画用地内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

国交省から依頼を受けて県教委は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)に当該地区の分布調査を委託した。埋文事業団は、早川左岸の梶屋敷地区から海川左岸の押上地区にわたる予定法線内を対象にして、平成11年10月13～14日に分布調査を実施した。その結果、調査範囲の約半分が山林・宅地・盛土であったため、採集された遺物はわずかであった。しかし、遺跡の存在が予想される地形的特徴などを加味しながら、4地点の遺跡推定地が存在することを県教委へ報告した。横マクリ遺跡が存在する大和川地区では、字アワラ地区で土師質土器・近世陶器が採集され、また周知のアワラ遺跡が隣接することから、推定地3が登録された。



第1図 国道8号東バイパスの路線と遺跡の位置

(国土地理院発行「糸魚川」1:50,000原図 平成8年発行)

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査（第2・3図）

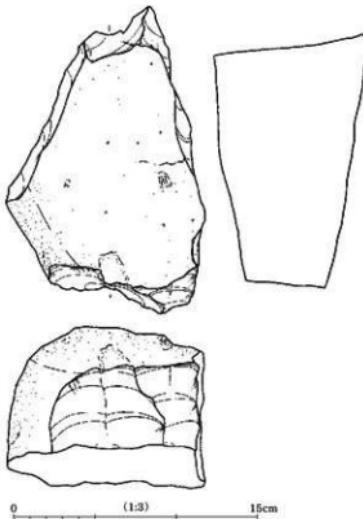
1) 調査の経過

平成18年、糸魚川市田伏地区において、国道8号糸魚川東バイパスとともに工事用進入路ならびに水路ボックスの建設工事が進められることになった。国交省から依頼を受けた県教委は、埋文事業団に当該地区の試掘確認調査を委託し、平成18年6月2日～7日（実質4日間）、2地点5,880m²を対象に試掘確認調査を実施した。実質調査面積は175.7m²で、試掘確認率は3%におよぶ。

試掘確認調査は、バイパス用地内に試掘坑（トレーニング）を任意に設定したうえで、重機（バックフォー）及び人力による掘削・精査を行い、その後、土層の堆積状況、トレーニング位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。掘削深度は2mを目途とし、7か所にトレーニングを設けて調査を行った（第2図）。その結果、2～4トレーニングの3か所で安定した遺物包含層（層厚平均30cm）が検出され、弥生時代後期～古墳時代前期とみられる土器が出土した。特に4トレーニングでは、古式土師器30点のほか、緑色凝灰岩製剝片3点、滑石製石核1点（第3図）、砂岩製砥石1点などが検出され、玉作遺跡の存在が想定された。一方、6・7トレーニングでも少量の遺物が発見されたが、安定した遺物包含層が認められなかつたため本発掘調査範囲からは除外した。この結果、1,340m²の本発掘調査が必要であると判断され、新発見の遺跡として、小字名から「横マクリ遺跡」と命名された。



第2図 試掘調査トレーニング位置図



第3図 試掘確認調査出土のチャート製石核（4T出土）

2) 調査の体制

調査期間 平成18(2006)年6月2日~7日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)

総 括 波多 俊二(事務局長)

管 理 斎藤 栄(総務課長)

庶 務 長谷川 靖(総務課主任)

調査総括 藤巻 正信(調査課長)

指 導 田海 義正(調査課試掘確認調査担当課長代理)

調査担当 田海 義正(調査課試掘確認調査担当課長代理)

職 員 田中 一徳(調査課嘱託員)

B 本発掘調査・整理作業

1) 調査・整理の経過

平成18年8月後半から本発掘調査に着手するため、7月下旬に事務所設置等の事前準備に取りかかり、8月1日から開果掘削を開始した。開果の設定は調査区の全周ではなく、谷奥ならびに排水路からの湧水が予想される南側および西側にのみ限定した。試掘確認調査の結果から、現地表から包含層までの堆積が平均1.6mと厚いことが判明していたため、法面の勾配を1割5分と緩めに設定しながら開果を掘削した。地元住民からは、遺跡から排出される濁水への強い懸念の声があがっていたため、開果底面に幅1m×深さ0.5mにわたって直径40mm以上の玉砂利を敷設すると同時に、調査区脇に沈砂地を設けて排水の滤過に努めた。

表土は、調査員立会いのもと重機により掘削した。途中、V層およびV'層から平安時代の遺物が出土したことから、一部人力で慎重に発掘を行った。しかし、遺物の出土量は少なく、また遺構プランを確認することができなかつたため、そのまま重機による掘削を継続して8月28日に表土除去を完了した。包含層であるVI層の掘削は8月29日から開始した。ホソや竹べらを併用しながら慎重に進めた結果、遺物の分布には粗密が認められ、限られた範囲に遺物が集中することが分かつてきた。そこで、遺物が集中する地点の下に遺構が検出されることを想定し、ベルトを残しながら包含層調査を進めた。その結果、遺構の落ち込みなどを確認することができなかつたが、古式土師器がその場で潰れたように出土する例が多かつたことから、遺物が特に集中する地点を「遺物集中ブロック」と認定し、3次元データで出土位置を記録しながら遺物を取り上げた。11月9日には、調査区中央に存在するNTTの電柱を移設し、残りの表土・包含層を除去した。同時並行で発掘調査を進めていた山岸遺跡の工程と調整しながら遺物包含層除去・遺構精査を進め、11月18日には航空写真を撮影した。ところが、調査も終盤となつた11月23日、遺物が帶状に出土していることが41Nグリッド周辺で確認された。そこで、念入りにその周辺を遺構精査した結果、1辺約6mのコ字形の方形区画溝(SD004)を検出することができた。方形区画溝が建物跡となる可能性を考慮して入念に精査したが、柱穴などの付属施設を検出することはできなかつた。方形区画溝からは古式土師器を中心に、玉の素材剥片や内磨砥石などの遺物が大量に出土した。その後、調査区

を横断する深さ 2 m のトレンチ 2 本を重機で開削して、遺物・遺構が隠れていないかの最終確認を実施したが、何も発見することができなかった。そして 12 月 8 日には全ての調査を終了した。

整理作業は、調査と平行しながら進めた。遺物の水洗および注記の一部までを調査現場事務所で行い、注記、接合・復元、実測、写真撮影は(株)みくに考古学研究所で行った。接合・復元作業を進めるなかで、予想以上に多くの土器が復元実測対象になることが判明した。さらに、糸魚川地域では、図化された古墳時代前期の土器が少ないと鑑み、器形が分かる遺物についてはできるだけ多く実測することに努めた。土器実測は次のような工程で行った。
①工具痕や調整単位をチャコペンで器面に明示する（調査担当）。
②デジタルカメラで撮影のうえ、別に実測した器形と写真を照合しながらゆがみを補正する（調査補助員）。
③補正した写真をもとに、ハケメやミガキなどの単位を割り付け、下図を起こす（調査補助員）。
④下図をもとに、土器を観察しながら実測図を完成させる（調査担当）。これら 4 つの工程を効率良く進めた結果、調査担当 1 名・調査補助員 2 名の計 3 名で、約 2 ヶ月間のうちに 170 個体の土器を図化することができた。
また、調査担当一人の観察視点で図化したため、観察基準を統一することができた。

2) 調査・整理の体制

期 間 平成 18 (2006) 年 8 月 1 日～12 月 6 日 (本発掘調査)

平成 18 (2006) 年 10 月 1 日～平成 19 (2007) 年 3 月 31 日 (整理作業)

調査主体 新潟県教育委員会 (教育長 武藤 克己)

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 武藤 克己)

總 括 波多 俊二 (事務局長)

管 理 斎藤 荘 (総務課長)

庶 務 長谷川 靖 (総務課主任)

調査総括 藤巻 正信 (調査課長)

指 導 寺崎 裕助 (調査課担当課長代理)

調査担当 渡邊 裕之 (調査課班長)

職 員 入江 清次 (調査課主任調査員)

支援組織 株式会社みくに考古学研究所

現場代理人 関 健二

調 査 員 實川 順一 桑原 健

補 助 員 寺口由美子 富沢由美子 桑原 淳子 今成 京子 貝瀬あゆみ

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

横マクリ遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南は長野県、西は富山県と接する。糸魚川は、古くから松本街道（一部国史跡）の起点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里（120km）におよぶ険陥な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県に通じる国道148号線・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点にあたる交通の要所となっている。

糸魚川市には、ほぼ南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁にある「糸魚川一静岡構造線」があり、この構造線を境界にして地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～二疊紀に至る青海一蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海一蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変斑構岩などが介在する複雑な構造を有しており、ひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ひすい輝石岩は小滝川や青海川で産することが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以東の地層は、主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なることがわかる。このことが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらに言語・風俗文化にも影響を与えることとなったといわれている。

市域の南側には、飛騨山脈の北延主稜と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山（2,769m）をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」であり、東西文化の障壁となつた。石灰岩からなる黒姫山（1,221m）・明星山（1,188m）では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞（513m）など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山（1,963m）や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には本県唯一の活火山である焼山（2,400m）が位置する。標高400m以下の小起伏山地では、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水水量が増大する融雪期・梅雨期・初冬などには、崩落・地すべりが発生する〔鈴木2000〕。地すべり等防止法制定のきっかけとなった棚口地すべり（1947年発生）など、著名な地すべり地が多い地域でもある。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流して日本海に注ぐ。中でもこの地方最長の一級河川である姫川は、長野県青木湖北部の湿地を源流とし、全長60kmに及ぶ。これらの河川沿いには河岸段丘がみられるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1982〕。高位の段丘には繩文時代～弥生時

代、低位の段丘には繩文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている〔寺崎1988〕。

これらの河川はいずれも急流で、かつ海底が深いため、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平坦地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東～南西に平滑に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅300m、最大高11.5mを測る〔鈴木1982〕。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く立地している。

2 歴史的環境

糸魚川市域における古墳時代・古代・中世の主な遺跡分布は、第4図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区（旧糸魚川市域）では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であることが明らかになっている。居住に適した平坦地が限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、横マクリ遺跡に関連する弥生時代～中世の遺跡について概観する。

弥生時代

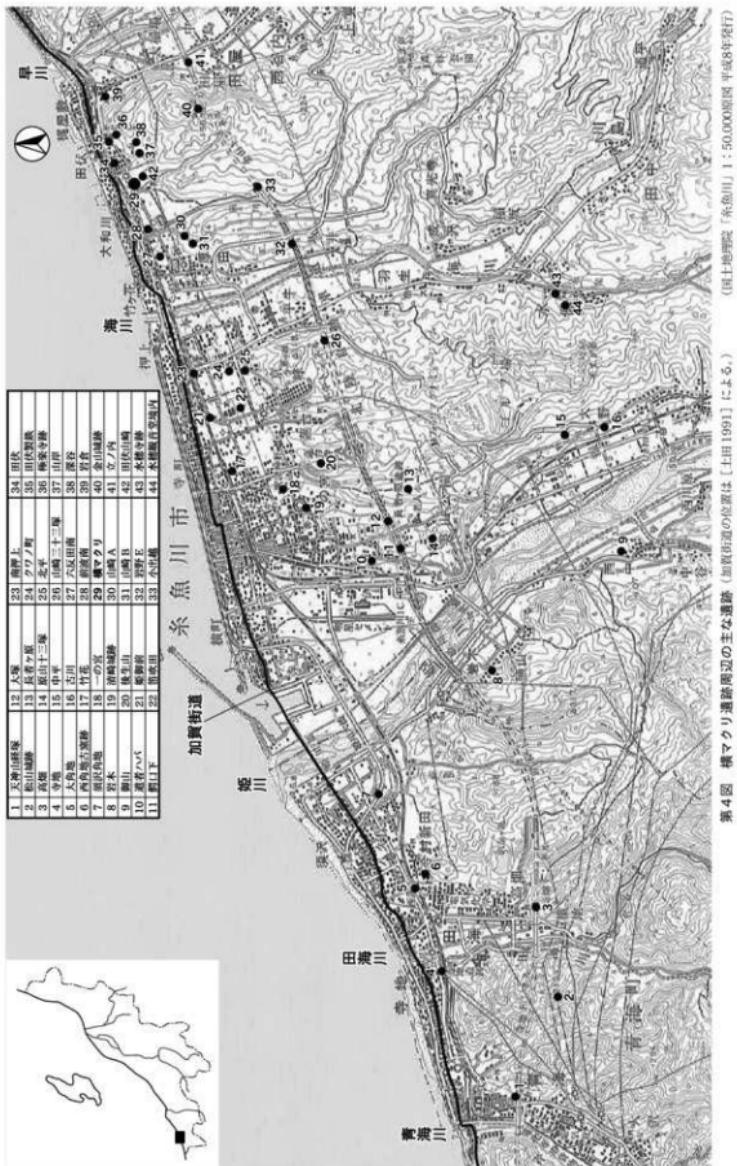
現在確認されている糸魚川市域の弥生時代遺跡はわずか数遺跡を数えるに過ぎない。そして、遠賀川系土器を出土した弥生前末の大塚遺跡(12)を除き、一の宮遺跡(18)、後生山遺跡(20)、笛吹田遺跡(20)など、弥生時代後期～古墳時代前期にかかる遺跡が多くを占める。また、全ての遺跡で玉作関連資料が確認されている点が特徴的である。沖積地を見下ろす段丘上に立地するのは後生山遺跡と大塚遺跡に限られ、多くの遺跡が沖積地に立地する。横マクリ遺跡と同時に発見され、発掘調査された田伏山崎遺跡(42)は、狭い谷の中に立地する弥生後期～中世における複合遺跡であるが、低地を指向した当該期遺跡の様子を良く示しているように思われる。なお、横マクリ遺跡から出土した弥生時代後期・古墳時代後期の遺物は、田伏山崎遺跡に由来するものと想定される。

横マクリ遺跡では40点を越える内磨砥石が出土したが、弥生前期の大塚遺跡からも、砂岩製の横長剥片を素材とした内磨砥石が定量出土している。特筆されるのは、大塚遺跡から出土した内磨砥石の縁辺部には、砥面再生のための連続的な剥離が確認されている点である。同遺跡では、ヒスイや滑石を素材とする玉作が行われていることから、筋砥石といった他の器種と同様に、内磨砥石もまた長期間にわたって使用された石器であると言えるだろう。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作に関連する遺跡が多いのが特徴である。

笛吹田遺跡(22)は、前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔安藤ほか1978〕。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴住居や棒・木製釣瓶を伴う井戸の検出、琴柱状石製品の出土などの成果が注目されている。



第4図 横マクリ運路周辺の主な道路（加賀街道の位置は「土田1991」による。）

(国土土地院「糸魚川」1:50,000縮尺図 平成8年発行)

大角地遺跡（5）は、昭和10（1935）年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となって学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」〔寺村1966〕の標識遺跡として知られるようになった。昭和45・48（1970・73）年には、都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、工作用特殊ビットをもつ玉作工房跡が検出され〔寺村・安藤ほか1979〕、前期～中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している。また、平成17年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土している〔加藤ほか2006b〕。

田伏遺跡（34）は、中期～後期の遺跡である。昭和45（1970）年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている〔閔1972〕。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。

一の宮遺跡（18）は天津神社境内に所在する。大正8（1919）年に高橋健白氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔円版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。祭祀遺跡とみられる一の宮遺跡〔船山1972〕から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている〔閔1972〕。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に掲載される「奴奈川神社」に比定されるものと考えられており、奴奈川姫が祀られている。

古　　代

古代には、新潟県一帯は越国の一都であった。『日本書紀』持統6（692）年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝2（702）年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されているが、この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられ、さらに和銅元（708）年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5（712）年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の南西端に位置し、天平勝宝4年（752）10月造東大寺司牒（正倉院文書）に頸城郡の郡名がはじめて見えるが、『和名抄』（東急本）には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は10郷が記されており、横マクリ遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。天平勝宝年中（749～756）の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』（1907年）では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶴石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とあり、他駅が5疋に対して越中国佐味駅と並んで8疋が多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推定される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区（旧青海町域）における古代の遺跡は、集落跡と窯跡がある。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡（7）は、昭和62（1987）年・平成17（2005）年に発掘調査が実施され、7世紀末～9世紀前半の

集落跡であることが明らかにされている〔土田ほか1988、辻2006〕。また、須沢角地遺跡の西南西1kmの丘陵裾には西角地古窯跡（6）が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており〔寺村・安藤ほか1979〕、8世紀末～9世紀初頭前後の窯跡と考えられている〔春日1998〕。糸魚川地区（旧糸魚川市域）の道者ハバ遺跡（10）では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・綠釉陶器が多く出土しており、当方の中心的役割を担った遺跡と推定されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。このほかに8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡（33）〔鈴木ほか1988〕、多数の製塙土器が出土した立ノ内遺跡（41）〔高橋1988〕、数百点に及ぶ土師器の廃棄土坑が注目される山崎A・B遺跡（30・31）〔木島2007〕などの調査事例がある。

中 世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間（1573～1582）頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている〔平野・渡辺1968〕。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡（2）は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・掘郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚（1）は、1919（大正8）年に調査され、仁安2（1167）年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている〔金子1975〕。

糸魚川地区では、御山遺跡（9）・中平遺跡（15）・古川遺跡（16）・水保観音堂境内（44）・北平遺跡（25）・クワノ町遺跡（24）・竹花遺跡（17）・山崎A・B遺跡（30・31）等が知られており、観音菩薩立像（重要文化財）を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類が出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている〔山岸・田村2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚（14）〔木島1989〕や山崎三十三塚（26）〔木島1989〕が分布する。

当地域の中世遺跡については調査事例が少なく、その実態は必ずしも明らかでなかったものの、近年の北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数の遺跡が存在することが明らかになりつつある。特に、多量の木製品が出土する実態が、山岸遺跡（37）〔渡辺2007〕、寺地遺跡（4）〔相羽2002〕、姫御前遺跡の調査事例によって明らかにされつつある。木製品が特定の範囲から多量に出土する上、箸状・棒状の製品が地面に突き刺された状態で検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀行為が行われていたことを窺い知ることができる。今後の調査の進展によって、糸魚川地域における中世社会の一端が明らかにされていくものと期待される。

第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定（第5図）

横マクリ遺跡の周辺では、4遺跡6地点の発掘調査が同時並行で進められた。国道8号系魚川東バイパス事業では本遺跡と山岸遺跡II（カルバートボックス建設予定地）の2遺跡、北陸新幹線事業では山岸遺跡I・深谷遺跡・田伏山崎遺跡（尾根地区・沢地区）の3遺跡がそれに該当する。これらの遺跡は、樹枝状の入り組む谷底と尾根上に立地し、「遺跡群」として有機的関係にあることが予測される。今後、この地区的試掘確認・本発掘調査が進むに従い、さらに多くの遺跡が発見されると想定され、遺跡間の位置関係を正確に把握することが肝要であると判断された。そこで、田伏地区で最も早くに調査を開始した山岸遺跡Iの基準線を活用して、横マクリ遺跡を含めた周辺の複数の遺跡をカバーするようなグリッドを設定することとした。具体的には、北陸新幹線のセンター杭である210K000杭（第5図、世界測地系X=116576.868, Y=-52790.894）と210K140杭（世界測地系X=116555.410, Y=-52929.240）を結んだラインを主軸として、それに直行するように南北方向のグリッド線を設定した。主軸は真北から7°30'西偏している。

グリッドには大小2種類があり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは西から1・2・3・4、南からA・B・C・Dと呼称し、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドは1～25の算用数字で示し、南東隅が1、北東隅が25になるよう配置した。なお、グリッド設定の基準点である第5図210 K000杭は9D1グリッド、210K140杭は23D1グリッドに該当する。横マクリ遺跡は39～43・M～Pグリッド列の範囲内に位置し、40M1グリッドは世界測地系X=116968.915, Y=-53391.275、41P1グリッドは世界測地系X=116997.027, Y=-53405.755になる。

2 微地形と基本層序（第6・7図）

本遺跡の遺構確認面までの掘削深度は、現地表下約2mにおよぶ。この厚い地層をI～VII層に大きく区分し、さらには混入物や土質・色調・粒度の大きさなどからI層・IV層・V層を細分した。特徴的なのは、砂あるいは砂礫層が複数層認められることで、I～V層を分層する指標であると共に、離れた地点の土層を対比するうえでの鍵層としても活用した。砂礫層は地点により粒度の大きさが様々であり、また人頭以上の巨礫を含む場所も認められた。また、砂礫層の底面付近は激しく凹凸をなし、細砂とシルトが互層なっていた。これらの観察結果から、砂礫層は、土石流や激しい流水などの大きな營力によって上流から流されてきた堆積物であると判断した。なお、本遺跡が立地する谷は、現在も土石流警戒地域に指定されている。

古墳時代前期末の遺物包含層であるVI層は、地点によって厚さに違いがあるものの、平均20cm前後の堆積が認められ、遺物のほとんどが上部約10cmからの出土であった。しかし、わずかではあるが、層下部から出土した遺物も確認されており、本来は分層されるべきであったかも知れない。平安時代の遺



物包含層であるV層およびV'層からはコンテナ1箱にも満たない量の遺物が出土した。V'層は多くの砂礫を含むと同時に、自然流路（SD001）とほぼ同じ分布域を示すことから、自然流路に伴う堆積土であろうと判断した。

本遺跡は、南東から北西に向かってかなり急激に傾斜する微地形を示し、その比高差は1.2mに及ぶ（第6図）。また、調査区のなかで最も低い地点にあたる41Pグリッド（第7図）では浅い落ち込みが認め

られ、腐植土層（いわゆるガツボ：SX003）が形成されている。腐植土層の直上には他地点では認められない細砂礫層も堆積しており、この地点に自然流路や湿地状の窪地が存在したことを示している。腐植土層中から土師器が出土しており、また、古代以降の包含層であるV層中で検出されたことから、平安時代以降に帰属することが明らかである。ただし、41Pグリッドにおける遺物出土状況や、試掘確認調査結果が示すとおり、北側に行くほど古墳時代の遺物も希薄になることから、古代に限らず、41Pグリッド北側隣接地が遺跡の限界となる可能性が高いと考えられる。

以下、各土層の特徴は次のとおりである（第7図）。

I a層：盛土 灰オリーブ色粘質シルト（5Y5/2）

鉄分の沈着が認められる。I b層との境界が不明瞭で、分層できなかった地点もある。

I b層：耕作土 灰色粘質シルト（5Y6/1）

鉄分の沈着が認められる。

砂 層：灰オリーブ細砂層（5Y6/2）

しまりあり、粘性なし。

青灰色シルト（10BG5/1）や灰オリーブシルト（5Y5/2）などをマーブル状に含む。

鉄分の沈着が認められる。

I層とII層の分層するうえで鍵層となるが、場所による層厚の違いが大きい。土層の底面が激しく凹凸をなす。

II 層：灰色粘質シルト（5Y4/1）

直徑5～10mmの小礫を少量ながら一面に含む。鉄分の沈着あり。

砂礫層：オリーブ褐色砂（2.5Y4/6）・灰オリーブ細砂（5Y6/2）・灰シルト（5Y4/1）の互層。

細砂と灰色シルトの互層を中心として、その上下にオリーブ褐色砂礫層が堆積する。

直徑5～20mmほどの砂礫を多く含み、しまりがある。土層底面が凹凸に富む。

II層とIII層を分層する鍵層となり、調査区全体にわたりほぼ一様に分布する。

III 層：黒褐色シルト（2.5Y3/2）

しまり弱く、粘性ややあり。未分解の植物遺体および炭化物粒子（長軸2～3mm）を一面に含む。

細砂層：灰オリーブ細砂（2.5Y4/6）

層厚は一定せず、また調査区のなかでも出現する場所が偏在する。灰色シルトと細砂がマーブル状に混ざりあう。層底面の凹凸が激しい。

IVa層：黒褐色シルト（2.5Y3/2）

しまり弱く、粘性ややあり。

炭化物粒子（長軸2～3mm）と灰黄色粒子（2.5Y7/2）を少量ながら一面に含む。

灰黄色粒子から火山ガラスが検出された。

細砂層：灰オリーブ細砂（2.5Y4/6）

炭化物・灰黄色粒子（火山灰）を少々含む。

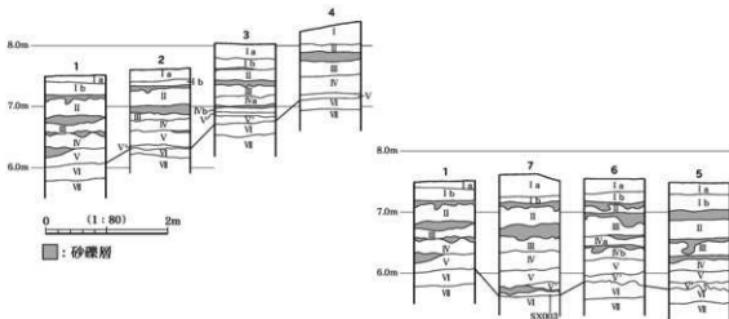
IVb層：黒褐色シルト

IVa層と基本的に同じくする。灰黄色粒子の形状がIVa層に含まれるものよりも大きく、含有率も多い。なお、細砂層が存在しない地点ではIVa層とIVb層を分層することができない。

V 層：黒褐色粘質シルト 平安時代～中世の遺物包含層



第6図 遺物出土状況および地区設定図



第7図 土層柱状図

灰黄色ブロックを多く含む。炭化物をIV b層よりも多く含み、粒子状からブロック状（長軸約2cm）まで様々な大きさをなす。

V 層：暗オリーブ褐色砂質シルト（2.5Y3/3） 平安時代～中世の遺物包含層
しまりあり、粘性なし。凝灰岩の小礫（直径1～3mm）を多く含み、土層の表面を鎌で引っ掻くとカリカリと音がする。

VI 層：青灰色シルト（10BG5/1） 古墳時代前期の遺物包含層 弘生時代後期末・古墳時代後期の遺物も僅かに含む。凝灰岩粒子が一面に混入する。炭化物粒子を多く含む地点が存在するが層は形成しない。遺物はV層でも上部に多く包含される。

VII 層：青灰色砂礫または砂質シルト（10BG5/1）。遺構確認面。
しまりあり、粘性なし。場所により大きく土質が異なり、VI層との境界が不明瞭な地点もある。

第IV章 遺構

1 概要

調査で検出した遺構は古墳時代の方形区画溝1基のみである。試掘確認調査では土坑1基が検出されたと報告されている(第I章2A参照)が、本発掘調査の結果、遺構と判断するには至らなかった。明確な遺構は確認できなかつたが、その一方で、大量の古式土器群が複数の集中地点を形成しながら出土した。そこで、当時の人々が残した活動の痕跡としてこれら土器集中地点を積極的に評価し、「遺物集中ブロック」として遺構に準じて取り扱うことにしたい。本遺跡で検出された遺物集中ブロック群は、大きく4つのまとまりとして捉え直すことができるため、これらをI~IV区と呼称し、以下では各地区の出土状況についてやや詳しく説明する。なお、出土した多くの遺物は、電子野帳を使用した測量によって1点づつ取り上げ、3次元データの「ドット」として図示した(第6図)。しかし、出土遺物が幅属する小グリッド(2×2m)ごとでまとめて取り上げた遺物も定量存在しており、本遺跡で出土した全遺物を「ドット」として図示しているわけではない。また、遺物集中ブロックの名称は、調査時に付与した呼称名をそのまま使用しているため、欠番が存在することに注意願いたい。

明確な遺構を検出できなかつた本遺跡を理解するには、同一個体破片の分布状況が肝要である。そこで、整理作業を進めるにあたっては遺物の接合関係の把握に努めた。その結果、同じ遺物集中ブロック内における接合が一般的に認められる一方、異なるブロック同士の接合は少数に限られることが判明した。よつて、図示するにあたっては、異なるブロック間の接合例のみを取り上げ、同一ブロック内における接合関係については煩雑さを避けるため1部しか図示していない。接合例は実線で、明らかな同一個体であるものの接合しない例は破線で示した(第8・9・12図)。なお、整理作業が短期間に限られていたため、接合作業は実測個体を中心に行い、悉皆的に接合関係を確認したわけではないことを付記しておく。

I・II区とIII・IV区は、調査区西南隅(39Mグリッド付近)から東隅(420グリッド付近)に伸びる馬の背状の狭い微高地を境にして東西に分かれるように分布する。遺物集中ブロックに隣接して自然木の根株が複数地点で検出されたことから、両者が何らかの関係性を持っている可能性を考慮し、全ての根株の範囲を測量のうえ図化した(第6図)。II区ブロック10に隣接して検出された根株の年代測定結果は6世紀後半~7世紀前半(第VI章自然科学分析参照)とされ、古墳時代後期~奈良時代に相当する年代値が示されている。よつて、根株と遺物集中ブロックの関係を積極的に評価することができない。しかし、測定試料は最外年輪から採取したものであり、測定値は枯死年代を示すものであることに注意する必要があろう。

なお、平安時代の自然流路および湿地状地についても便宜上本章で記述する。

2 古墳時代

A 方形区画溝(SD004)(図版2、22-12~14、24-32~25-36)

41N・Oグリッド周辺から検出された。南側に開口するコ字状のプランを持ち、調査区外へとさらに伸びることが北壁セクションE-E'で確認されている。検出面での溝の長さは6~6.5m、幅は20~

30cm、深さは7~12cmである。溝で区画された内部の面積は約33m²となる。覆土はオリーブ黒色粘質シルトで、遺物包含層であるVI層や地山であるVII層よりも微かに黒味があり、やや粘性が強い。覆土中に炭化物を含む点が特徴的であるが場所によって異なる。特に、セクションC付近では比較的大きな炭化物片が多く認められ、この周辺から出土した土器には炭化物がべつとりと付着していた。調査当時、遺物集中ブロックを中心にして何處か精査を行い遺構の検出に努めたが、土質の違いから遺構プランを発見することができなかった。ところが、電子野帳による測量のために柱状に残っていた遺物の出土状況を改めて確認したところ、ある特定の範囲で遺物が帶状に分布することに気づいた（図版22~13）。そこで、その地点を中心に精査を進めたところ、VI層と微かに異なる土質を認めるに成功し、それをもとに本遺構のプランを確定することができた。よって、帶状に出土した遺物は全て本遺構の伴うものと考えられ、また、遺構確認面から10cm以上浮いた状態で出土した遺物がある（図版25~34）ことから、本遺構の本来の深さは少なくとも20cm以上あつたものと推測される。

本遺構が建物跡の可能性が高いと考えられることから、柱穴に該当する遺構がないか、溝の内外を慎重に探索した。その結果、東側の溝を斜めに横切るように直線状に並ぶ直径15cm程度の円形プラン5基を検出することができた（図版25~35）。しかし、半裁のうえ断面を観察したところ、明瞭な立ち上がりが認められず、明らかに遺構と判断することができなかった。そのため、記録化せぬまま調査を終えた。しかし、遺構の検出が極めて難しい調査状況を勘案すると、これら円形プランが遺構であることを全く否定することもできない。よってここでは、円形プランの位置をスクリーントーンによって示し、遺構の可能性があるものとして図示することにする。なお、円形プランの位置は、調査当時のメモから転記したものであり、SD004との位置関係を正確に反映したものではない。

B 遺物集中ブロック（第8~12図）

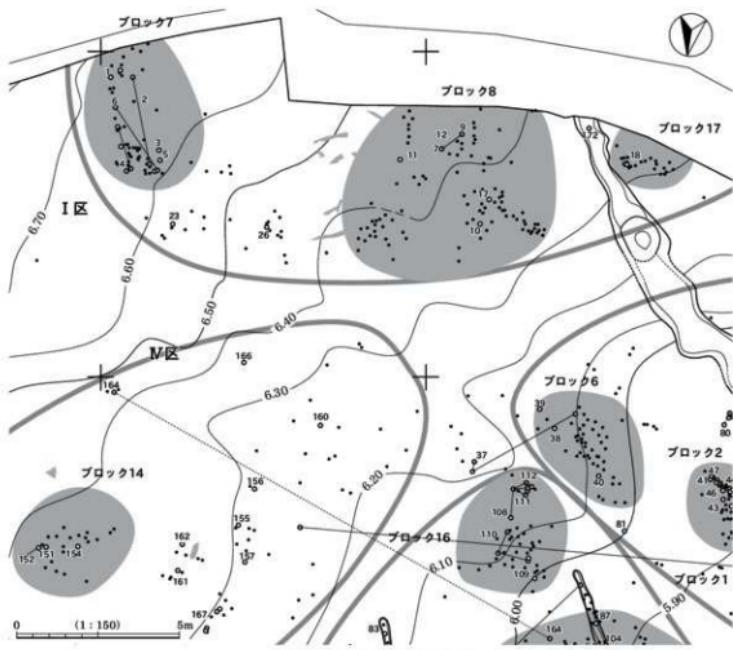
1) I 区（第8図、図版22~10、23~18~22）

ブロック7・8・17の3つの集中域が存在し、それぞれが南側調査区外に延びることが明らかである。異なるブロック同士の接合関係は確認できなかった。

ブロック7は、少数の甕の口縁部破片が原型をとどめて出土した以外、小破片での出土が多い。特筆されるのは大型の筋砥石199（図版13）が出土している点である（図版22~10）。199は1条の筋を形成した砥面を上にして土器破片に混じって出土したが、表面および裏面には貝殻状剥片の剥離痕が明瞭である。大型砥石であることから、住居床面に据え置かれた可能性を想定して遺構精査に努めたが、プランや掘り込みを検出することはできなかった。ブロック8はI区のなかで最も大きなブロックである。いくつかの甕がその場で潰れたようにまとまって出土しており復元率が高い。甕17（図版4）は、口縁部～胴部上半までがほぼ原形を保ちながら直立した状態で出土した（図版23~19）が、胴下半～底部を欠く。ブロック17は最も規模の小さい遺物集中区で、破片が多く、図示できたものは器台18（図版4）1点である。

2) II 区（第9~11図、図版22~15、23~23~31）

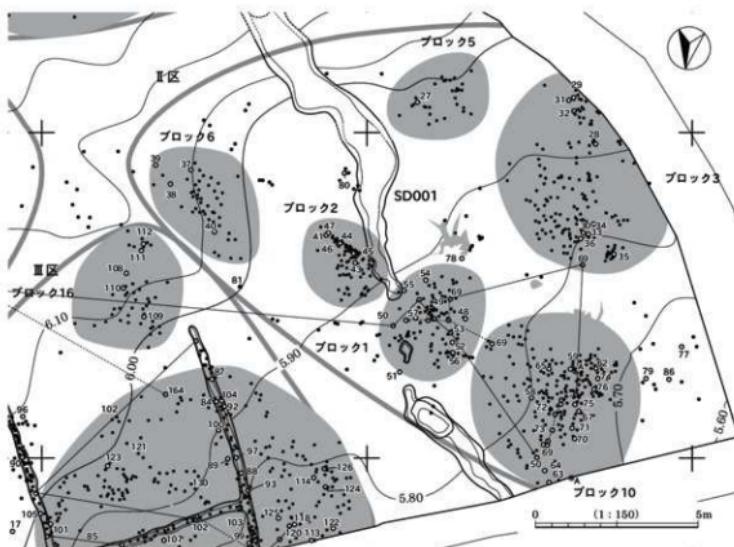
ブロック1・2・3・5・6・10の6つの集中域が認識され、ブロック3と10は調査区外に広がりを見せており。各ブロックは、南東から北西に向かって緩やかに傾斜する微地形の上に形成されており、他地区と比べてブロックの遺物集中度が高い点が特徴的である。ブロック1・3・10の間で接合関係が認められ、各ブロックの形成時期が近接していたことを窺わせる。特筆されるのは、ブロック1出土の高杯



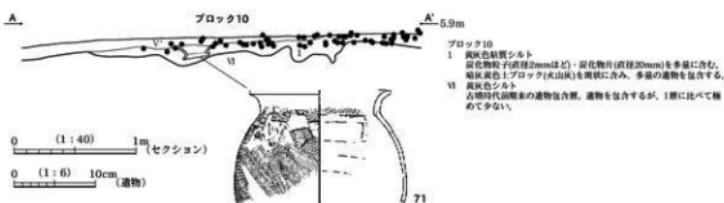
第8図 I・N区遺物出土状況

50(図版5)が、近接するブロック10のほかに、約15m離れたIV区との間で同一個体破片を共有することである。杯部がブロック1と10から、脚部がIV区から出土しており、接合状況のあり方には人為的行為を窺わせるものがある。このことについては第VII章で改めて詳述したい。

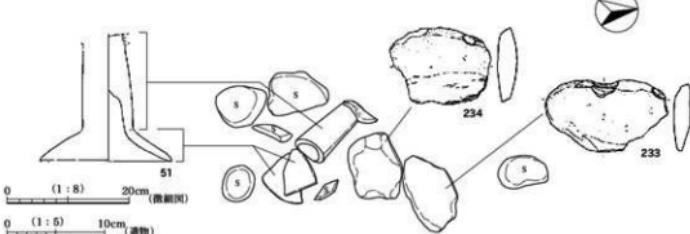
ブロック1は調査初期に検出した遺物集中区で、平安時代の自然流路であるSD001と重複関係にあり、部分的に遺物の空白域が生じている原因是SD001に削平された結果と判断できる。遺物は破片での出土状態が多く、復元率もそれほど高くない。高杯脚部と「内磨磁石」2点が近接して出土した(第11図・図版22-15)が、出土地点がSD001の流路に該当することから、原位置が保たれているか否かは不明といわざるを得ない。なお、遺物の周辺から一緒に出土した自然礫は、明らかにSD001の覆土に帰属するものである。ブロック2は帯状に分布する(図版23-25)のが特徴である。遺物を順次取り上げながら出土状態を観察した結果、検出当初のレベルでは破片資料が多く、それらを取り除いた後の最下部では、直立あるいは横倒しになった状態で4個体の甕が並んで出土した(図版24-26・27)。遺構の存在を考慮しながら精査に努めたが、溝などを検出することはできなかった。また、複数の甕が意図的に並べられていた可能性も推定され、同様の事例はブロック8で検出した甕17(図版4)などでも認められている。しかし、いずれの場合も底部を欠く点には注意しなければならない。ブロック3は遺物の出土状況に粗密が顕著に認められ、ドットが集中する地点は、同一個体破片がまとまって出土した場所である。甕35(図版4)など、その場で潰れたような状態で出土した例が認められた(図版23-23・24)。ブロック5はII区のな



第9図 II区遺物出土状況



第10図 ブロック10 セクション図

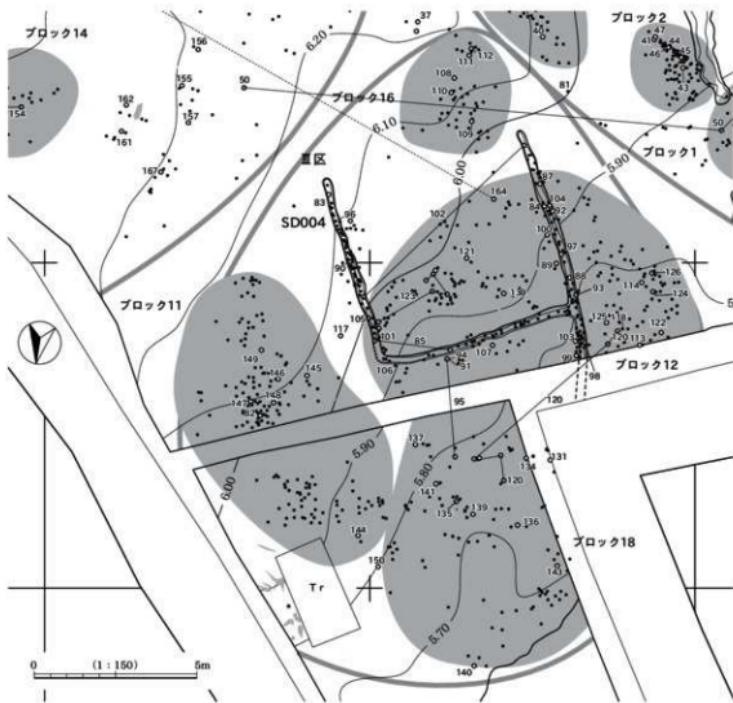


第11図 ブロック1 高杯・内磨砥石出土状況

かで最も規模の小さな遺物集中区であり、図示できた土器は甕27(図版4)1個体のみである。しかし、石器の出土量は本遺跡のなかで最も多く、玉未成品2・滑石製剝片55・ヒスイ原石1などの玉関連遺物が認められる(第12表)。ブロック10は、II区のなかで最も遺物の密集度が高く、図示できた土器も19点と最も多い。ブロック5に次いで玉関連製品の出土量が多く、管玉未成品1・内磨砥石3・平砥石1・滑石製剝片47が確認されている(第12表)。本ブロックで特徴的なのは、遺物が特に集中する地点を中心に大量の炭化物が含まれていたことで、周辺土壤とは明らかに異なる様相を示していた(図版21~7)。遺構の可能性を想定し、土層観察用のベルトを残しながら遺構精査を進めたが、床面や立ち上がり・焼土・柱穴といった明確な人為的痕跡を確認することができなかった(第10図、図版24~31)。遺物の出土状態には、その場で潰れたようなものや、口縁部~胴部上半がほぼ完存する甕が倒立状態で出土した例(第10図)が認められたが、遺物の密集度や出土量の多さを除くと、他のブロックと比べて極端に異なる要素があると判断することはできなかった。

3) III 区(第12図、図版25~37~26~42)

ブロック11・12・16・18の集中域が認定されたが、12・18は遺物の分布状況や接合関係などか



第12図 III区遺物出土状況

ら、本来は同じ遺物集中ブロックと認識すべきものであろう。またブロック11も、1部でブロック18との連続性が認められことから、ここで示したブロックの範囲は便宜的なものと言わざるを得ない。本遺跡唯一の遺構であるSD004はブロック12と重複関係にあるが、両者の前後関係は明らかではなかった。ただし、甕123（図版9）がSD004内外出土土器片で接合関係にあることから、ブロック12の形成がSD004埋没時とほぼ同時期であった可能性がある。他地区の遺物出土状況と同様に、Ⅲ区の各ブロックもまた甕を中心に同一個体破片がまとまって出土する状況が目立って観察された（図版25～39など）。本地区で最も特徴的なのは、1個体分の甕の破片が他の器種からやや離れた地点でまとめて出土する点である。ブロック18からは甕135（図版10）、ブロック11からは大型甕149（図版11）がほぼ単独に近い状態で出土している。さらに、ブロック12とブロック18で接合する甕120（図版9）は、大部分の破片が前者で出土し、少ない小破片のみが後者から出土するという状況を確認することができた。完形に復元できない点や、甕のなかでも口縁部から胴部上半にわたる大型破片がまとまって出土する例があることなどから、これらの事例に特別な意味合いを持たせることは妥当性を欠くが、他の器種とやや離れてまとめて出土する点に注目したい。

4) IV 区（第7図、図版26～43～45）

本区で認定できた遺物集中区はブロック14のみであるが、他地区的ブロックに比べて遺物の集中度が低い。出土状態で特徴的であったのは、器台2点が並んで出土したことである（図版10、図版26～43）。152は脚部を欠き、151は破片のまとまりとなって出土したが、共に受部を南側に向けて横倒しの状態であった。両者の間には拳大の扁平な円碟が並んで出土したが、加工が認められなかつたため図化していない。接合状況はブロック内で完結するのがほとんどである。しかし、ブロック外から出土した土器に目を向けてみると、大型甕164（図版11）がブロック12出土土器と同一個体を共有し、また、高杯50（図版5）がブロック1と接合関係にあることが判明している。両資料共に約15mの距離を隔てており、本遺跡で確認されたなかで最も遠距離で接合または同一個体共有の確認例にあたる。さらに、それぞれの地点で出土した土器片には部位としてのまとまりが認められることから、人為的行為による可能性が高い。この点については、第VII章において詳述する。

3 平安時代以降

A SD001（図版2、26～46～27～50）

古墳時代の遺物包含層であるVI層上面で検出された自然流路である。平安時代の遺物はSD001覆土ならび流路周辺から多く出土している。検出面における流路の深さは一定せず、最も深いセクションA-A'地点では約40cm、B-B'地点では約25cmと幅があり、途中途切れるか所も存在する。覆土は砂質の強い黄褐色砂質シルトで、層位によっては拳大以上の円碟を含んでいる。このことからかなりの営力によって形成された流路であると推測される。少量ながら出土した遺物は覆土上層で検出され、古墳時代前期の土器が混入するほか、墨書ある須恵器杯（171）・土師器楕（172）などがある。また、箸状（182）・円盤状（184）・エブリ（188）などの木製品はSD001周辺のV'層から出土しており、本遺構に伴う可能性がある。

B SX003 (図版2、27-52)

調査区北西端で検出された黒褐色腐植土層である。いわゆる「ガツボ」であり、かつてこの地点が湿地状をなしていたことが分かる。検出面はVI層で、腐食土層中から底部糸切り離し土師器片1点が出土している。SX003が調査区の最も低い地点で確認されたことから、平安時代以降のある時期には、調査区北西側隣接地に湿地が広がっていることが判明した。

第V章 遺物

1 概要

横マクリ遺跡から出土した遺物はコンテナ46箱（収納段階箱数）で、古墳時代前期（以下、古墳前期）がその大半を占める。他には、弥生時代後期（以下、弥生後期）、古墳時代後期（以下、古墳後期）の土器、古代～中世の陶磁器・木製品・古銭がわずかにあるのみである。主体となる古墳前期の遺物の多くが、14か所の遺物集中ブロックから出土した。すでに第IV章で触れたように、調査時には、遺物集中ブロックを造構覆土と想定しながら発掘を進めたが、造構と判断することができなかつた。唯一の造構と認定した方形区画溝（SD004）からも古墳前期の土器や石器が大量に出土しており、接合関係が認められることから、SD004と遺物集中ブロックの形成には関連があることを窺わせる。弥生後期ならびに古墳後期の土器は、古墳前期の土器と混在した状態で少量出土した。横マクリ遺跡の南西約80mには田伏山崎遺跡（第4回）が存在し、古墳時代後期の竪穴住居や弥生後期の遺物集中地点が検出されている。このことから、本遺跡で出土した弥生後期・古墳後期の遺物は、田伏山崎遺跡に由来する可能性が高いと考えられる。

古代以降の遺物はV～V'層を中心とした上層からの出土に限られ、弥生後期～古墳時代の遺物とは出土層位が明らかに異なっていた。V層から出土した「六」（「久」カ）と書かれた174（図版12）と同じ墨書き土器が、西約800mの距離にある山崎A・B遺跡から出土していることから、本遺跡との間には何らかの交流があったものと考えられる。

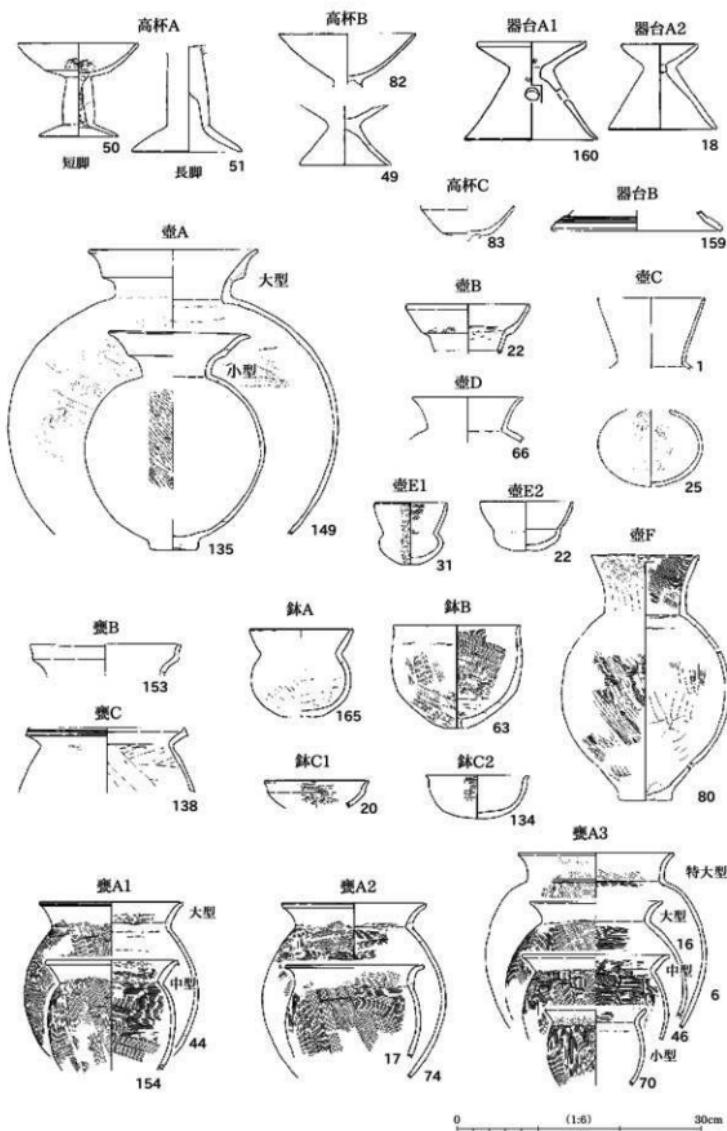
2 弥生～古墳時代

A 土器

1) 分類（第13図）

まず、高杯・器台・壺・甕といった大別器種ごとに分けた後、形態差をもとに細分する。大別器種の分類表示は、1次的分類をアルファベットで、2次的分類をアラビア数字で示した。また、分類項目同じにしながら法量に差が認められる壺Aと甕Aについては、小型～特大型の4つに分類した。なお、分類ならびに記述にあたっては、滝沢規朗氏の業績【滝沢2005b】を参考にした。

高杯 A・B・Cの3類があり、A類がほとんどを占める。高杯A類は、いわゆる「畿内系屈折脚」と呼ばれるもので、杯下半部で段を持ち、上半では外傾しながら口縁部に至る。脚部は柱状で、端部が八字状に外側へ強く屈折するのが特徴的である。杯部には若干の形態差が認められ、内湾しながら外傾するもの（図版5-50）と、やや外側へ反るように外傾するもの（図版6-58）とがある。後者は前者に比べて杯部下半の段の角度が鋭角気味となり、角ばったプロポーションを取る。脚部には、短脚と長脚、中空と中実が認められるが、共に前者が圧倒的に多い。高杯B類は、杯部が段を持たず楕円形をなし、脚部は低く、大きく踏ん張るように外側へ張り出す。脚部は中空のみで、中実は確認できなかつた。高杯C類は有稜内湾の杯部を持つもので、「東海系」とされるものである。図示した1点のみを確認することができた。



第13図 土器分類図

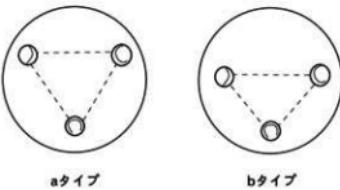
器台 A・B の 2 類があり、共に赤彩例が目立つ。器台 A 類は、短く直線的に外傾する受け部を持つ小型品で、口縁部形態の違いから A1 と A2 に細分した。A1 類は、口縁部を強くナデ調整した結果、上端部がつまみ上げられたもので、A2 類は上端部がつまみ上げられないものである。器台 A 類の脚部には透かしを持つものと持たないものがあり、透かしは 3か所に穿たれるものだけが認められた。透

かしの位置に注目してみると、その配置には次の 2つのタイプのあることが観察された（第 14 図）。a タイプ：透かし同士がほぼ均等な距離で配置されたもので、透かしを線で結んだ上面観がほぼ正三角形をなすもの。b タイプ：3つの透かしを結ぶ距離が 2辺で等しく 1辺で異なるものであり、上面観は二等辺三角形をなす。本遺跡で透かしの位置を確認できた 12 個体のうち、a タイプが 5 個体、b タイプが 7 個体とわずかに後者が上回った。両者を区別するには、三角形の低辺が脚部最大径よりも短いか（a タイプ）、ほぼ等しいか（b タイプ）かが指標となる。このことから、器台 b タイプが正面性を強く意識して製作された可能性が想定される。器台 B 類は有段の裾部に擬凹線文を施したものである。弥生後期に帰属する器種で、今回の調査では 1 個体のみが確認された。

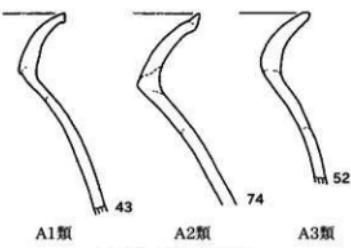
壺 A～F の 6 類がある。壺 A 類は、口縁部下端に段を持つ有段口縁壺で、口縁部は外側に大きく聞く。大型品と小型品があり後者が多い。壺 B 類は、A 類と同様に口縁部下端に段を持つが、口縁部が内湾しながら立ち上がる点が異なる。例数は少ない。壺 C 類は、球形の胴部に直立ぎみの口頭部がつくもので、いわゆる「畿内系長頸壺」である。壺 D 類は口頭部が短く外反する広口壺で、例数は少ない。壺 E 類はいわゆる「畿内系小型壺」で、口頭部と胴部の長さが等しいか、あるいは口頭部が長い器形となる。口径と器高がほぼ等しい壺 E1 類と、口径が器高を上回る壺 E2 類に分類することができ、前者が多い。壺 F 類は直立ぎみの頭部と緩やかに外傾する口縁部を持つ長胴の壺である。器壁が薄く、外面のミガキ調整が著しい点が特徴的で、弥生後期に帰属するものである。確認できたのは図化した 1 点のみである。

鉢 A～C の 3 類がある。鉢 A は、口頭部がくの字に外反し、底部は丸底気味か小さな平底をなすものである。形態的に壺 D に似るが、口頭部よりも胴部の比率が長い点から区別した。鉢 B はいわゆる「有孔鉢」で、底部中央に 1 孔を穿つ。例数は少ない。鉢 C は口縁部が短く外反する浅鉢である。身の浅い C1 と身の深い C2 の 2 者がある。内外面あるいは内面のみ黒色処理したものが認められる。古墳後期に帰属する器種であり、数個体の存在が確認された。

甕 A～C の 3 類がある。甕 A 類は、口頭部の形態から「く字甕」「コ字甕」と呼ばれるもので、本遺跡において最も主体となる器種である。口縁部の形態から A1～A3 に細分した（第 15 図）。甕 A1 類は口縁部が面取りされたもので、1 部では、口縁部下端が垂下して鉗状をなすものもある。甕 A2 類は、口縁内外を強くナデ調整した結果、つまみ上げられたような端部形態をなすもので、口縁内側は緩い凹線となる。口縁外側が凹線状に窪



第 14 図 器台脚部の透かし配置（上面観）



第 15 図 甕の口縁部形態

む資料が少なからず存在する。甕A3類は、端部が丸いものや面取りが顕著でないものを一括した。甕A類は口縁部から底部まで描う例がほとんどない。そこで、口径×胴部最大径を基準に法量について検討してみると、小・中・大・特大の4つの法量差を認めることができた（第1表・第16図）。滝沢規朗氏は、胴部最大径と器高の

相関を指標に、弥生後期～古墳前期の甕を小・中・大の3法量に分類した〔滝沢2005a〕。本稿の分類と比較すれば、小型と中型が滝沢氏の小型、大型と特大型が中型のサイズに該当する。指標とした計測部位が異なるため一概に比較することはできないが、本遺跡で全形を復元できた資料を見る限り、口径・胴部最大径と器高は比例関係にあることが窺われる。この結果、古墳前期の甕A類の法量において、滝沢分類がさらに細かく分かれる可能性を想定することができる。

2) 出土土器の観察と記述の方法

横マクリ遺跡から出土した土器のうち、実測図を作成した170個体に関する観察結果は上器観察表に記した。以下では観察結果の概要を示しながら、観察視点を明確化することに努めたい。また、SD004、ブロック10・11・12・18では、出土した全土器片3,525点について、口縁部残存率・破片数などを集計した（第2～11表）。なお、これらの集計には実測土器は加算していない。

器面調整技術 器面調整の表現方法については、基本的に横山浩一氏〔横山1959・1979〕・佐原眞氏〔佐原1964〕によって体系化された用語にもとづくが、いくつかの用語、特に甕の器面調整手法については次のような語彙で用語を使用した。なお、器面に顕在化される調整痕と使用工具・胎土との関係などについては、村田卓人氏による実験的研究〔村田1990〕を参考にした。

ナ デ：胎土の保水率が高い状態で、指や皮などの軟質工具を使用して器面を平滑に仕上げた結果生じた調整痕。器面では、浅い不規則な擦痕として顕在化される。

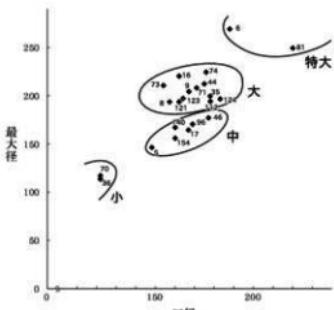
ナデツケ：細かい擦痕を残すという点ではナデに類似するが、ナデが、工具の単位が不明瞭であるのに対して、ナデツケは工具の単位（幅）を明瞭に確認することができる。同一器面上でハケメに酷似した浅い条痕とナデツケが共存する事例の存在から、両者は同じ工具を使用しながら、胎土の含水率の違いにより異なって現出したものであることが明らかである。土器の圓化にあたっては、ハケメとナデツケを描き分けることに注意した。ハケメとナデツケが共存する場合、観察表では「ハケメ・ナデツケ」と表記した。

本遺跡出土の甕の内面において、ハケメとナデツケと共に共存する例が多くあり、胎土が異なる乾燥状態にあって器面調整されたことが明らかである。また、外面にハケメ・内面にナデツケが認められる場合もまた、内外の器面が異なる状態において器面調整が行われたことを示すものであろう。

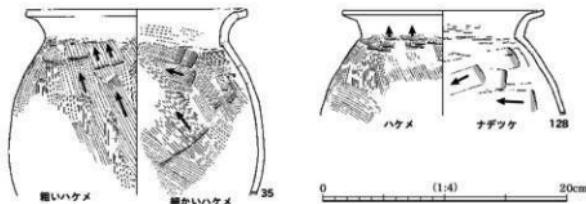
工具の移動方向・切り合い 甕の実測にあたっては、ハケメ・ナデツケ工具の移動方向ならびに単位の切り合い関係に留意した。工具の移動方向については、工具の端部が明瞭に残された部位（図版40-5）

法量	口径 (mm)	胴部最大径 (mm)
小型	122	114～118
中型	148～177	147～178
大型	154～183	194～225
特大	188～	250～

第1表 甕A類の法量分類



第16図 甕A類の法量分布図



第17図 器面調整と工具の方向

を移動の始まりと捉え、トレースでは強調して表現した(第17図)。また、できるだけ工具の切り合い関係の把握に努めたが、実際には不明であったものも多い。しかしながら、一部の甕では、特徴的な底部の調整手法を見出すことができた(第VII章1B参照)。

集計にあたっての留意点 本遺跡出土土器のうち、特に遺物が集中していた遺構1基と遺物集中ブロック4か所において、図示できなかった破片資料3,525点の口縁部残存率ならびに器種別破片数を集計した。しかし、小破片のため器種を判断できない資料も多く存在したことから、次のような一定の基準を設けた。なお、この集計にあたっては、作業時間との兼ね合いから、図化資料を含んでいない点に注意願いたい。

壺か甕: 外面はハケメ、内面はハケメあるいはナデツケが明瞭な資料について、器形から判断できないものは「壺か甕」と認定した。また、外面ハケメの上にミガキが認められる場合には壺と判断した。

高杯か器台: 外面のハケメが不明瞭である一方、内面のミガキが明瞭であり、赤彩が認められ、シルト質で精緻な胎土の破片は、器形が不明であっても「高杯か器台」と判断した。

3) 遺物各説

以下、I～IV区ごとに出土遺物を概述し、SD004は便宜的にIII区のなかで取り扱う。個別資料の属性については土器観察表を参照願いたい。

I 区

ブロック7(図版3・28)

壺(1～3) 1は壺C類、2は壺B類である。3は口縁部形態が不明であるため分類不可としたが、恐らくは有段口縁の壺Aに該当しよう。

甕(4～6) 4は大型甕A1類、5は中型甕A2類、6は特大甕A3に分類される。6は、4や5に比べて器壁がやや厚く、外面に施されたハケメの条間も広く粗い。頸部には1条のナデ調整が施されてハケメを消している。

ブロック8(図版3～4・28)

甕(7～12・16～17) 7は特大甕A3類、8・9は大型甕A3類である。本遺跡から出土した甕の口縁部外面では、器面調整の最終工程でハケメをナデ消すのを例とすると、工具の移動方向が不明なものが多い。しかし、9では頸部に工具の末端が明瞭に残っていたため、上部から下部に向かってハケメが施されたことが判断できる。切り合い関係は明瞭ではないが、肩部～胴部中位まで上→下のハケメを施し、

胸部下位では逆に下→上に方向が変わるようだ。8は、工具の移動によって胎土が搔き寄せられた結果、ハケメの方向が明瞭に確認できる例で、器面には塊状の胎土のまぐれが生じている。このような特徴を示す上器は本遺跡のなかでも他に類例がなく注目される。胸部上半は不明瞭だが、胸下半では下→上方向のハケメが明らかである。底部形態は尖底ぎみの極く小さな丸底で、胸部下位では明瞭な接合痕が認められる。さらに、砂粒の少ないシルト質の精良な胎土であり、他の甕とは異なる特徴を示している。8bと10cでは、底部の器面調整手順を確認することができる。共に小さな平底で、10では充填手法で製作されていることが断面観察から分かる。複数単位のハケメを同一方向のまとまりとして捉え、その切り合い関係に注目して底部を観察してみると、右→左方向のハケメの集合単位が、時計周りに展開することが分かる。また、10aでは、内面は反時計周りに展開するらしい。これほど明瞭に確認できる例は本遺跡でも極少数であるが、小さな平底形態には他にも類似例が認められることから、平底形態に即した調整技法の可能性がある。

高杯 (13~15) 13~15はA類に分類されるが、14・15では脚部の長さに長短が認められる。杯部と脚部の接合方法は、最終工程で粘土を充填する方法であることが断面観察から分かる。

ブロック17 (図版4・28)

器台 (18) 図化することができたのはA2類1点のみである。器面の摩滅が著しく、粉を吹いたような状態であるため、器面調整を確認することができない。

ブロック外 (図版4・28~29)

高杯 (19・21) 19はA類、21はB類である。21の断面観察から、B類においても、杯部と脚部の接合に粘土塊を充填する手法が利用されていることが知られる。

甕 (22・24~26) 22はD2類、25はC類、26は大型甕A類である。分類外とした24は、歪みが激しく、口縁部と底部の軸が一致しないため、図化にあたっては底部の座りの良い位置を正位とした。球形の胴部に短く立ち上がる口頭部を持つ広口甕で、本遺跡では他に類例が認められない。口縁部外側を円錐状に窪ませる特徴は、甕A1類の1部と類似する(32など)。摩滅のため器面調整は不明瞭だが、外面にはわずかにミガキ調整が確認できる。26は口縁段部にハケメ工具の端部を押圧した木目状列点文がめぐる。本遺跡で確認されたのはこの1例のみである。

鉢 (20・23) 20はC1類、23はC2類である。内外面のミガキ調整が顕著で、外面の1部と内面を黒色処理している。古墳後期に帰属する器種であり、混入物と判断した。

II 区

ブロック5 (図版4・29)

甕 (27) 復元図化できたのは小型甕A1類の1点のみである。

ブロック3 (図版4・29)

高杯 (28~29) 28はA類、29はB類である。29の内面では、縦方向の皺が生じており、絞るようにならに成形されたことが窺われる。他にはA類157でもう1例あるのみで、本遺跡でこのような成形技法は顕著ではない。

甕 (30・31・33) 30・31はD1類、33はA類である。外面はミガキ調整され光沢を持つが、30の内面ではナデツケ、31の口縁内面ではハケメが残る。共に外面には光沢のあるタール状付着物が認められる。

甕 (32・34～36) 32は中型甕A1類、34は中型甕A3類、35は大型甕A2類、36は小型甕A3類である。35は内外面ともにハケメ調整されるが、外面は条間が広く、内面は狭く細かいという違いがある。

ブロック6 (図版5・29)

器台 (37～39) 37～39は全てA1類で、口縁外側が面取りされる。全形が窓える37は、均等に透かしが配置されるaタイプである。外面ではミガキの単位の間から、1次調整で施した条間の狭いハケメが認められる。

甕 (40) 40はA1類で、口縁端部が面取りされる。口縁内面がわずかに窓む点はA2類に酷似しており、両類における製作技法上の緊密性が窓える。

ブロック2 (図版5・29)

甕 (41～47) 42～44は大型甕A1類、45は中型甕A2類、46は中型甕A3類である。44の口縁内面がわずかに窓む点はA2類の45に類似するが、口縁端部下端が鉗状に張り出す特徴は42・43と共通する。また44の口縁外側では凹線状の浅い凹みが1条めぐる。42～44では外面ハケメ・内面ナデツケとなり、45～46では内外面ともにハケメとなるが、条間が異なる点は注目される。41は弥生後期か。

ブロック1 (図版5・30)

高杯 (49～51) 49はB類、50はA類短脚タイプ、51はA類長脚タイプである。49・51は器面の摩滅が著しく調整が不明だが、50では杯部内外面で横位のミガキが認められる。杯部と脚部を接合する最終工程で粘土塊を充填する様子が良く確認される (図版40-1・2)。充填された粘土塊はらせん状の皺を生じておらず、ねじるように回転させながら押し込んだ様子が窓われる。脚部内面では横位の擦痕が認められることから、硬質工具によって内面調整されたことが分かる。

甕 (48・52～53・55～57) 48は中型甕A3類、52は大型甕A3類、53は大型甕A2類である。48の頸部では、板状工具で押し引きしたような先端部の圧痕がある。54は小型甕である。厚い底部が特徴的で、底面は丸底となって安定しない。大きさは異なるが、形態的に95 (図版8) に類似することから弥生後期に帰属する可能性がある。一般的な甕と同様に充填手法によって製作されたことが断面観察から窓われる。

ブロック10 (第2・3表、図版6～7・30～31)

高杯・器台・鉢・壺・甕の計19点を抽出のうえ図化した。ブロック10から出土した全ての土器を集計した結果、口縁部残存率・破片数共に甕が80%以上を占め、残存率では壺8%・高杯5%と続き、破片数では壺・高杯・器台が2%と同じ割合を示す。

高杯 (58～59) 外反する杯部形態から58はA2類、内湾しながら立ち上がる59はA1類に分類できる。58の外面ではミガキ調整が顕著で、杯部では左下がりと右下がりの交差する調整単位が認められる。脚部では縦位、裾部では横位にミガキが施される。また裾部では黒斑も認められる。

器台 (60～62) 全てA類で、60・62は透かし a タイプ、61は b タイプである。61は楕円形の身の深い受け部形態のもので、本遺跡では一般的ではない。

鉢 (63) 63は、B類に分類される「有孔鉢」である。内外面ともにハケメ調整されるが、器面は凸凹して平滑ではない。

壺 (64～67) 64・66～67はC類、65は小型壺A類で

ブロック10	残存率(1/36)	%	破片数	%
甕	153.5	86	696	85
壺	13.5	8	16	2
壺か甕	0	0	52	6
鉢	0	0	0	0
高杯	8.5	5	13	2
器台	0	0	15	2
高杯または器台	2	1	24	3
壺か高杯か器台	0	0	1	0
計	177.5	100	817	100

第2表 器種構成比率 (ブロック10)

ある。64は器壁が薄く精緻な作りで、内外面のミガキ調整が顕著に認められる。ミガキ調整単位の間からは1次調整時の条間の狭いハケメがわずかに確認できる。外面には光沢あるタール状の黒色炭化物が認められる。66～67は器面の摩滅が著しく、調整痕は明らかでない。

甕 (68～76) 68は中型甕A3類、69は大型甕A3類、70は小型甕A3類、71は大型甕A1類、72～74は大型甕A2類である。図化しなかった破片資料の集計によれば、甕の口縁部形態はA1類が半数を占めて最も多く、続いてA3類、A2類となる(第3表)。70・71の頭部外面では、下→上方方向のハケメが工具端部を描えて施されており、外面調整の最終工程で頭部をハケメ調整する手法のあったことをうかがわせる。また74の外面では、胴上部は継位・胴中部では横位・胴下部では斜位と、大きくみれば部位別に方向をえながらハケメが施されていることがわかる。また、切り合い関係では、多くの調整単位が重複しているため異なる例も存在するが、胴上部から下部に向かって施しているようである。

ブロック外(図版7・31)

壺A類(78)・E類(80)、器台A2類(77)、中型甕A1類(79)、特大甕(81)がある。78はA類に分類したが、口縁部が直線的に外傾することや、端部に向かって先細りとなる形態などは、本遺跡で一般的な壺A類とは異なる特徴を示している。80は、他の土器と離れた地点からまとまって破片が出土した大型壺で、砂粒が少なくシルト質の精良な胎土であり、本遺跡の一般的な土器とは明瞭に異なる。口縁部は小さく波打つが、1か所だけ2個1対の押圧があることから、図化にあたってはその部位を正面にした。ハケメの上に施されたミガキ調整が顕著で、器面は光沢を持つ。外面にススの付着が認められる点が特徴的であるが、内面にコゲのような痕跡は認められない。形態や調整の特徴から弥生後期に属する器種と判断した。81もまた、他の土器から離れて同一個体破片だけがまとまって出土した。古墳前期の一般的な中～大型甕に比べて口頭部が長く、頭部のすぼまり具合が弱い。口縁端部は軽くなまで仕上げているため、粘土がまくれて波打つ。内外面ともにハケメ調整が施されるが、器面は凸凹で、製作時の粘土組接合痕が良く残っている。

III 区

SD004(第4・5表、図版7～8・31～32)

高杯・器台・壺・甕の計27点を抽出のうえ図化した。SD004から出土した図化資料を除く全ての土器を集計した結果、口縁部残存率・破片数共に甕が80～90%近くを占め、残存率では高杯・器台、破片数では壺・高杯・器台がそれに続く割合を示す。

高杯(82～85) 82はB類、83はC類、84はA2類、85はA類脚部である。83は脚部との接合部が剥落痕として確認できるが、粘土充填による出ベソ状の粘土塊が認められる。一方、82の接合部では、平坦な剥落痕が認められ、出ベソ状粘土塊を確認することができない。高杯A類の多くでも出ベソ状の粘土塊が認められることから、A・C類とB類では、杯部と脚部の接合方法が異なるのであろうか。85は長脚タイプの可能性が高い。

器台(86～87) 86・87共にA1類で、口縁部外面が面をなす。86は外面のミガキ調整痕が顕著で、受け部は横位、脚

甕	破片数	%
A1	22	50
A2	9	20
A3	13	30
計	44	100

第3表 甕口縁部形態
(ブロック10)

SD004	残存率(1/36)	%	破片数	%
甕	126.5	88	442	81
壺	0	0	50	9
壺か甕	2.5	2	11	2
鉢	0	0	0	0
高杯	3	2	7	1
器台	4	3	4	1
高杯または器台	7	5	25	5
壺か高杯か器台	0	0	6	1
計	143	100	545	100

第4表 器種構成比率(SD004)

部は縦位、裾部は横位に調整を施し、受け部と脚部の境を最後に1条である。透かしの配置は、3か所のうち2辺が等しいbタイプである。

壺 (88・89) 88は壺D2類に台が付くものだろうか。89は、A類またはC類に該当しよう。

甕 (90～107・276) 90～92はA3類、93はA1類、94は大型甕A3類、178はB類、96は中型甕A3類、97は中型甕A1類、98は中型甕A2類、99～103は大型甕A2類である。破片資料の集計によれば、SD004から出土した甕の口縁部はA3類が約半数近くと最も多く、A1類、A2類がそれに続く（第5表）。102は頸部のハケメが明瞭に残っているので、2段にわたって下→上のハケメが短い単位で施される。101は口頭部のナデ調整ではほとんどハケメが消されているが、わずかに下→上のハケメが確認できる。胴上部から頸部では、口頭部のハケメの上に、胴上部のハケメが重なっている様子が認められ、口頭部の器面調整後に胴上部が調整されたことを示している。103は、口頭部外面に施された条間の広いハケメがナデ消されたものである。口縁部先端がつまみ上げられたように先細りになっているのは、内外から強くナデ調整された結果であり、それを示すように口縁外面には浅い窪みが1条めぐる。104は甕の底部であるが、断面観察によれば、充填手法ではなく、小円板に粘土紐を同心円状に巻きながら成形した様子が窺える。276は弥生後期。法式土器に帰属する甕である。95は器壁が厚く、接合痕を残す粗製品であり、底部内外では指頭圧痕が認められる。最も特徴的なのは口縁部下端の鉄状の突帯であるが、他に類例が認められない。く字状に立ち上がる口縁部形態が甕Bと類似することから、弥生後期に帰属するものかも知れない。

ブロック16 (図版8・32)

高杯 (108) 1点のみ図示した。108はA類杯部の破片で、脚部との接合部が良く観察できる。他のA類と同様に、粘土充填による接合手法の存在が明らかで、杯底部から脚部に向かってねじり込むように粘土を充填したため、らせんを描く皺が生じている。A1類に該当しようか。

甕 (109～112) 111・112は大型甕A1類であるが、口縁内面の窪みや少し釣り上がるような端部はA2類に酷似する。111は口縁外面に浅い凹線を生じたものである。精良な胎土が用いられ、口縁部は1次調整のハケメが見えないほど平滑に仕上げられている。さらに、胴部外面のハケメが深く、シャープな軌跡を描く点など、他の甕とは作りが異なる点が特徴的である。112では、本遺跡で一般的に認められるように、外面器面調整の最終段階で頸部にハケメが施されているのが良く分かる。

ブロック12 (第6・7表・図版8～9・32～33)

高杯・器台・壺・甕の計18点を抽出のうえ図化した。ブロック12から出土した図化資料を除く全ての土器を集計した結果では、口縁部残存率・破片数共に甕が80～90%近くを占め、高杯・器台がそれに続く。

高杯 (113～116) 113・115・116はA類、114はB類である。113は長脚タイプである。115の剥落部では、出ベソ状粘土塊が認められることから、粘土充填による接合方法であることが確認できる。ねじり込むように粘土塊を充填したため、らせん状の皺が生じている。

器台 (117～118) 117・118共にA類に該当するが、受け部欠損のため細分できない。台部に穿たれる透かしの配置は、両者共に、3か所のうち2辺が等しいbタイプであることが確認できる。

壺 (119～120) 119はA類、120はB類である。120は大型壺で、全面にハケメや接合痕を残したり、いびつなシルエットから粗製の感が強い。外面のハケメは部位により調整方向が変わり、胴上位は斜

类别	破片数	%
A1	11	31
A2	8	22
A3	17	47
計	36	100

第5表 甕口縁部形態
(SD004)

位、中位は横位気味、下位では再び斜位となる。また内面においても、胴上位はナデ、中位はナデツケ、下位はハケメと変化している。注目されるのは、胴下位において、外面のハケメ方向が変わる位置と内面のナデツケ・ハケメが変わること。さらに器形の転換点がほぼ一致することである。これは、粘土紐の積み上げがa(図版9-120)の位置で一度体止したことを示すものと考えられる。外面ハケメ方向の転換がこれを示すものと仮定すれば、120の製作にあたっては、大きく3回のブランク

があったと推定される。また、胴下位のb(同図)では器面が剥落しており、外面の接合痕よりも幅の狭い接合痕とハケメ調整が確認できる(図版40-6)。つまり、2度にわたるハケメ調整の存在が窺われる。ここから復元できることは、粘土紐を接合しながら1次調整(成形)としてハケメを施して器形を製作し、その後、薄く粘土を貼り付けてから再びハケメによる2次調整(整形)されたという工程である。

なお、120は他の土器と離れた地点から同一破片がまとめて出土しており注目される。

甕(121~130) 121~122は大型甕A3類、123~124は大型甕A1類、125~128は大型甕A2類、126はA3類、127はA1類である。各類の甕共に、外面ハケメ・内面ナデツケ調整が多い。外面ハケメの方向は下→上の斜位を基本とし、最終工程で頸部に施す点で一致する。内面ナデツケの方向は、胴下半では左→右の斜位(123)、上半では右→左の横位に近い斜位(122・128)が認められる。129は底部近くの破片資料であるが、外面は上→下の工具移動により単位下端に粘土のまくれが生じている。

ブロック18(第8・9表・図版10・33~34)

高杯・器台・鉢・壺・甕の計14点を抽出のうえ図化した。ブロック18から出土した図化資料を除く全ての土器を集計した結果、口縁部残存率では100%・破片数では81%を甕が占め、壺・高杯か器台がそれに続く。

高杯(131) 脚部の低いB類1点が図化できたに過ぎない。

器台(132) 透かしの位置を結ぶと二等辺三角形をなす透かしB類の脚部である。

鉢(133~134) 133・134共にC2類に分類され、内外面の磨き調整が著しい。古墳後期に帰属する器種である。

壺(135~136) 135・136共に有段口縁のA類に分類されるが、前者は小型壺、後者は大型壺に該当する。135では、ミガキの調整単位の間から1次調整のハケメが確認できる。136の内面では、ハケメを明瞭に残している。

甕(137~143) 140は中型甕A3類、139・141は大型甕A3類、137は大型甕A2類、138・179はC類である。

139の口頭部では、先端の丸い工具による不揃いな沈線が見える。意図的な施文とは考えられず、器面調整に関わるものであろうか。140の胴部外面では、下→上に向かって搔き掲げるように施したハケメ調整が認められ、4段階程度の切り合い関係を判読することができる。胴部下半では、胎土中の砂粒が動くのが認められ、ケズリ状をなす。また全面にハケメを施した後、頭部を帶

ブロック12	残存率(1/36)	%	破片数	%
甕	296.5	79	1308	89
壺	64.5	17	54	4
壺か甕	0	0	58	4
鉢	0	0	1	0
高杯	2	1	7	0
器台	2	1	3	0
高杯または器台	7	2	22	1
壺か高杯か器台	5	1	15	1
計	377	100	1468	100

第6表 器種構成比率(ブロック12)

	破片数	%
A1	44	65
A2	9	13
A3	15	22
計	68	100

第7表 壺口縁部形態(ブロック12)

ブロック18	残存率(1/36)	%	破片数	%
甕	16	100	281	81
壺	0	0	27	8
壺か甕	0	0	23	7
鉢	0	0	1	0
高杯	0	0	0	0
器台	0	0	1	0
高杯または器台	0	0	8	2
壺か高杯か器台	0	0	6	2
計	16	100	347	100

第8表 器種構成比率(ブロック18)

	破片数	%
A1	2	100
A2	0	0
A3	0	0
計	2	100

第9表 壺口縁部形態(ブロック18)

状にナデ調整するのが特徴である。内面もハケメ調整であるが、外面に比べて条間が狭く、浅い。143は、底部が厚く丸底気味となる大型品で、器壁の厚さは、胴部外面の調整は、上半が上→下のハケメ、下半が下→上のケズリとなり、同じ器面で異なる調整を施す。内面においても、全体的に左上がりのハケメが施された後に、部分的にケズリ調整が認められる。138・179は弥生後期に帰属する甕で、シルト質の精良な胎土を使用しており、古墳前期のものとは明らかに異なる。138の図化にあたっては少し強調ぎみに口縁部の擬凹線文を表現しているが、実際は浅く不明瞭である。内面はケズリ調整が顕著で、工具幅に沿って窪むほど強くケズリ取られている。179の胴部外面にはハケメ工具による連続刺突文が施される。

ブロック11 (第10・11表・図版10~11・34)

壺・鉢・甕の計6個体を抽出のうえ図化した。図化資料を除く全ての土器を集計した結果では、口縁部残存率では甕のみが同定され、破片数では甕と壺で8割以上を占め、高杯・器台がそれに続くという他のブロックと同様の組成を示す。

壺 (144・149) 144はD1類で、いわゆる小型丸底壺とされるものであり、小型品ゆえに胴部だけほぼ完形品で出土した。149は大型壺A類で、第IV章で触れたように、他の土器と離れた地点から同一破片がまとめて出土した。口縁部と肩部の1部に黒斑が認められる。胴部のミガキ調整は顕著ではなく、部分的にハケメに重複して認められるに過ぎない。内面には接合痕を顕著に残す。

鉢 (145) 本遺跡では63を含めて2例が確認され、145はその1点である。

甕 (146~148) 平底のうち特徴の異なる2点を図示した。

147は広い平底のもので、恐らく充填手法によるものであろう接合痕で剥落している。外面では左上がりのハケメが見える。一方、148は比較的小さな平底で、底面が少し窪む特徴を示す。これは、本遺跡の甕で散見される特徴であり、小さな平底であると同時に、胴下位の外面ハケメ調整が、底面を中心に渦巻き状にハケメ調整する甕に特徴的である(10・76・104など)。148ではわずかながら、横へ斜め方向に重複するハケメがわずかながら認められることから同様の調整技法を採用した可能性が高い。146は弥生後期に帰属するB類の口縁部破片で、シルト質胎土で古墳前期とは明瞭に異なる特徴を示す。

ブロック外 (図版11・34)

大型甕A1類(150)のみを図示することができた。口頭部が直立ぎみに立ち上がり、頭部が少し膨らむのが特徴的である。外面はハケメ調整、口頭部内面はハケメ・胴部内面はナデツケ調整となる。胎土の乾燥度が異なる段階で器面調整されたことを良く示している。

ブロック11	残存率 (1/36)	%	破片数	%
壺	46.5	100	592	62
甕	0	0	107	11
甕か壺	0	0	129	14
鉢	0	0	0	0
高杯	0	0	23	2
器台	0	0	4	0
高杯または器台	0	0	32	3
甕か高杯か器台	0	0	61	6
計	46.5	100	948	100

第10表 器種構成比率 (ブロック11)

甕	破片数	%
A1	5	56
A2	3	33
A3	1	11
計	9	100

第11表 甕口縁部形態 (ブロック11)

IV 区

ブロック 14 (図版 11・34)

器台・甕の計4個体を図示することができた。

器台 (151・152) 151はA1類、152はA2類である。すでに第IV章で詳述したように、自然円礪を抜み、受け部の方向を揃えて並んで出土した。151は器面の磨耗が著しいが、丁寧なミガキ調整が確認できる。透かしは3孔が均等に配されたaタイプである。152は赤彩痕が明瞭に残る。受け部と台部の境界内面では、接合時の粘土のまくれが良く残っている。

甕 (153・154) 153はB類、154は中型甕A1類である。153は他ブロック出土例と同様、隣接する田伏山崎遺跡に由来する弥生後期の土器であろう。154は口縁端部を入念に面取りするため、端部下端が下方に伸びて鉗状の形態を示す。内外共に、頸部以下はハケメを残し、口頸部ではハケメをナデ消している。

ブロック外 (図版 11・34)

高杯・器台・鉢・甕の計13個体を図示した。そのうち2個体が弥生後期に帰属する器種と推定され、ブロック 14から出土した甕B類を合わせて、IV区では比較的他のブロックに比べて弥生後期の土器が目立つように思える。

高杯 (155～159) 155はA2類、156・162はB類、157はA類長脚タイプである。158は裾部の屈曲具合からB類であろうか。外面赤彩されている。156・157では脚部内面に縱位の皺が認められ、絞るように成形されたものと推測される。

器台 (159～161) 159はB類、160はA1類、161はA2類である。160は残存部が少なく不明だが、162の透かしは均等配置のタイプaである。159は裾部に擬四線文がめぐるもので、弥生後期に帰属する器種である。同時期の甕と同様に、やはりリシリト質の精良な胎土が使われている。なお、破片数集計にともなう観察で、ブロック 12から159と同一個体を思われる高杯裾部の破片が確認されている。

鉢 (165～166) 165はA類である。外面胴部下半をケズリ、内面ではナデツケ調整を施す。166は作りの粗雑な小型品で、一応A類の仲間として分類した。

甕 (164・167) 164は特大型に分類されるが、本遺跡のなかでも特別に大きな容量を示す。胴部の大型破片とほぼ完全に復元できる底部片が別々の地点から出土した。すでに第IV章で詳述したとおり、胴部片はブロック 12、底部はIV区ブロック外から出土した。胴部は条間の広い大振りな工具でハケメが表出されており、器壁は1.6～1.8cmと、他の甕に比べて極端に厚く、一見縄文中期の土器と見間違うほどである。167は内外面に粘土紐の接合痕を良く残した粗雑品で、器面は凹凸をなす。

B 石 器

1) 概 要

本遺跡からは總点数455点（自然礪は除く）の石器が出土しており、その内訳は器種組成表として第12表にまとめた。「玉製品関連」の器種は勾玉・勾玉未成品・管玉・管玉未成品・垂玉未成品・臼玉未成品・玉未成品・石核・剥片類・原石であり、「玉作工具関連」の器種は筋砥石・内磨砥石・平砥石・磨石類である。「その他」の器種として一括したものには、石錘・磨製石斧・石核・剥片類があり、合計16器種を認定した。なお、滑石・綠色凝灰岩製の石核・剥片類は、同じ石材の玉製品及び未成品が出土して

地区	遺跡・ ブロック	玉製品関連						玉作工具関連						その他の 石器						総数		
		玉 器	石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品	玉 器	石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品	玉 器	石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品			
		石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品	玉 器	石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品	玉 器	石 核	石 片	原 石	未 成 品	日 本 未 成 品	玉 器			
I	ブロック7	3	2	2	4	107	1	1	26	1	1	9	1	2	1	1	1	1	1	7		
I	ブロック8	2	2	2	4	107	1	1	26	1	1	9	1	2	1	1	1	1	1	32		
I	ブロック外																			5		
II	ブロック1																				10	
II	ブロック2																				5	
II	ブロック3																				10	
II	ブロック5	1	1	1	1	55	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	60	
II	ブロック6																				1	
II	ブロック10																				54	
II	ブロック外	1	1	1	1	30	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	27	
III	SD004								9	1	2	4	3	1	1	1	1	1	1	1	21	
III	ブロック11							1	10	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14	
III	ブロック12							1			9	2	2	1	1	1	1	1	1	1	7	
III	ブロック16																				1	
III	ブロック18																				1	
III	ブロック外																				14	
IV	ブロック外	1	1	1	1	29	2	4	1	9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	51	
IV	総数	1	2	1	6	1	1	2	2	11	339	7	9	2	2	40	2	8	5	1	2	1145
IV		0.2%	0.4%	0.2%	1.5%	0.2%	0.2%	0.4%	0.6%	2.4%	74.8%	1.0%	2.0%	0.4%	0.4%	8.8%	0.4%	1.8%	1.2%	0.2%	0.4%	100.0%
																					84.0%	
																					11.8%	
																					4.2%	
																					100.0%	

第12表 器種組成表

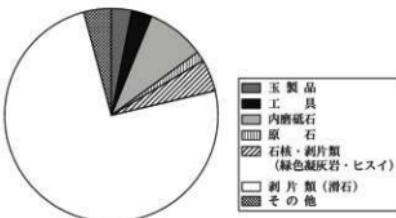
いることから「玉製品関連」の器種に含めた。ヒスイ製の原石・剥片類は、製品や未成品の出土が認められないものの、当該期における石材選択のあり方を考慮して、やはり玉作に関連するものと判断した。一方、安山岩・頁岩・チャート製の石核・剥片類については、玉製品の素材としては一般的ではないため「その他の石材」として一括した。また、原石はヒスイ製のもののみを取り扱い、自然礫については基本的に取り上げていない。しかし分銅形等の特異な形態を示す自然礫については、遺物集中ブロックから出土していることから、意図的に搬入されたものとして特別視し、出土した3点のうち2点を図化のうえ掲載した。

調査区全体の器種組成では、「玉製品関連」「玉作工具関連」資料が約96%もの非常に高い比率を占めており、本遺跡で玉作が行われたことが確実である。その中でも滑石製剥片類が最も多く出土しており、組成全体の約75%、「玉製品関連」全体の約89%を占めている。よって本遺跡の玉作には、滑石が主体的に用いられていたと考えられる。

地区ごとの石器の分布についてはI・II区にまとまる傾向にある。またブロック単位では14か所のブロックのうち12か所で石器が出土しており、特に、II区のブロック5・10に集中している。遺跡全体の30%近くの滑石製剥片類が両ブロックから出土しており、出土量において他のブロックを圧倒している。玉製品と未成品のほとんどが滑石素材である点を考慮すると、両ブロックにおいて主体的に玉作が行われていたことが推測できる。

また12か所のブロックのうち3か所で、接合関係が3例認められた(図版18)。これら接合資料の存在から、複数のブロックが同時に形成された事がうかがえる。

なお、石器図版については、まず構造・ブロック出土資料から図化に耐えうる45点を抽出し、それにI～IV区のブロック外出土資料39点と接合資料3点を加えた総数87点を掲載した。実測図はI～IV区の





第19図 内磨砥石分類概念図

順で掲載し、SD004出土資料はIII区に含めて掲載した。また、玉製品と未成品、玉作の工具については、本遺跡の特徴を表すものとして、できるだけ多く掲載するよう努めた。

	I	II	III-1	III-2	III-3	III-4	IV	合計
I地区	2	3	1	2		2		10
II地区	1		3	1	2	4	2	13
III地区					1		3	4
IV地区	1				1	2	1	9
SD004				1	1	1	1	4
合計	4	3	5	5	6	8	9	40

第13表 内磨砥石分類別点数表

2) 内磨砥石の分類

滑石製剝片類を除いて最も多く出土した器種で、玉製品や未成品とならび、本遺跡を特徴づける石器である。本遺跡で出土した内磨砥石は、富山県朝日町浜山遺跡出土資料をもとに寺村光晴氏によって提唱された「浜山型内磨砥石」〔寺村ほか1969〕に該当する。これは砂岩製の横長剝片を素材とし、縁辺部とその付近に砥面を形成するといった特徴を持つ砥石で、機能として、勾玉屈曲部内側の研磨が想定されている。浜山型内磨砥石の分布は新潟県西頸城地域から富山県までの一带に限られる。特に糸魚川市域の遺跡では最も出土量が多く、浜山型内磨砥石分布域の中心と考えることができる。

本遺跡で浜山型内磨砥石（以下、内磨砥石とする）と認定したものは、素材となる剝片や様々な部位に砥面を形成するものなどを含んでおり、既存の定義から外れるものもある。そこで、砂岩製の横長剝片を素材とする砥石および同形品を大きく内磨砥石として捉え、狭義の内磨砥石と対照しながら新たな分類案を提示することとする。

以下では、二次加工や砥面の有無によって大別し、さらにIII類では砥面形成部位によって細分した（第19図）。

I類：内磨砥石の素材となりうるもので、ほぼ無加工のものをここに一括した。砂岩製の貝殻状剝片で、

二次加工と断定できないような細かな剥離痕が観察できる資料についても本分類に含めた。

II類：素材に二次加工のみが施されており、砥面を形成しないもの。この二次加工は、縁辺部や打点付近に施されていることから、縁辺部の調整や打点の除去等が目的であったと考えられる。

III類：素材に砥面が観察できるもの。また砥面は、打点部とは反対側に形成されている。砥面と二次加工の双方が観察できる資料についても、本分類に含めている。なお、砥面の形成部位によって以下のようく細分した。

III-1類：素材の縁辺部とその付近に砥面が形成されているもの。狭義の内磨砥石、もしくはそれに極めて近い特徴をもつものである。

III-2類：素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面と、縁辺部に砥面が形成されているもの。

- III・3類：素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面に砥面が形成されているもの。縁辺部に砥面は観察できない。表面のみに砥面が形成されているものは、それ自身の形状と筋砥石に見られる剥離痕の形状から、大型の筋砥石の砥面更新の際に生じた剥片の可能性がある。
- III・4類：素材のほぼ全面に砥面が形成されているもの。両側縁はほぼ平行し、形状は薄い板状を呈している資料がほとんどで、形状には一定の齊一性が認められる。この点から、本類が定型的な砥石として製作された可能性が考えられる。
- IV類：風化等で砥面・二次加工の観察が困難であるため、分類不可のものを一括した。なお、風化はしているが砥面・二次加工が観察可能なものについては、それぞれの分類に含めている。

3) 遺物各説

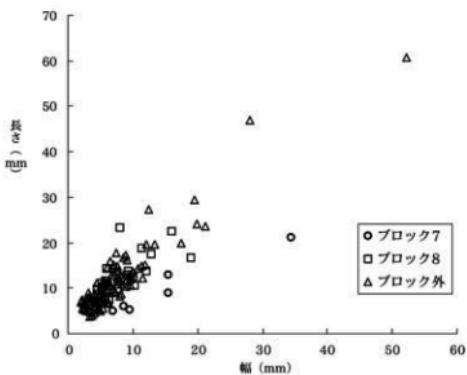
石器は土器に比べて出土点数が少ないため、ブロック単位で記述するとかえって器種組成が捉えづらくなる。そのため以下の記述ではI～IV区の大きなまとまりごとにを行い、有意なまとまりが想定できる場合に限り、ブロック内の器種組成について触れることとする。

I 区出土資料（図版 13～14・36～37）

本地区からは176点が出土し（第12表）、うち26点を図示した。出土遺物の大半は玉製品と未成品、滑石製剥片類等の玉製品関連で、それらが本地区出土資料全体の9割近くを占めている。また筋砥石は本遺跡出土総数4点中3点が本地区から出土しており、うち1点は重さ8kgを超える大型の筋砥石である。大型の筋砥石は定式式の可能性が高いことを考え合わせると、本地区が玉作の「場」として一定期間機能していたと推測される。

管玉未成品（189～193）　本地区では5点が出土している。189は緑色凝灰岩製で、穿孔が完了し、石器表面に若干の穂を残すことから、仕上げ直前の資料と言える。表面に観察できる擦痕は、風化によって擦痕方向が不明の箇所もあるが、判別可能な箇所では長軸に対し斜位に走っている。190～193は全て滑石製で、穿孔途中で欠損した未成品と考えられる。4点全てに擦痕が観察され、190・191では長軸方向と短軸方向という向きの異なる

擦痕が確認できる。192・193については側面の一部と上・下面で擦痕が観察され、その方向には統一性が認められない。また断面形態を見ると、全て多角形を呈しているものの、190・191と192・193では2辺に挟まれた頂点の数や角度が異なっている事がわかる。頂点の数が多く、その角度が鈍角であるほど製品に近い状態と考えれば、断面形態の差異は整形工程の段階差を示していると言えるだろう。また、190・



第20図 I区 滑石製剥片 長幅比

191が両側穿孔、192が片側穿孔であり、193は判別できなかった。

玉未成品（194・195） 本地区からは2点が出土している。2点とも滑石製の小型剥片で、表面の一部に擦痕が観察できた。形状は不定形を呈している。

剥片類（196・197） 144点が出土した。本地区からは緑色凝灰岩・滑石・ヒスイ・頁岩・安山岩を素材とした剥片類が出土したが、図示したのは滑石とヒスイ製剥片類1点ずつの計2点である。

196は滑石製の小型綫長剥片である。本地区出土の滑石製剥片類は、196のような長さ・幅ともに2cm以内に収まる小型品が90%以上を占め、それ以上の法量を示す資料は10%以下の割合であった。玉製品は遺跡全体を通して長さ・幅とともに2cm以内に収まるものがほとんどであるが、工程が進むにつれ徐々に法量を減じていくため、素材となる剥片は必然的に製品の法量よりも大きな値を示す。この事から、本地区の滑石製剥片類の中には玉製品の素材となりうるものは少ないと考えられ、むしろそれらは、剥片剥離もしくは石器製作の際に生じた碎片の要素が強い資料が多数を占めると考えられる。

ヒスイ製剥片類は1点のみの出土である。197は表面が風化し、光沢を持たないヒスイ製剥片である。

ヒスイ原石（198） 2点が出土し、そのうち1点を図示した。198は表面に節理が縱横方向に観察できるヒスイ原石で、表面は風化している。

筋砥石（199～201） 本地区からは3点が出土しており、大型のものが1点、小型のものが2点である。199は長さ31.2cm、幅22.8cm、厚さ10.8cm、重量8.5kgの大型の筋砥石で、砂岩製の梢円礫を素材としている。表面の長軸方向には1条の溝が観察でき、溝の断面形状は、おおよそV字状を呈する。また本資料には、表裏両面に何枚もの剥離痕が確認できた。裏面の剥離痕が砥面の後に形成されていることから、砥面更新を一つの目的とした剥離の可能性が考えられる。しかし、それらの剥離面に砥面が全く形成されていない点は注目される。むしろ内磨砥石と同じ砂岩を用いている点や、内磨砥石の表面の広範囲にわたって砥面が観察できる資料（III-3類）が存在する点を考慮すると、本資料は内磨砥石の核石と認定すべきかもしれない。なお、内磨砥石との接合を試みたが接合関係は確認できなかった。200は凝灰岩製の小型の筋砥石である。下半部を欠損しているが、おおよそ半月形に近い形状をなしている。表面には断面V字状の2条の溝が観察でき、その溝周辺と右側面には砥面が形成されている。なお右側面は、砥面形成に伴いやや内湾している。201も凝灰岩製の小型の筋砥石で、形状は薄い板状を呈する。表面には1条の溝が観察でき、その断面はV字状をなす。表裏面の一部と左右両側面には砥面が形成され、裏面および右側面が内湾している。

磨石類（202・203） 3点が出土しており、うち2点を図示した。202は、扁平な梢円礫の左右両側面にツブレが観察できる。ほぼ左右対称の位置にツブレが観察されることから、挟りの作成を目的としている可能性が考えられる。また、裏面には砥面が観察できたが、不明瞭である。203は下端部にツブレが観察され、被然の痕跡も見られる。なお、本資料はII地区出土資料の230と接合関係にある。

平砥石（204） 1点のみの出土で、表面に砥面が観察できる。なお、縦断面形を見ると表面が内湾しているが、それが使用の結果によるものかは判断できなかった。

内磨砥石（205～213） 本地区では10点の内磨砥石が出土し、うち9点を図示した。分類別では、I類2点（205）、II類3点（206～208）、III-1類1点（209）、III-2類2点（210・211）、III-4類2点（212・213）で、III-1類が1点と少ない。また砥面が観察できないI・II類が5点と、本地区出土点数の半数を占めている。形態的にはI・II類は貝殻状もしくはそれに近い形を呈し、III-4類は板状で、平面形は長方形に近い形となる。そしてIII-2類は両者の中間的な形態をなす。これらの素材は全て横長剥片

を用いており、縁辺部に見られる砥面は、212を除き打点部の反対側に形成されている。またI・II類の打点が残る資料には、打点付近に連続的な二次加工が施されている。この二次加工の目的については、打点付近の高まりを除去するためと考えられる。

石錐（214） 1点のみ出土している。安山岩製の厚手の楕円錐を素材としており、敲打整形の後研磨により形を整えている。

Ⅱ区出土資料（図版14～16・37～38）

本地区からは170点が出土し（第12表）、そのうち26点を図示した。ここでもI区同様、玉製品と未成品の出土、そして滑石製剥片類の多出が特徴的である。しかし筋砥石が出土していない点では、I区と異なった様相を呈している。また本地区では、ブロック5・10において比較的の資料がまとまっており、特に両ブロック出土の滑石製剥片類はII地区全体の約75%もの割合を占めている。

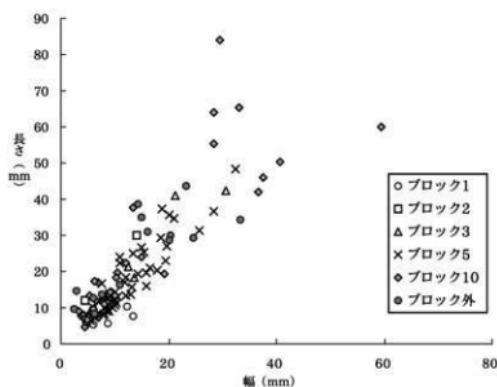
勾玉未成品（215・216） 2点が出土している。2点とも滑石製で、研磨段階の未成品と考えられる。215は表裏面と右側面に長軸と直交するような擦痕が確認でき、その周辺には剥離痕も観察できる。剥離痕と擦痕の観察から、擦痕は二次加工以前に形成されていたことがわかる。よって本資料は、研磨後に更に整形するため二次加工をしたものと考えられる。216は、表裏面にのみ擦痕が確認できた。擦痕は長軸方向のものと、それと斜め方向に交わるもの2方向がある。本資料も215と同様、研磨後に二次加工が施されている。また2点とも側面観は板状、もしくはそれに近い形態をとる。

管玉未成品（217） 1点のみ出土した。滑石素材で、I区出土の緑色凝灰岩製管玉未成品（189）に比べてやややすぎる形態を呈する。表面には稜を明瞭に残しており、仕上げ直前段階の資料と考えられる。

臼玉未成品（218） 1点のみの出土である。滑石を素材としており、平面形は多角形をなしている。側面観は研磨によって板状を呈するが、側面の研磨と穿孔は施されていない。

石核（219） 薄黄緑色の緑色凝灰岩製石核1点が出土した。本資料は剥片素材で、打点付近が瘤のような特異なバルブが観察できた。そのバルブの特徴から特殊な工具を用いて剥離されたことが窺える。このようなバルブは新潟市南赤坂遺跡出土資料中にも見られ、同遺跡報文中では、先鋭な金属を打面に据えた間接打法の存在が想定されている〔前山ほか2002〕。石核自体の形状は方形で、剥離面の観察から頻繁な打面転移は行われなかつたと推察される。

剥片類（220～228） 149点が出土した。本地区からは、緑色凝灰岩・滑石・ヒスイ製剥片類やその他の石材を用いた剥片類が出土しているが、滑石製剥片類が圧倒的多数を占める。ヒスイ製剥片類については、実測に耐える資料が



第21図 Ⅱ区 滑石製剥片 長幅比

無いため図示しなかった。

220は濃緑色の緑色凝灰岩製で、後述する石核(250)と色調が似通っている。表面の剥離面構成から、剥片剥離の際に90度の打面転移があったことが窺える。また表面には自然面も確認できることから、剥片剥離初期段階に石核から剥離された剥片であると言える。221は薄黄緑色の緑色凝灰岩製で、219の石核と色調が類似する。本資料も表面の剥離面構成から、90度の打面転移の存在が窺い知れる。

222～228は滑石製剥片類である。本地区の滑石製剥片類の法量はやや散漫な分布を示しているが、ここでもI区同様、長さ・幅共に2cm以内に収まる資料が多い。しかしながら2cm以上の法量を示す資料も比較的多く出土しており、特にブロック5・10でまとまっている。これらの中には表面に自然面が広く残されている資料が多く見られる事から、原石を遺跡内に搬入した後、ブロック5・10において原石の荒削が行われた可能性がある。

平砥石(229) 1点のみの出土である。229は凝灰岩製であるが、I区出土の凝灰岩製筋砥石とは質感を異にする。なお、裏面に見られる擦痕は2方向確認でき、裏面右半は長軸方向、左半では短軸方向である。この点から本資料では、同一面内の使い分けがあったと推測される。

磨石類(230) 1点のみ出土した。230は真岩製で、I区出土資料の203と接合関係にある。下面と右側面にツブレが観察でき、上面の欠損面にも敲打の際生じたと考えられる剥離痕が見られる。また同一部位にはスレの痕跡も確認でき、これらの事から、本資料が欠損後も使用されていた事を示している。

内磨砥石(231～238) 13点が出土しており、8点を図示した。分類別では、I類1点(231)、III-1類3点(232～234)、III-2類1点(235)、III-3類2点(236・237)、III-4類4点、IV類2点(238)である。III-4類が最も多いが、全て欠損品でブロックを連れて接合するため、これらについては接合資料の項で後述する。次に多いのがIII-1類で、本地区では3点出土している。その3点とも比較的近い位置から出土している。他地区では1点ずつの出土である事を考慮すると少し異質の感がある。

欠損品のため素材の判別ができない237を除くと、全て横長剥片を素材としている。またI区出土資料と同様に、打点付近の高まりを除去するような二次加工が施されている資料も本地区では確認でき、232は裏面側、233は表面側に二次加工が施されている。

石錐(239) 1点が出土している。全面に敲打整形が施され、その後研磨されている。

自然礪(240) 240は、分銅形に近い形をなすが、石器表面に剥離痕等の人為的な加工は見られない。

Ⅲ区出土資料(図版16～17・38)

本地区からは58点が出土しており(第12表、SD004出土資料を含む)、19点を図示した。総点数のうち60%近くを滑石製剥片類が占めている。玉製品は軟玉製垂玉未成品のみで、軟玉を用いた石器は本遺跡においてこの1点のみである。また遺構・ブロック別の器種組成については、SD004から比較的まとまって出土している以外は、各ブロックとも出土点数が極めて少ないと特徴を見出すことはできなかった。なお、本項では先にSD004出土資料の記述を行い、その後それ以外のⅢ区出土資料について記述する。

SD004出土資料

磨石類(241～243) 3点が出土しており、その全てを図化した。241は瓢箪形の自然礪の右側面にツブレが観察でき、そのツブレ付近にはスレの痕跡が確認できた。また表面下端部には、敲打の際生じたと考えられる剥離痕が形成されている。242・243は表面中央部に凹みが確認でき、242は1ヶ所、243では2ヶ所確認できる。また、242の下端部にはツブレと、それに伴うと思われる剥離痕が確認できる。

内磨砥石（244～246）4点が出土しており、そのうち3点を図示した。分類別にはIII-1～4類が1点ずつ出土している。244はIII-1類で、表裏面の下端縁辺部とその付近に砥面が形成されている。245はIII-2類で、表面と裏面中央部の一部に砥面が観察できた。また、下端部にも認められる砥面が連続的な剥離痕によって切られていることから、これらの剥離痕は下端部の砥面更新のための剥離痕である可能性が考えられる。246はIII-4類で、ほぼ全面に砥面が形成されている。なお、裏面に見られる砥面が高い部分にのみ確認できるため、この砥面は石器を扁平に仕上げる際にできたものと考えられる。

磨製石斧（247）1点のみの出土で、形態的特徴から縄文時代の所産であると考えられる。本資料は上半部を欠損しているが、欠損後に剥離痕が形成されている。それらの剥離痕は上下両端に対方向になるように形成されていることから、ここでは本資料を楔形石器への転用品として位置づけておく。

石鍬（248）1点が出土している。本資料もやはり敲打整形後に石器表面を研磨しているが、他の資料に比べて光沢をもつ点が特徴的で、入念に研磨が行われていると考えられる。

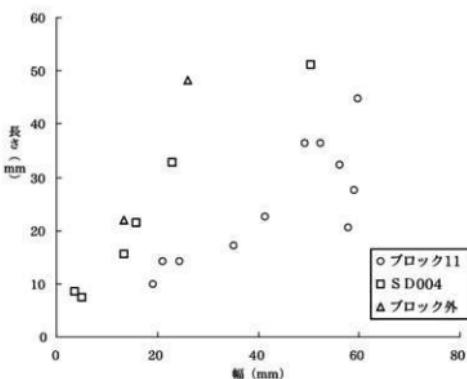
遺構外出土資料

垂玉未成品（249）1点のみの出土で、軟玉を素材としている。石器表面には穿孔が施されているが、研磨の痕跡が観察されない点や、節理面が石器表面に残存している点を考慮し、未成品として扱った。

石核（250・258）2点が出土している。250は、濃緑色の緑色凝灰岩製石核である。石核自体の形状は不定形で、II地区出土資料の219とは異なる。また打面転移が何度も行われており、剥片が数多く剥離されたことが窺える。剥離痕の観察等から、目的的剥片の作出が不可能となり廃棄された残核と考えられる。258は真岩製の石核で、角柱状の自然縫を素材としている。長軸方向より剥離を開始しているが、そこでヒンジフラクチャーを起こしている。その後も数回剥離を行っているが、目的的剥片が剥離されないため、石器上面へ作業面を移行したものと考えられる。

剥片類（251・252・254）本地区からは緑色凝灰岩・滑石・ヒスイ製の剥片類が出土しているが、緑色凝灰岩製のものは図化に耐えなかたため掲載していない。251・252は滑石製剥片類で、251は縦長剥片、252は横長剥片である。また、本地区では滑石製剥片類の点数が少なく、本地区的みのデータでは統計的に有意な結果を見出すことはできなかった。しかしながら、2cm以下の剥片類が剥片類全体に占める割合について、他地区との比較を行うと、他地区が半数以上を占めるに対し、本地区では僅か15%ほどであった。よって本地区は、比較的大型の剥片類が見られる点に特徴が見出せそうである。

254はヒスイ製剥片類で、右側面には擦切痕が観察できる。なお、擦切痕が観察できた資料は、本遺跡において本資料1点のみであった。



第22図 III区 滑石製剥片 長幅比

ヒスイ原石（253） 1点のみの出土である。253はサイコロ状を呈するヒスイ製の原石である。

内磨砥石（255） 4点が出土しているが、図示したものは1点のみである。分類別にはIII-3類1点、IV類3点である。255はIII-3類でほぼ全周に二次加工が施されている。砥面も表裏面に形成されており、裏面に見られる砥面は、SD004出土資料と同様、高まりを除去するためのものと考えられる。

石錐（256・257） 2点が出土している。256は、下端部に自然面を残している。また頭部から中央部にかけて浅い溝が下方に向かって延び、溝の中にはスレの痕跡が観察できた。溝やスレの痕跡は、着柄の際、紐のようなものを結びつけた時に形成されたものと考えられる。石器自体の形態は異なるが、頭部に浅い溝を持つ例が田伏遺跡に認められる〔閔1972〕。257では、裏面の広い範囲で、完成後の敲打痕が認められる。それが何を意図するものかは不明である。

自然礫（259） 259は平面形が分銅形を呈する自然礫で、表面は風化している。

M区出土資料 (図版17~18・39)

總点数49点が出土し（第12表）、13点を図示した。ここでも、組成全体の約60%もの割合を滑石製剝片類が占めている。また、本地区出土資料は全てブロック外からの出土であり、出土分布もそれに伴って散漫な分布状況を示している。また、器種毎の明確なまとまりも本地区では確認できなかった。

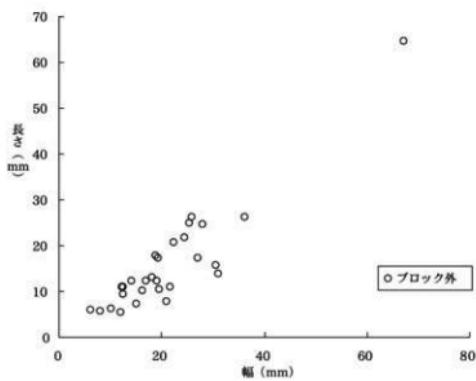
勾玉（260） 1点が出土している。260は滑石製で、本遺跡唯一の製品である。表面を見ると孔は2ヶ所に確認できる。しかし右上の孔は貫通しているが、左下の孔は貫通していない。後者の孔を穿孔しようとしたが失敗し、前者の位置に穿孔したものと考えられる。

管玉（261） 1点のみ出土しており、本遺跡唯一の管玉の製品である。本資料は滑石製としたが、色調は黒～灰色に近く、また石質が硬質である点において、他の滑石製のものとは質感が異なる。また下半部を欠損しており、他の管玉に比べ細身である。石質と形態が他の管玉と異なることから、目的とする形態に応じた石材の使い分けが行われていた可能性が考えられる。

剥片類（262~264・266） 35点が出土しており、そのうち滑石製剝片類は29点である。262・263は、ともに濃緑色の緑色凝灰岩製である。双方とも比較的薄手の剥片で、玉製品の素材にはなり得ない。264は滑石製の縱長剥片で、側面観は板状に近い形をとる。滑石製剝片類の法量分布（第23図）を見ると、長さ・幅が3cm前後に多くまとまり、それ以上の法量を示す資料は、僅か1点のみであった。ヒスイ製剝片類は4点出土しているが、図示は1点のみである。

ヒスイ原石（265） 2点が出土しており、そのうち1点を図化した。265の表面には一切二次加工が施されていない。

筋石（267） 大型の筋石1点が出土している。267の表裏



第23図 M区 滑石製剝片 長幅比

面と右側面には、溝が長軸方向に何条にもわたって形成されており、特に右側面～裏面の溝は、溝同士が切り合い関係にある。砥面は表裏面と左側面に形成されているが、表面から見ると左側面は緩く内湾している。

磨石類（268） 1点が出土している。梢円錐を素材とし、上下両端にはツブレが観察できる。また、ツブレ付近には敲打の際生じたと考えられる剥離痕も形成され、正面中央のスレと切り合い関係にある。

内磨砥石（269～272） 9点が出土し、4点を図示している。分類別ではI類1点、III-2類1点、III-3類2点、III-4類1点、IV類4点である。269はI類で、小型の貝殻状剥片である。縁辺部には微細な剥離痕が確認できる。270はIII-2類で、表面の一部と裏面の広い範囲に砥面が形成されている。下端部にも砥面が観察できるが、その砥面形成後に二次加工が連続的に施されているため、砥面更新のための二次加工の可能性が考えられる。また表面に見られる砥面は、高い面を除去するために生じたものと推測される。271・272はIII-3類である。砥面が観察できたのは表面のみであるため、大型の筋砥石の砥面更新の際に生じた剥片の可能性が考えられる。

接合資料（図版18・39）

ここでは、ブロック・グリッドを越えて接合した資料を扱う。これらに該当する資料は3点である。

273は、すでに磨石類として前述した203と230の接合資料で、前者はII区ブロック8、後者はII区ブロック1から出土した。本資料の接合面には若干の空白部が存在するが、これは欠損後の再利用の結果生じたものと推察される。274・275は、III-4類に属する内磨砥石で、双方とも平面形が長方形に近い形態をなしている。274はII区ブロック1とII区ブロック3から出土した接合資料である。ほぼ全面に砥面が形成され、結果的に側面観が板状に近い形状をなす。275はII区ブロック3とIV区ブロック外出土資料の接合である。本資料は比較的細長で、凝灰岩製筋砥石の201に近い形態をとる。またこのような細長の横長剥片を作出することは技術上困難であり、剥片の分割や、剥離による二次加工を施し幅を減じた後、研磨作業に移行したものと考えられる。

3 平安時代以降

A 陶 磁 器（図版12・35）

古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼・白磁が少量ながら出土した。個々の遺物に関する詳細は観察表を参照願いたい。ここでは、遺物の出土状態を中心に若干の特徴を記すに留める。

171・172は、古墳前期の土器（168～170）と共にSD001から出土した古代の土器である。171は器高の低い須恵器杯で、内外面ロクロナデを施し、底部はヘラ切り離しとする。混和材の少ない精良な胎土であることが特徴的で、底部には「甲」の墨書がある。

173～177は包含層であるV層を中心に出土した。174は土師器椀だが、見込みには「六」あるいは「久」の墨書がある。本遺跡の西方800mほどの距離にある山崎A・B遺跡では、174と墨書部位・筆跡・器形を全く同じくする土師器椀が複数出土している。同遺跡は両側を沢で隔てられた丘陵平坦部に立地し、横マクリ遺跡を見下ろすような高台に位置する。平成18年に行われた調査で、平安時代（9・10世紀）の掘立柱建物9棟と土坑やピット多数が検出され、集落跡であることが分かっている〔木島2007〕。本遺跡から農具であるエブリが出土したり、プラントオバールが検出（第VI章参照）されていることなど

を勘案すれば、集落である山崎A・B遺跡に対して、本遺跡は生産地であった可能性が推定される。174の出土は、その蓋然性の高さを示すものと考えてよかろう。なお、本遺跡から出土した須恵器・土師器は、春日真実氏の編年〔春日1999〕のVI～VII期（9世紀後半～10世紀前葉）にはほぼ比定され、山崎A・B遺跡と同時期に営まれたものと言えよう。

175は珠洲焼片口鉢、176は白磁碗である。山崎A・B遺跡では中世（13世紀）の遺構・遺物も発見されており、関係性が推定される。

B 木製品（図版12・35）

椀・杭・浮子・エブリ・性格不明の加工材など、計11点を図示した。種別や法量・本取りなどは第14表を参照願いたい。特別な出土状態を示すものはなく、V～V'層から散在して出土した。

178・179は漆塗椀である。178は高台疊付から底面を除き、内外面共に全面黒色漆を塗装している。材は両者ともにケヤキである。181は形代であろうか。木目から剥落しており、厚さは現状計測値である。

183は大型の浮子で、完形品である。両端には段が作り出され、刻みが施される。184～187は何を

報告No.	グリッド	層位	種別・形態	法量(cm)			本取り	樹種
				長さ・口径	幅・底径	厚さ・漆高		
178	39M8	V	漆塗椀	14.4	9.8	5.1	横木取り	ケヤキ
179	不明	V	漆塗椀		(復元径7.7)		横木取り	ケヤキ
180	40N14	VI	杭	13.8	3.9	4.7	丸木取り	
181	不明	V'	形代？	14.1	1.3	(0.8)	板目	スギ
182	41N10	V'	箸状	(15.6)	0.7	0.5	板目	
183	38M10	V	浮子	31.7	3.6	2.0	板目	スギ
184	42M8	V'	円板状	11.9	(3.7)	0.7	板目	スギ
185	不明	V	板状	(8.6)	(3.8)	0.5	板目	
186	39N4	V'	板状	(23.1)	3.4	0.5	板目	スギ
187	40N3	V		24.8	5.2	3.3	板目	スギ
188	42N24	V'	エブリ	39.0	9.8	2.8	板目	スギ

第14表 木製品観察表

作り出したものが分からぬ。184は円盤を意識して加工されたようであるが全形は不明。中央の四角の穴が加工であるか否かも判断つかない。185・186は、下端部に加工痕が認められるものの、その他の部位は木目で剥落しており全形不明である。187は厚手の材に方形の割り込みを入れたものである。欠損部はなく、幅や長さは本来の形態を留めているものと判断した。188はエブリで、上半分ほどが欠損するが、ほぼ全形を窺うことができる。178・179以外は全てスギ材が使われている。

C 古銭（図版12・35）

180は北宋銭の熙寧元寶（真書体）である。計測値は銭径23.6×23.4mm、内径19.8×19.5mm、銭厚1.3～1.4mm、重量4.4gを測る。表土除去中に39N24～25グリッドから出土したが、本来はII～III層に帰属するものと推定している。

第VI章 自然科学分析

1 花粉化石

鈴木 茂 (バレオ・ラボ)

A 試料と分析方法

試料は基本層序-6より採取された7試料（試料番号1～7）とSD004の覆土1試料（試料番号8）の計8試料である。各試料について、試料1（III層）は黒褐色のシルトで、その上位は砂層で、調査区全体に一様に分布している。また下位も灰オリーブ色の細砂層である。試料2（IVa層）も黒褐色のシルトで、下位は細砂層となっている。試料3（IVb層）も黒褐色のシルト、試料4（V層）は黒褐色の粘土質シルトで、本層は平安時代の遺物包含層である。試料5（V'層）は暗オリーブ褐色の砂質シルトで、やはり平安時代の遺物包含層である。試料6（VI層）は青灰色のシルトで、本層は古墳時代前期の遺物包含層である。試料7（VII層）は青灰色の砂質シルトである。また試料8（SD004覆土）はオリーブ黒色の粘土質シルトで、多量の炭化物片が混入している。これら8試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約4～6g）を遠速管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え逆心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また体積を測定した試料について上記した方法にはば従って花粉分析を行い、単位体積当たりの花粉粒量を求めた。

B 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉40、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計75である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第15表に、それらの分布を第24図に示したが、試料8については得られた花粉粒数が非常に少なく、分布図として示すことが出来なかった。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉とシダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基準とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括していれてある。

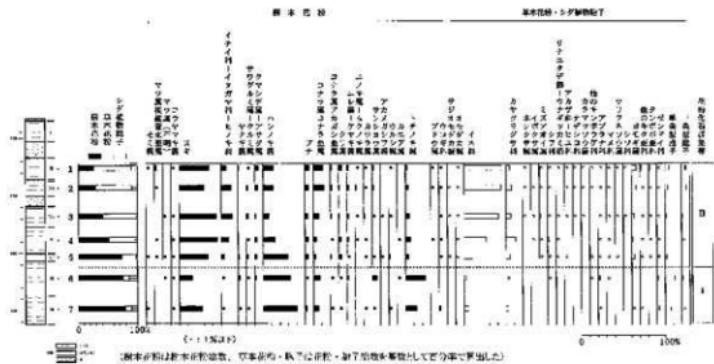
基本土層 検鏡の結果、樹木花粉に層位の変化が認められたことから、花粉化石群集帯（下位よりI・II）を設定し、以下にその特長について示す。

花粉帶I（試料6・7）はハンノキ属の優占で特徴づけられる。スギやトチノキ属も多く、スギは試料7で出現率が30%近くを示し、トチノキ属は試料6で20%を越えている。次いでコナラ属コナラ亜属が5～10%の出現率を示しており、その他ヤナギ属やサンショウ属などが得られている。草本類の占める割合は低く、検出分類群数も少なくなっている。その中イネ科が5%前後の出現率を示している。

相名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8
日本									
ヒマツ属	<i>Abies</i>	1	-	-	-	1	-	1	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	2	1	1	-	1	-	-	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(落葉松類)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	6	1	-	1	1	-	-	-
マツ属(不規)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	2	-	1	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Schima</i>	1	-	1	2	2	1	2	-
スイカズラ属	<i>Cryptomeria</i> japonica D. Don	67	63	111	120	71	32	56	6
イチイ属-イヌイヌカケ属-ヒノキ属	<i>T. c.</i>	12	26	83	23	8	2	1	-
ヤナガ属	<i>Salix</i>	2	-	-	5	6	2	-	-
サリガミ属-ゴールド属	<i>Prunus</i> - <i>Juglans</i>	1	4	6	1	5	2	2	2
クマシタ属-アサガホ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	8	8	4	8	6	4	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	5	-	9	5	2	2	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	25	26	18	37	81	27	82	6
ブナ属	<i>Fagus</i> crenata Blume	10	9	8	11	8	2	5	-
コナラ属-コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidophlebia</i>	21	27	17	10	6	17	12	4
コナラ属-カガシ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	3	6	5	1	3	2	2	2
シリ属	<i>Castanea</i>	8	3	8	8	2	1	5	-
シノヒメ属	<i>Castanopsis</i>	-	1	1	-	-	-	-	-
ニレ属-ニケキ属	<i>Fraxinus</i>	4	5	5	5	2	4	-	1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Cellaria</i> - <i>Chamaetha</i>	1	3	1	2	-	-	-	-
ツヤザクラ属	<i>Excoecaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	<i>Cordia</i> sp.	1	1	3	1	1	-	1	-
サクランボ属	<i>Prunus</i>	1	2	-	-	1	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	4	4	1	-	1	12	1	-
ユズリハ属	<i>Raphiolephilum</i>	-	-	1	-	1	-	-	-
アカミヌシワ属	<i>Mallotus</i>	-	-	1	-	1	-	-	-
ウルシ属	<i>Ulmus</i>	1	-	2	-	3	2	1	-
シナノキ属	<i>Colostrobus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	1	-	-	-	-
トチノキ属	<i>Anacardius</i>	4	8	12	17	8	49	26	6
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	-	1	-	-	-
ジグロ属	<i>Vitis</i>	1	1	-	1	-	-	-	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
マツタケ属-最近似種	<i>cfr. Arceuthis</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ属	<i>Araliaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
イボクイ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	2	-	1	-	-
トネリコ属	<i>Prunus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
ニワトコ属-最近似種	<i>cfr. Sambucus</i>	-	1	1	-	1	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
タニウツギ属	<i>Wolfga</i>	-	4	-	1	-	-	-	-
日本									
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
ヒムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	1	-	-	1	-	-	-
ナジオガタ属	<i>Alisma</i>	-	1	1	-	1	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	4	3	5	3	1	-	-	-
スプルタニミズオバガ属	<i>Elymus</i> - <i>Ostria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	327	318	240	132	29	7	16	9
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	32	MC	34	89	14	-	7	1
ホシクサ属	<i>Eriocaulaceae</i>	1	2	1	-	-	-	-	-
スズクサ属	<i>Commelinaceae</i>	2	-	-	-	-	-	-	-
イボクイ属	<i>Araliaceae</i>	-	1	1	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monachoria</i>	5	4	7	1	1	-	-	-
クワガタ属	<i>Noraceae</i>	5	3	6	7	2	2	-	-
シダ属	<i>Rosaceae</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
サリエリテラ-ウナギカモキ属	<i>Polygonaceae</i> sect. <i>Purshianae-Behnianae</i>	1	-	1	1	-	-	-	-
アカガシ-ヒユクイ属	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	4	2	1	-	1	-	-	-
ナダンソ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	2	1	-	-	-	-	-
カラマツ属	<i>Thaliaceae</i>	6	1	1	-	-	-	-	-
他のマツ属	<i>other Pinaceae</i>	2	1	-	-	1	1	-	-
アブリソウ属	<i>Cruciferaceae</i>	2	2	2	1	2	5	2	-
ニシキソウ属-最近似種	<i>cfr. Malpighiaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	1	-	-	-	-	3	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	8	1	2	1	1	1	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	2	-	1	-	1	-	-	-
キカクソウ属	<i>Rotala</i>	-	-	1	-	-	-	-	-
アリノウタグサ属	<i>Holaragis</i>	3	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	4	5	1	-	-	-	-	-
シルク	<i>Labiatae</i>	1	-	1	-	-	-	-	-
エヌカシ属	<i>Patrinia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	41	37	18	6	10	6	2	-
他のヨモギ属	<i>other Tiliaceae</i>	10	2	4	2	2	-	1	3
タンポポ属	<i>Liguliflorae</i>	14	4	1	1	-	-	-	-
シダ植物	<i>Lycopodiaceae</i>	-	1	-	1	-	-	-	-
ヒカゲソウ属	<i>Commelinaceae</i>	4	6	1	1	4	7	-	-
ビャクダン科	<i>Monocots</i> spore	38	24	10	21	5	32	16	3
三葉型孢子	<i>Trilets</i> spore	35	42	7	4	-	4	2	-
樹木花粉	<i>Arboresc pollen</i>	186	203	249	260	208	297	293	36
草本花粉	<i>Herbaceous pollen</i>	472	415	210	211	20	27	28	-
シダ花粉	<i>Spores</i>	76	65	18	39	7	40	27	8
花粉-孢子總合	<i>Total Pollen & Spores</i>	735	720	605	502	288	273	237	46
不顯花粉	<i>Unknown pollen</i>	56	47	15	29	27	68	48	19

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

第15表 産出花粉化石一覧表



第24図 主要花粉化石分布図

花粉帯II(試料1~5)はスギの最優占で特徴づけられる。イチイ科一ヌガヤ科ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)も明らかな増加傾向を示すが、上部ではやや出現率を下げている。またコナラ亜属が上部2試料で増加傾向を示しており、マツ属複数管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)も試料1で1%を越えている。さらにコナラ属アカガシ亜属多くの試料で1%を越えるようになっている。一方花粉帯Iで最優占していたハンノキ属は急減しているが、上部試料ではやや回復傾向が認められる。トチノキ属も5%前後の出現率に急減している。草本類ではイネ科の急激な増加が特徴的であり、上部試料では45%近くを示している。次いでカヤツリグサ科が多く、出現率は5%を示し、ヨモギ属も全試料で1%を越えている。その他では水生植物のオモダカ属やミズアオイ属(いずれも抽水植物)が連続して検出されており、同じ抽水植物のサジオモダカ属やイボクサ属多くの試料で観察されている。

SD004 観察された花粉数は非常に少なく、その中で最も多く得られているのはスギとハンノキ属で、次いでクリ属、トチノキ属、コナラ亜属と続いている。草本類はさらに少なく、その中ではタンボポ科が他の試料と比べや目立った産出を示している。

また単位体積当たりの花粉粒量が求められており、試料1が17,921個体、試料2が18,372個体、試料3が57,576個体、試料4が37,973個体、試料5が24,480個体、試料6が3,838個体、試料7が1,675個体、試料8が653個体であった。

C 遺跡周辺の古植生

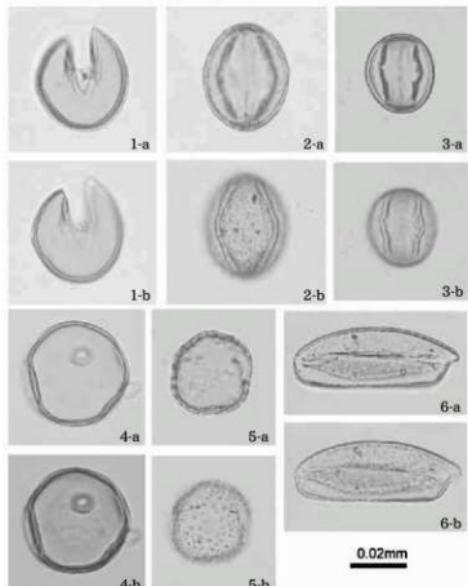
設定した花粉帯を基に横マクリ遺跡周辺の植生変遷について示す。なおSD004より得られた花粉化石は基本土層-6の花粉帯Iとはほぼ同様と推測され、これは年代測定結果(3世紀後半から4世紀前半)と矛盾していないと考える。

花粉帯I期は出土遺物から古墳時代前期頃と考えられる。この時期の遺跡周辺低地部はハンノキ属を主体にヤナギ属やサワグルミ属一クルミ属を交えた湿地林が形成されていたとみられる。またこの低地部から丘陵部斜面にかけてはスギ林が成立しており、トチノキ属を主体とした落葉広葉樹林も林分を広げていたと推測され、プランツ・オーバル分析からその下草の存在でクマザサ属型のササ類(ミヤコザサやチマキ

ザサなど)が多く生育していたとみられる。

花粉帯II期は出土遺物から平安時代以降と考えられる。この頃になるとスギ林の拡大が特徴的であり、丘陵部斜面を中心にしてスギやヒノキ類を中心とした温帶性針葉樹林が広く成立するようになったとみられる。また本帯上部においてコナラ属やニヨウマツ類の増加がみられ、この時期これらの二次林が跡周辺においてみられるようになったことを示していると推察される。さらにアカガシ属などの常緑広葉樹類も丘陵部で林分を広げるようになったとみられる。

一方低地部ではイネ科の急増が特徴的である。プラント・オパール分析は本帯下部試料のみであるがイネが検出されており、稻作の存在が推測されている。また花粉分析においてオモダカやコナギといった水田雜草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属が本帯に入り全試料で観察されている。こうしたことから少なくとも試料採取地点周辺において水田稻作が行われるようになった可能性が高いと推察されよう。このように平安時代に入り低地部では水田稻作が行われるようになったと推測され、花粉帯Iでみられたハンノキ属を主体とした湿地林は切り開かれ、水田化していったとみられる。しかしながらハンノキ属はまったく無くなることはなく、上部ではや回復する傾向が認められる。これについて、かつてハンノキは畦道などに植えられ柵として利用されていたことがあり、そうした傾向が示されているのではないかと思われる。



1:スギ PLCSS 4215 試料3 4:イネ科 PLCSS 4217 試料3
2:コナラ属コナラ属 PLCSS 4216 試料3 5:オモダカ属 PLCSS 4218 試料3
3:コナラ属アカガシ属 PLCSS 4220 試料3 6:ミズアオイ属 PLCSS 4219 試料3

第25図 横マクリ跡の花粉化石

2 樹種同定

野村 敏江（パレオ・ラボ）

A 試料の採取と方法

材組織の切片採取では、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）の3方向を薄くそぎ取ってスライドガラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。作成したプレパラートは光学顕微鏡下で観察した。同定を行った試料については写真図版（第26図）を添付し、その材組織を結果に記載した。なお、作成したプレパラートは財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

B 結果と考察

樹種同定の結果を第16表に示した。同定の結果、針葉樹であるスギが6点、落葉広葉樹であるハンノキ属ハンノキ亜属（以下ハンノキ亜属）が2点、ケヤキが2点の合計3分類群が同定された。No.1の樹皮付樹木はハンノキ亜属であり、エブリや浮子・木製品（No.3・4・5・6・7・8）にはスギ、No.2の漆塗椀とNo.9の木製品にはケヤキが用いられていた。

今回同定された木製品はスギを中心とした樹種構成であった。エブリには普通アカガシ亜属が用いられるが〔島地・伊東1988〕、No.3のエブリはスギであった。容器類にはケヤキが用いられていた。ケヤキは容器の用材でよく用いられる広葉樹であり、椀ではケヤキが好んで用いられるとしている〔島地・伊東1988〕。自然木はハンノキ亜属で、遺跡周辺の低湿地の環境を反映していると考えられた。

次に同定された樹種の材組織について記載を行なう。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.) D.Don スギ科 （第26図1a-1c No.7）

仮道管および樹脂細胞、放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、放射組織は2~15細胞高になる。放射断面（柾目）の放射組織と仮道管との間の分野壁孔は孔口の大きく開いたスギ型で、1分野に2~3個存在する。スギは高さ30~40mになる常緑高木である。自生状態では山地の沢沿いに多く生育する。材は比較的軽軟で切削などの加工は容易であり、乾燥も容易で割裂性が大きい。

(2) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus* subgen. *Alnus* カバノキ科 （第26図2a-2c No.1）

単独または複合した道管が接線状に連なる。道管径は中庸からやや小の散孔材。集合放射組織は年輪界で内側に凹む。放射組織は單列で同性であり、集合放射組織がある。道管の穿孔は階段数20程度の階段穿孔である。ハンノキ属ハンノキ亜属には、ハンノキ、ケヤマハンノキなど7種がある。

分析No.	実測No.	樹種	遺物名	出土位置	PLD-番号	備考
1		ハンノキ亜属	自然木	42Nグリッド	PLD-7273	樹皮付樹木
2	178	ケヤキ	漆塗椀			
3	188	スギ	エブリ	No.29付近		追柾目
4	183	スギ	浮子	38M10		板目
5	187	スギ	木製品	40N3		板目
6	181	スギ	木製品			板目
7	184	スギ	木製品	42M8		柾目
8	186	スギ	木製品	39N4		板目
9	179	ケヤキ	木製品			

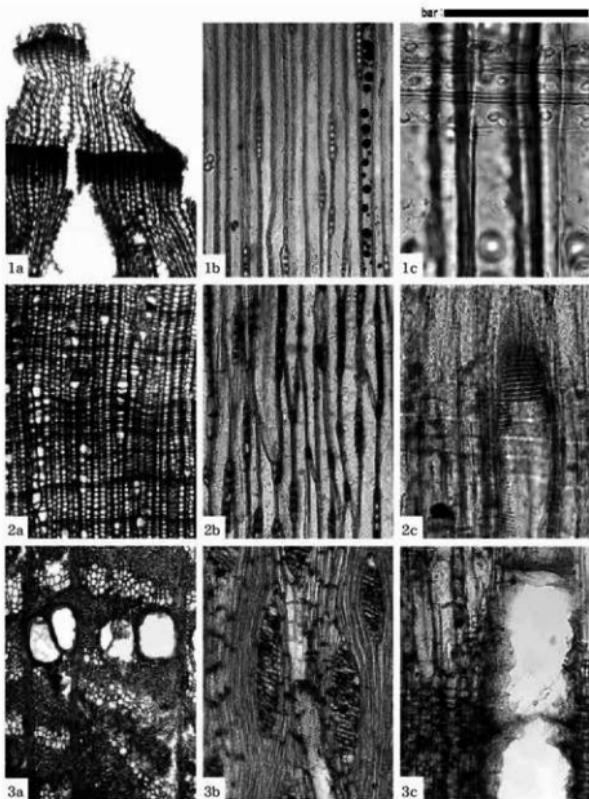
第16表 木製品の樹種同定結果

(3) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 (第26図 3a-3c No.2)

道管は大型の環孔材で、孔周囲の小道管は数個複合して接線状に並ぶ。放射組織は5細胞幅程度で紡錘形のものが目立ち、上下には大型の直立細胞がある。道管は単穿孔であり、小道管にはらせん肥厚がみられる。ケヤキは北海道・本州・四国・九州の渓谷林や丘陵部、山地によく生育する高さ20mほどの落葉高木である。材はやや重くて硬いが切削などの加工はそれほど困難ではない。

引用文献

島地謙・伊東隆夫編 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣 p296



1a-1c:スギ (No.7) 2a-2c:ハンノキ属 (No.1) 3a-3c:ケヤキ (No.2)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

Scale bar=スギ:a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.1mm ハンノキ属:a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.2mm

ケヤキ:a:1.0mm, b:0.4mm, c:0.4mm

第26図 木製品の材組織の光学顕微鏡写真

3 プラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

A 試料と分析方法

試料は基本層序-6より採取された4試料である。各試料について、試料1(V層)は黒褐色の粘土質シルトで、平安時代の遺物包含層である。試料2(V'層)は暗オリーブ褐色の砂質シルトで、やはり平安時代の遺物包含層である。試料3(VI層)は青灰色のシルトで、古墳時代前期の遺物包含層である。試料4(VII層)は青灰色の砂質シルトで、上面が遺構確認面に当たる。プラント・オパール分析はこれら4試料について下記の方法にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスピース(直径約40 μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波モジュライザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレバラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスピースが300個に達するまで行った。

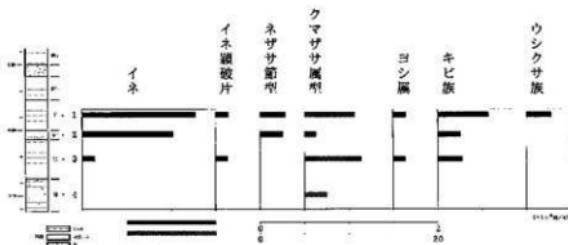
B 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピース個数の比率から試料1g当たりの各プラント・オパール個数を求め(第17表)、それらの分布を第27図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当たりの検出個数である。

検鏡の結果、最下部の試料4(VII層)を除く上位3試料でイネのプラント・オパールが検出された。個

試料番号	イネ (個/g)	イネ網破片 (個/g)	ネササ属型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	12,800	1,400	2,800	56,700	1,400	5,700	2,800	9,900
2	10,300	0	2,600	12,800	0	2,600	0	3,800
3	1,400	1,400	0	64,000	1,400	2,700	0	1,400
4	0	0	0	25,000	0	0	0	0

第17表 試料1g当たりのプラント・オパール個数



第27図 プラント・オパール分布図

数的には上位2試料では10,000個を越えているが、試料3では1,400個であり5,000個に達していない。またイネの穎部に形成される珪酸体の破片が試料1と3で若干観察されている。

イネ以外について、最も多く検出されているのはクマザサ属型で、全試料10,000個以上を示している。キビ族がイネと同様に最下部を除き検出されているが、試料1で5,000個を越えている程度とそれほど多くは無い。その他ネザサ節型やヨシ属、ウシクサ族などが若干検出されている。

なお単位体積当たりのプラント・オパール個数も求められており、試料1（V層）が22,003個、試料2（V'層）が6,344個、試料3（VI層）が18,812個、試料4（VII層）が8,193個である。

C 稲作について

上記したように、最下部試料を除きイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている【藤原1984】。こうしたことから、稻作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。横マクリ遺跡では試料1と2でこの5,000個をはるかに越えるイネのプラント・オパールが検出されており、検出個数のみからは稻作が行われていた可能性は高いと判断される。同試料の花粉分析結果をみるとイネ科花粉が急増する試料に当たり、オモダカ属やミズアオイ属といった水田雜草を含む分類群も検出され始めている。こうしたことから水田稻作が行われていた可能性は高いと分析結果からは推測されるが、発掘調査からは水田といった遺構は検出されていないようであり、またイネのプラント・オパールの保存状態も悪いことから他の地点より流れ込んでいる可能性も考えられ、水田稻作についてはさらに検討が必要であろう。

また試料3（VI層）からも若干のイネのプラント・オパールが検出されており、イネの穎に形成される珪酸体の破片も観察されている。しかしながら個数的には非常に少なく、花粉分析からも稻作の様相は観られないことから稻作の可能性は低いと判断されよう。

D 遺跡周辺のイネ科植物

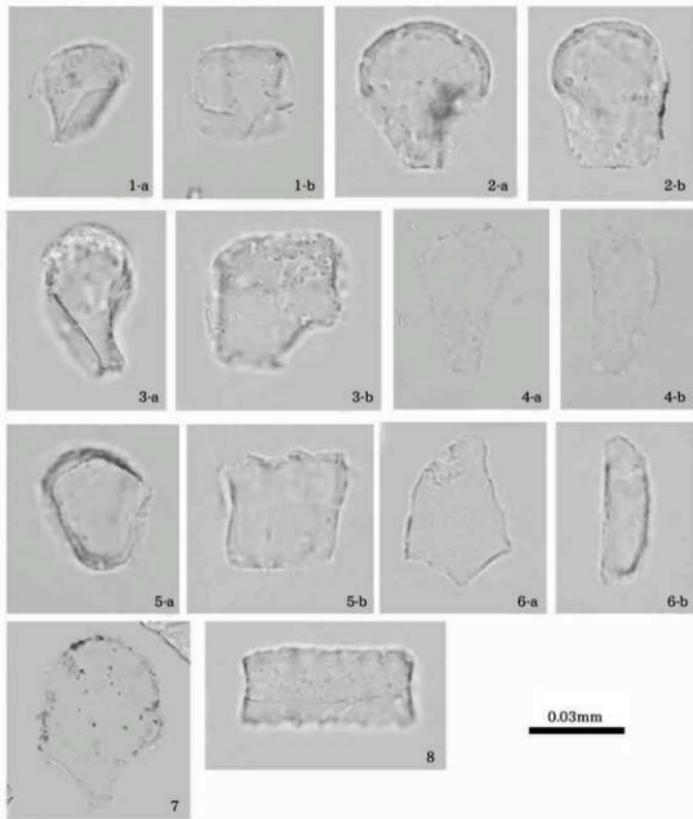
クマザサ属型が最も多く検出されており、このクマザサ属型のササ類（チマキザサやミヤコザサなど）が遺跡周辺に多く生育していたとみられる。ここで花粉分析結果をみると、スギ林とともにコナラ属コナラ亜属やトチノキ属を主体とする落葉広葉樹林の存在が推測されており、クマザサ属型のササ類はこの落葉広葉樹林の下草の存在で分布を広げていたと推測される。一方ネザサ節型のササ類（ケナザサなど）やウシクサ族（ススキやチガヤなど）については日のあたる開けたところでの生育が考えられ、遺跡周辺や上記森林の林縁部などに生育していたと推測される。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雜草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。しかしながらイネと似たような産出傾向を示していることから、検出されたキビ族についてはタイヌビエなどの水田雜草類に由来するキビ族ではないかと思われる。

ヨシ属が若干検出されており、自然流路周辺などにヨシやツルヨシといったヨシ属が一部生育していたとみられる。また上記したように水田稻作が行われていた可能性も考えられ、ヨシ属については水田雜草として水田内にも若干生育していたことも考えられよう。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227 p.2-7
- 藤原宏志・佐々木彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（*Oryza*）属植物における機動細胞珪酸体の形状－」『考古学と自然科学』11 p.9-20



1~3:イネ (a:断面, b:側面) 1:試料1, 2:試料2, 3:試料3

4:ウシクサ族 (a:断面, b:側面) 試料1

5:ネザサ節型 (a:断面, b:側面) 試料1

6:クマザサ属型 (a:断面, b:側面) 試料1

7:ヨシ属 (断面) 試料1

8:キビ族 (a:断面, b:側面) 試料1

第28図 プラント・オパール

4 テフラ分析

黒澤 一男・長友 純子・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

A 試料と分析方法

テフラ分析には、新潟県糸魚川市の横マクリ遺跡において採取された2試料（IVa層、V層）を用い、以下の手順で分析をおこなった。

- (1) 各試料について自然含水状態で秤量し、テフラ分析試料とした。また一部の試料もしくは別の試料を乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。
- (2) 1 φ (0.5mm : 30 メッシュ)、2 φ (0.25mm : 60 メッシュ)、3 φ (0.125mm : 120 メッシュ)、4 φ (0.063mm : 250 メッシュ) の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式ふるい振とう機を用いて、湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし、試料の乾燥重量中における粒径4 φ以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。
- (3) 4 φの残渣（粒径0.125～0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。
- (4) 分離した重軽鉱物について封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、鉱物組成を求めた。重鉱物は、ジルコン、斜方輝石（主にしそ輝石）、単斜輝石（主に普通輝石）、角閃石（ホルンブレンド）、磁鐵鉱とチタン鉄鉱、不透明鉱物（その他の不透明粒子を含む）に分類し、軽鉱物は火山ガラスと長石類に分類した。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井〔2003〕の分類基準に従い形態分類をおこなった。

B 鉱物分析結果

本遺跡において堆積物の鉱物分析をおこなった結果を第18表、第29図に示し、以下にそれぞれについて述べる。

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、両試料ともおよそ17%となった。砂粒分の粒度組成は、IVa層とV層のどちらも4 φ残渣が53%以上と高い値を示し、3 φ残渣と4 φ残渣の合計は77%以上となつた。

重・軽鉱物比については、両試料とも軽鉱物が96%以上となり、V層においては軽鉱物が97.0%と非常に高い値をとる。重鉱物は、斜方輝石、単斜輝石を主体とする組成である。斜方輝石は両試料とも半分以上を占め、52.8%、55.7%と高い含有率を示す。単斜輝石の含有率は26.8%、31.6%となる。角閃石の含有量は約12%となり、磁鐵鉱はおおむね6%以下の含有量となる。軽鉱物は、いずれの試料においても長石が93%以上の高い値を示し、火山ガラスは7%未満の含有量である。

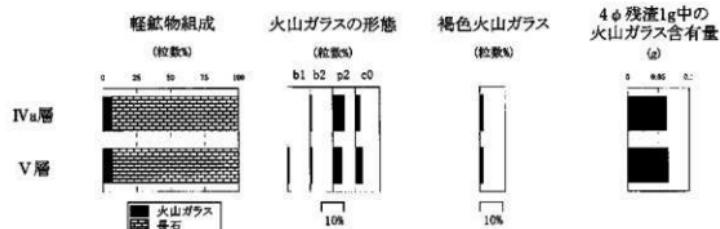
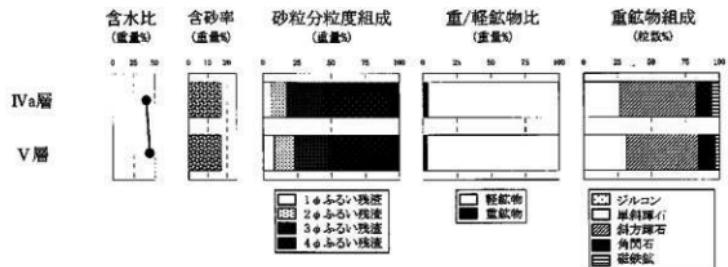
火山ガラスの形態は、IVa層とV層のどちらの試料においてもスponジ状（p2）が最も多く検出され、次いで破碎型（c0）が検出されている。1gあたりの4 φ残渣中に含まれる火山ガラス含有量は、0.06～0.07g程度である。

試料名	含水率 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				4φ残渣中 火山ガラス 含有量 (g)
			1φ	2φ	3φ	4φ	
IVa層	39.9	16.8	5.9	11.3	25.6	57.1	0.063
V層	44.0	16.9	8.1	14.9	23.8	53.2	0.066

試料名	火山ガラス含有量 (粒数)		褐色 火山ガラス 含有量 (粒数%)	火山ガラス形態分類(粒数)				
	火山ガラス Vg	長石 Pl		b1	b2	p1	p2	c0
IVa層	16	228	1.2	-	1	-	11	4
V層	18	248	1.1	1	1	-	9	7

試料名	重・軽鉱物組成 (重量%)		重鉱物組成(粒数)					
	重鉱物	軽鉱物	Zr	Cpx	Opx	Hor	Mag	Opq
IVa層	3.6	96.4	1	61	127	27	12	92
V層	3.0	97.0	-	73	122	28	8	80

第18表 テフラ分析結果



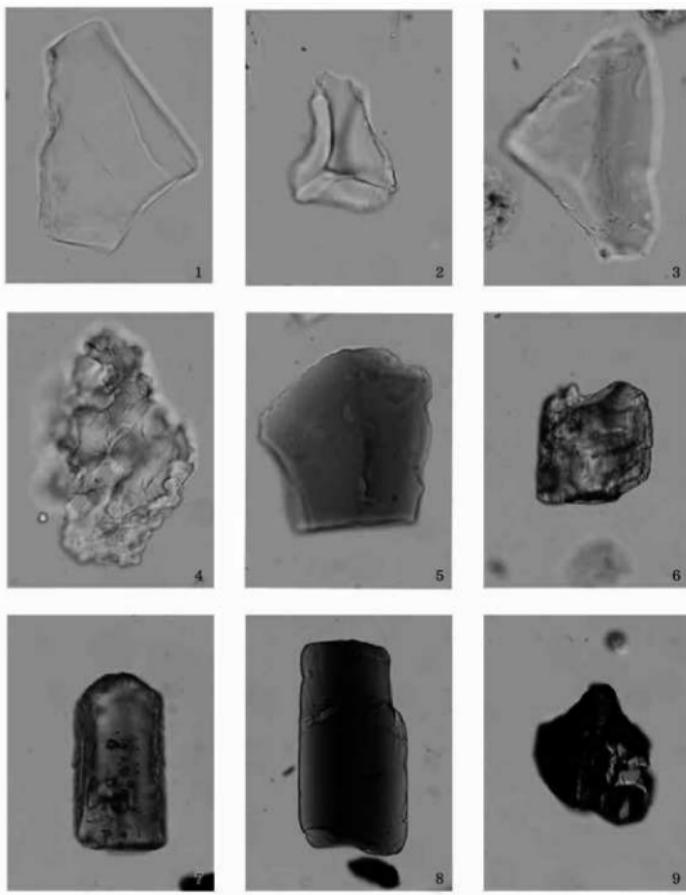
第19図 堆積物の鉱物組成

C おわりに

今回の分析において、IVa層およびV層において火山ガラスの含有量は7%未満と低く、明瞭なテフラを検出することができなかった。また鉱物組成においてIVa層とV層には大きな差が認められなかった。よって両層に認められる火山ガラスを含むテフラは同一起源のものと考えられ、堆積物中に拡散して堆積していると考えられる。そのため今回の試料からは一次的な堆積物としてのテフラの層位を決めるることはできなかった。

引用文献

町田 洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 p. 336



- 1.長石（IVa層）
 2.パブル型Y字状火山ガラス（IVa層）
 3.急冷破碎型火山ガラス（IVa層）
 4.軽石型スponジ状火山ガラス（IVa層）
 5.黄褐色火山ガラス（IVa層）
 6.单斜辉石（IVa層）
 7.斜方辉石（IVa層）
 8.角闪石（IVa層）
 9.磁铁矿（V層）

第30図 堆積物中に含まれる鉱物（スケールは0.1mm）

5 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林絢一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・孔智賢

A 試料と方法

測定試料は、生材 1 点と土壌ブロックから採取した炭化材 2 点である。試料の想定年代は、出土遺物から古墳時代前期である。なお、試料の調整は山形、瀬谷、Lomtadidze、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は伊藤、孔が作成した。

木① (PLD-7273, ハンノキ属) は、遺物集中ブロックから採取された樹皮付きの生材で、最外年輪から約 2 年輪分を試料とした (樹種同定結果の詳細については別項参照)。

炭化材 (PLD-7274、樹種未同定) は、溝 (SD004) の東西土層 (SD004-SPA ~ SD004-SPA') で採取された覆土柱状試料から抽出した試料である。炭化材 (PLD-7275、樹種未同定) は、遺物集中ブロック 10 の南北土層 (ブロック 10-SPA ~ ブロック 10-SPA') V 層①層から採取された覆土柱状試料から抽出した試料である。

覆土柱状試料は水洗し、抽出された炭化物を測定したが、2 点とも最外年輪以外の部分不明の炭化材である。

測定試料の情報、調整データは第 19 表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-7273	遺物 No : 木① その他：遺物集中ブロック出土	試料の種類：生材・材 (樹皮付きのハンノキ属：約 2 年輪分) 状態 : wet カビ : 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	PaleoLabo : NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7274	造構 : SD004 解剖 : 覆土	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：不明 状態 : wet カビ : 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	PaleoLabo : NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-7275	遺物 No : ブロック 10 層位 : 覆土 V 層①層	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：不明 状態 : wet カビ : 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	PaleoLabo : NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

第 19 表 測定試料及び処理

B 結 果

第 20 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、第 31 図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD 1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲		曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲	
PLD-7273	-27.96 \pm 0.20	1450 \pm 25	595AD (68.2%) 640AD	565AD (95.4%) 650AD	1452 \pm 23
PLD-7274	-23.57 \pm 0.17	1730 \pm 25	255AD (43.8%) 305AD 310AD (24.4%) 345AD	240AD (95.4%) 390AD	1732 \pm 23
PLD-7275	-22.48 \pm 0.18	2045 \pm 25	95BC (68.2%) AD	160BC (6.9%) 130BC 120BC (88.5%) 20AD	2046 \pm 24

第20表 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2 % であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、1 σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2 % 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2 σ 曆年代範囲は 95.4 % 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

C 考 察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年較正を行った。得られた曆年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

本① (PLD-7273) の曆年較正年代は、2 σ (95.4%) の確率で、565-650calAD (95.4%)、すなわち 6 世紀後半～7 世紀前半の年代範囲を示し、想定年代よりも新しい年代範囲であった。この試料は最外年輪から採取されたため、測定試料が伐採年代もしくは枯死年代を示していることが考えられる。

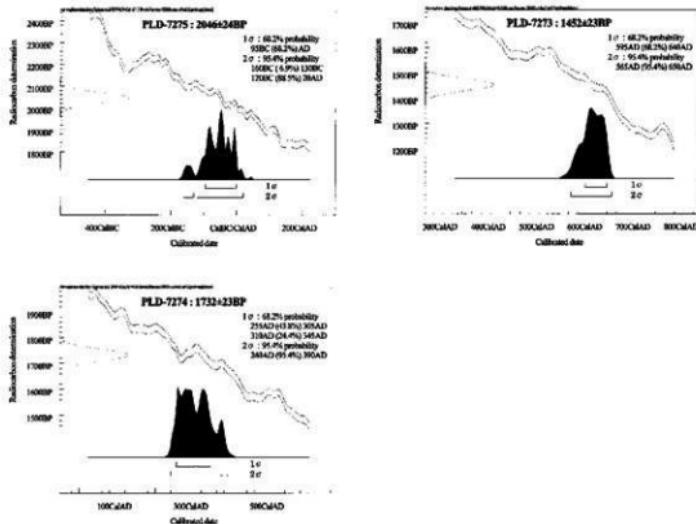
SD004 の炭化材 (PLD-7274) の曆年較正年代は、2 σ の確率で、240-390calAD (95.4%)、すなわち 3 世紀前半～4 世紀後半の年代範囲を示し、想定年代の範疇であった。

ブロック 10 の炭化材 (PLD-7275) の曆年較正年代は、2 σ の確率で高い年代範囲をみると、120calBC-20calAD (88.5%)、すなわち紀元前 2 世紀前半～紀元後 1 世紀の年代範囲を示した。

この年代値は、弥生時代中期後半～後期前半の年代範囲にあたることから、想定年代よりも古い年代範囲であった。3 点ともに炭素回収率は 50 % を超え、測定に必要な充分な炭素が回収された。ただし、炭化材の 2 点はいずれも最外年輪が不明な材であることから、試料採取位置が最外年輪 (= 伐採年) から何年離れているかによって、伐採年より古い年代値が得られている可能性を考慮する必要がある。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村後夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』3-20。
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第31図 歴年較正結果

第VII章 まとめ

1 出土土器群の編年位置と特徴

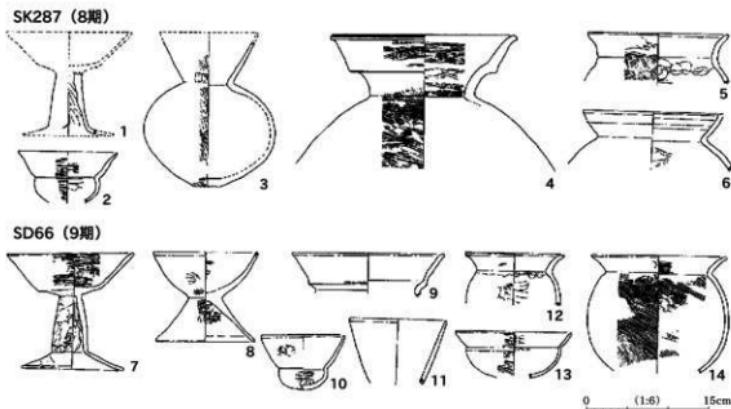
横マクリ遺跡から出土した土器はコンテナ46箱に及び、遺物集中ブロックを形成しながら、その場で潰れたようにまとめて出土した事例が多かった。当然ながら器形復元可能な個体は相当量になると予測されるが、整理期間の制約から、本書では約170個体を提示できたに過ぎない。複数の遺物集中ブロックで接合および同一個体共有関係が認められたことから（第VII章2参照）、各ブロックが比較的短期間で形成されたことを窺わせる。本遺跡出土土器群は、当該期の一括資料を検証するうえで今後の基準になり得るものであろう。ここでは、明らかな混入と判断できる弥生後期・古墳後期の土器を除く古墳前期の土器群について、既存の土器編年を参照しながら編年の位置づけを行うと共に、出土土器の観察結果をもとに主要器種の特徴について触れておこう。

A 編年の位置

横マクリ遺跡出土土器群は高杯・器台・壺・鉢・甕などの各器種から構成されるが、高杯A類、壺C類、壺E類といった畿内系土器が多く認められることを大きな特徴とする。「畿内系屈折脚」：高杯A類、「畿内系小型壺」：壺E類の組成・盛行は、既存の編年観【川村1993・2000、滝沢2005b】によれば8期以降の指標とされ、古墳前期後葉に位置づけられる。8期は、新潟県の古墳前期土器編年のなかでもひとつ画期と評価され、当期を境に土器群の構成が大きく変化するとされている。具体的には、8期は「北陸東北部系土器を残しつつ畿内系土器を相当に受容する段階」であり、9期は「ごく一部を除き、畿内系土器が定着する段階」として指標化され【川村1993】、畿内系土器が時期決定の目安となっている。以下、上越地方の当該期編年を詳しく検討した川村浩司氏の言説【川村1993】に従い、上越市津倉田遺跡一括出土例をもとに8～9期の様子を確認してみよう。

津倉田遺跡SK287一括資料では、本遺跡分類の高杯A類（第32図1）・壺C類（3）・壺E2類（2）といった畿内系土器に加えて、壺A類（4）・甕A2類・甕A3類（5）などが認められ、横マクリ遺跡例と良く似た構成をとる。ただし大きく異なるのは、布留甕（6）を組成する点で、これは遺跡の性格を反映した特徴と考えられている【川村2000】。なお、「布留甕」あるいは布留式系譜の甕は、津倉田遺跡のほかに、上越市蘿峰遺跡【川村1988】・小野沢西遺跡【土橋2004】・一之口遺跡【鈴木ほか1994】・下割遺跡【山崎ほか2004】・長岡市奈良崎遺跡【春日ほか2002】などで出土が確認されている。これらの遺跡の位置関係から、分布の中心が頸城地方にあることが明らかなものの、特に関川水系との関わりを窺わせる。一方、北陸地方では、越中西部～加賀以西に「布留甕」の盛行が確認されるものの、越中東部を境にその東側では、上記遺跡を除き分布が確認されていない。以上のことを勘案すれば、「布留甕」および布留式系譜の甕は、北陸地方ではなく、関川を経由して信州・関東方面からもたらされたと考えるべきであろう。

一方、津倉田遺跡SD66一括資料では、高杯A類（第32図7）・壺A類（9）・壺C類（11）・壺E1類（10）の畿内系土器に加えて、甕A2類（12）・甕A3類（14）。さらにSK287では確認できなかった高杯



第32図 上越市津倉田遺跡 [上越市史編さん委員会2003]

B類(18)や鉢(13)なども認められる。川村氏は、新しくなるほど胴部に比べて口頭部が長くなるという型式変化が畿内系小型壺で確認できるとして、SK287の壺E2類(2)→SD66の壺E1類(10)との型式組列を導出した。また、壺A類の胴部は新しくなるほど球形化するという変遷規から、胴部の丸みが強い壺A類(14)を新しい要素(=9期)と見た。さらに、SD66で出土した壺A類3点のうち、口縁端部が丸みを持つもの(横マクリ遺跡A3類)が2点、つまみ上げのもの(同A1・A2類)が1点であるのは、「この段階(=9期)でも不自然ではない」とし、A1・2類とA3類の組成率が時間差を反映するとの認識を示唆している。以上、これらの特徴を根拠にして、川村氏はSK287を8期、SD66を9期の基準資料に位置づけている。

翻って横マクリ遺跡出土土器群を見てみると、津倉田遺跡SK287・SD66出土例の両方の要素を確認することができる。すなわち、鋭敏な型式変化が覗えた畿内系小型壺である壺E類では、I区ブロック外からE2類(図版4-22)が、II区ブロック3からE1類(同30・31)2点が出土している。ブロック3では、壺A1・2類が2点、A3類が2点と同量認められるが、図示しなかった破片資料を確認していないため、これが実態を反映したものか否か判断できない。また、球形傾向にある壺は、ブロック8(図版4-16)やブロック10(図版6-73)などで散見されるが、多くを占めるほどではない。ブロックごとにより詳細に検討することで、さらに細かい差異を見出すことができる可能性はあるが、現状では、本遺跡出土土器群を8期と9期の2時期に明瞭に区分することができない。あるいは、本遺跡における出土状態が実態を示すのかも知れない。

B 各器種の特徴

1) 壺

口縁部形態 第V章において、「く字壺」「コ字壺」と呼ばれる在来系壺を、A1類(口縁端部を面取りするもの)・A2類(つまみ上げられたもの)・A3類(端部が丸いもの)の3類に細分した(第15図)。各類の組成比を調べるために、ブロック10・11・12・18、SD004において各類の破片数を集計したところ、

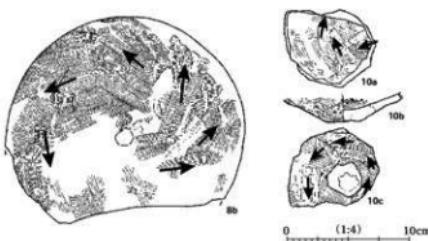
SD004を除く全てでA1類が半数以上を占め、A3類・A2類とそれに続くことが判明している。(第V章第3・5・7・9表)。甕の口縁部形態については、すでに前記したように、新しくなるほどA1・A2類よりもA3類の組成比が増すとの変遷案〔川村2000〕が提示されている。今後、各ブロックにおける口縁端部形態と他の器種との組み合わせから、この変遷案を検証する必要がある。

実際に土器を観察してみると、A1類の特徴である口縁外面の平坦面と、A2類の特徴である口縁内面の窪みを併せ持つ中間形態の資料(図版5-44、6-73、40-3-4など)が存在する。このことは、口縁端部の仕上げにおいて、口縁外面の押さえが強い場合にはA1類(111など)、口縁内面の押さえが強い場合にはA2類が作り出されたことを示しているのである。つまり、両者における口縁端部の形態差は、意図的なものというよりも、癖や偶発性といった同一手法における細かな違いを反映したものと想われる。

底部整形 甕の底部には丸底と平底があり、いくつかのブロックで集計を試みた結果、圧倒的に平底が多く、丸底は少数であった(第21表)。しかし、小さな平底、あるいは両者の中間的な形態も多く、自立するものを平底として分類したが、実際にはどちらかに迷うような形態も多い。第33図に示した8bは丸底、10は平底に分類したものである。両者と共に見られるのは、底部から観た場合、らせん状にハケメ調整が施されている点である。10の外側では、右→左のハケメを時計周り、内面では逆方向に施す。一方8bは、ハケメ単位の切り合いで一部で不鮮明ではあるが、同じように右→左のハケメを時計周りに施す様子を見て取ることができる。両者ともに土器を正位に置いたままで器面調整したとは考えられず、逆位にして施したと推測される。手持ちか、回転台を利用したものであったかは、器面に残された痕跡から明らかにすることはできなかったが、特徴的な底部調整方法として注意しておきたい。なお、定量的な集計を果たしていないが、同じ手法による器面調整例が主体を占めることはない。これは、甕の底部形態に、丸底または小さな平底が少ないと関係しよう。

2) 高 杯

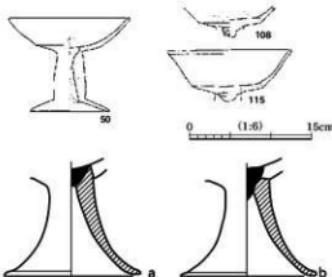
杯部と脚部の接合部において特徴的な手法を確認することができた。第34図に示した3例はその代表例で、杯部内面からねじ込むように充填した粘土塊が、脚部内部に飛び出して出ベソ状を成すものである。同様の手法は弥生後期～古墳前期の高杯で一般的に認め



第33図 甕底部の調整方法

	丸底	平底
SD004	3	9
ブロック10	1	6
ブロック11	4	6
ブロック12	5	11
ブロック18	0	5
計	13	37

第21表 甕の底部形態



第34図 高杯の製作手法 (aは〔寺沢ほか1980〕に加筆)

られ、「充填法」として知られている〔寺沢ほか1980〕。県内では、製作工程や接合時のタイミングを復元しながら、高杯製作手法に対する注視を促す試みがなされている〔尾崎2001など〕。横マクリ遺跡において充填法が確認できた全ての高杯では、杯部と出ベソ状粘土塊が接合した状態で出土したもの（図版40-1）だけが確認され、粘土塊が脚部と接着していたり、粘土塊のみが単独で出土する事例は皆無であった。このことは、杯部と出ベソ状粘土塊の接合が一体の工程であったことを窺わせ、逆に言えば、粘土塊と脚部との接合には、一定の休止期間が存在したこと示しているよう。これまで、「充填法」という用語の使用に際しては、脚部製作の後、粘土充填と杯部接合のどちらの工程が先に実施されたか不問としたものが多かった（第34図a）。しかし、横マクリ遺跡から出土した充填法の高杯に関して言えば、杯部接合とほぼ同時に粘土充填が行われたことが明らかである（第34図b）。そして、あらかじめ製作された杯部を脚部に接合した可能性が高いと考えられる。本遺跡出土高杯の充填法では、粘土塊をねじり込むように埋め込んだ結果、粘土塊の表面にらせん状の皺が作出されている点が特徴的である。今後は、これらが時間的・空間的にどれだけの広がりを持つものかが課題となろう。

3) 器 台

すでに第V章において触れたように、本遺跡から出土した器台では、透かしの位置にa・bの2タイプがあることが明らかとなった（第14図）。透かしの位置を確認できた12個体のうち、aタイプが5個体、bタイプが7個体と、後者がわずかに多い。しかし、これが有意な差であるのか否か、集計量が少ないため判然としない。器台を上から見た場合、3か所の透かしが構成する三角形は、aタイプでは正三角形、bタイプは二等辺三角形に近くなる。板に器台を少し斜め上方から見た場合、aタイプでは正面にある1か所の透かしだけが見えるのに比べ、bタイプは3か所全ての透かしが確認できることになる。すなわち、bタイプの器台は、正面性を意識して透かしを配置した可能性が高い。しかし、本遺跡から出土した両タイプの器台には、作り分けや使い分けを示すような痕跡を認めることができず、時期差なのか製作者（集団）の嗜好を示すものか、分析に値する糸口を見出すことができなかった。

両タイプの器台が、時間的・空間的に限定されるものか否かを調べるため、他遺跡例を検索してみたが、透かしの位置が記載された報告書は皆無に等しく、実態は不明であった。透かしを結ぶ三角形の底辺が脚部最大径よりも短ければaタイプ、ほぼ等しければbタイプと判断は比較的容易である。今後、器台の事実記載にあたって、透かしの位置を含めた記録化が必要であろう。

2 遺物の分布と出土状況

横マクリ遺跡で検出された遺構は方形区画溝（SD004）1基のみである。しかし、大量の古墳前期の土器・玉作を示す石器群を検出し、それらが遺物集中ブロックを形成する点に本遺跡の特徴がある。調査の初期段階で、遺構プランが不明瞭であるものの一定の範囲に遺物が集中する様子が窺えたことから、遺物集中ブロックの検出を予測して以下の調査方針を掲げて記録化を進めた。

- ① 遺物の全点記録を行い、ブロックの平面形態・分布状況などを把握する。
- ② 土器個々の出土状態を詳しく観察し、全点記録だけでは示すことができない情報を回収する。
- ③ 接合作業を重視し、同一遺物の分布から本遺跡における活動痕跡を復元する。

実際には、調査期間や天候のほか、調査指示の不徹底や方法的問題などが原因となり、掲げた方針のな

かで実践できたものはごくわずかである。

A 遺物集中ブロックの認定と記録化

遺物集中ブロックを可視的に把握するため、電子野帳を使用した3次元測量により出土遺物の全点記録を行った。しかし、調査初期に出土した遺物やブロック外で検出した遺物については、小グリッドごとに取り上げた遺物も少なからず存在する。そのため、第6・8～12図で示した遺物の分布状況が、全遺物の出土位置を正確に反映したものではないことを断っておきたい。本来であれば、出土遺物を小グリッド別に集計し直し、全遺物の出土位置を反映した分布図であることが望ましいが果たせなかつた。

遺物の接合関係の把握に主眼を置いたことから、出土状態を詳しく観察した後に、同一個体と把握されたものをひとつの点として測量した。そのため、その場でまとめて出土した多数の土器片も、単独で出土した1点の土器片も等価値のまま図示してある。全点測量の大きな利点のひとつは、電子野帳の設備と測量者の常駐という環境が整えば、機械的に出土遺物を記録化し、取り上げ作業が簡素化できることである。しかし、全ての情報が等価値とされるため、詳細な出土状態に関する情報が欠落するのが常である。そこで今回の調査では、デジタルカメラを多用して細かな写真撮影を心がけた。撮影したデータは当日の夜にプリントアウトして日誌に貼付し、簡単なメモを添えて記録化した。この方法は、後日、出土状態を確認する際に有効的であった。

遺物集中ブロックの範囲は、調査を進めながら遺物の可視的集中度をもとに便宜的にその場で判断した。その結果、調査時には2つのブロックと認識していたものが、測量図と照合した結果、同じブロックと判断されたものもある。

B 遺物集中ブロックの形成過程

各ブロックには大小あるが、土器を主体として構成されている点では共通する。石器の出土点数は少量で、第V章第12表に示したもののが総量である。よって、ここでは土器の出土状況を中心に述べる。各ブロックの出土状態の傾向として、検出レベルでは小破片が多く、下部に行くに従って大型破片やその場で潰れたような土器が多くあつた。このことは、ブロックが形成される初期段階には完形に近い土器や大型破片が廃棄され、その後、小破片を中心投棄された行為があつたことを示していよう。ブロック2では、遺物を順次取り上げながら土器の出土状態を観察した結果、ブロック最下部から、4個体の甕が並んで検出された（図版24～26）。口縁を上や横にして潰れた状態で出土したことから、廃棄時には、正位あるいは横位に置かれていたことを示している（図版24～27）。しかし注目されるのは、底部片の出土を確認することができなかつたことで、廃棄段階すでに底部が欠落していた可能性が高い。その可能性を補強するのがブロック8の出土状態である。多量の小破片を取り除いた下部から、甕1個体（図版4～17）が口縁～胴部上半を完全に遺存させた状態で直立して出土した（図版23～19）。ピットなどの遺構を伴わないかと土器周辺を断ち割って観察したが、掘り込みは見つからず、埋設されたものと判断することはできなかつた。しかし、明らかに胴部下半を欠いた土器が使用されていることを確認することができた。さらにブロック10では、倒立した甕がブロック下部で検出され、やはり胴部下半を欠損している（第9図・図版24～31）。これらの事例から、未だ状況証拠的な推論に過ぎないが、正位または逆位に甕を据える行為が存在した可能性を指摘することができる。また、胴下半を欠損する甕を観察すると、接合部から外されたり、故意に打ち欠いた様子は認めることができないため、日常使用中に偶然に壊れた甕を利用した可能性

が高い。

当初、遺物集中ブロックは遺構覆土の可能性が高いものと認識し、ベルトを残して土層断面を確認しながら調査を進めた。しかし、明確な掘り込みや床面・ピット・焼土などを検出することができなかつた。特定の器種がまとまる状況もなく、甕以外では、小型の器台や高杯が比較的原形を留めて出土した。また、ブロック10では特に炭化物が多く検出され、周辺と比較して黒く変色しているほどであった(第9図)。なお、SD004の覆土中でも、偏在はあるものの、多くの炭化物の混入が認められた。

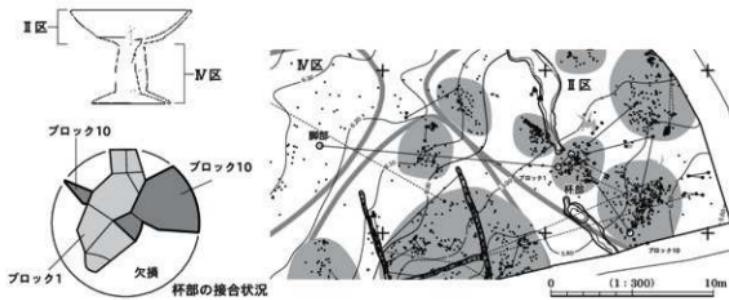
C 接合および同一個体共有関係(第35~37図)

異なる地区やブロック間で接合および同一個体共有関係が把握された資料は、すでに第IV章で詳しく記述・図示したとおりである(第8~12図)。本来であれば、出土した全資料を対象に一定の時間をかけて接合作業を行うべきであるが、整理期間は2ヶ月と短く、主要な器種を復元・実測することで精一杯であった(第1章2B参照)。そこで、報告書に掲載する個体のみを対象として、時間の許す限り接合作業を実施した。その結果、II区ブロック1・3・10、III区SD004・ブロック12・18でそれぞれ接合関係が認められ、各地区で検出されたブロックがほぼ同時に形成された可能性を指摘することができた。さらに、人為的な廃棄行為を示すと思われる事例がわずか3例ながら確認することができたため、以下にその詳細について述べよう。

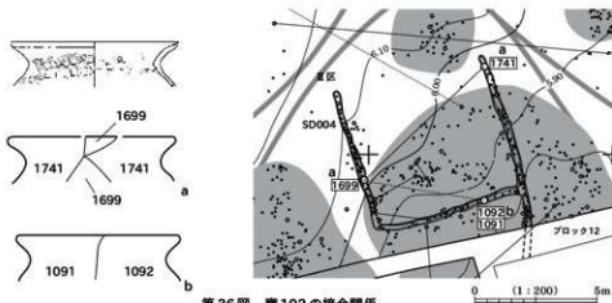
第35図は、高杯50の接合関係である。杯部がII区、脚部がIV区から別々に出土し、約15mの距離を置いて接合した。脚部は遺存率が良く、1地点から約半分を留めた状態で出土した。よって、IV区のなかでの接合関係はない。一方の杯部は、II区のなかで接合関係があり、ブロック1とブロック10に破片が散在する。杯部と脚部は、接合部から剥離したことが明らかで、打ち欠いたりした様子などは認められない。ブロック1はブロック10よりも地形的高所にあたることから、杯部破片の分布が自然の営為による可能性を全面的に否定することはできないが、土器片に顕著な摩滅などは認められず、また、杯と脚がきれいに分かれて出土するあり方から、人為的行為の介在を想定したい。

第36図はSD004から出土した甕102の接合関係である。大きく2つの破片(a・b)があり、aはSD004の南北方向の2条の溝から、bは東西方向の1条の溝から別々に出土しており、aとbは同一個体ではあるものの接合関係にはない。特徴的なのは、aを構成する2枚の大破片1741(取り上げナンバー)とそれに挟まれた小破片1699の2点が、SD004の東西両翼の溝から別々に出土・接合している事実である。この接合関係が示すのは、自然の営為による同一個体片の移動ではなく、人為的行為の積極的関与である。想像をたくましくすれば、SD004の西側溝においてaを2つに折り割った結果、破片として飛び散った2点の1699がその場で廃棄され、その後、手に残った2つの1741を東側溝まで持っていき廃棄したという行為が推察される。一方、bは、1091・1092が隣接して出土・接合しており、aとは異なるあり方を示している。

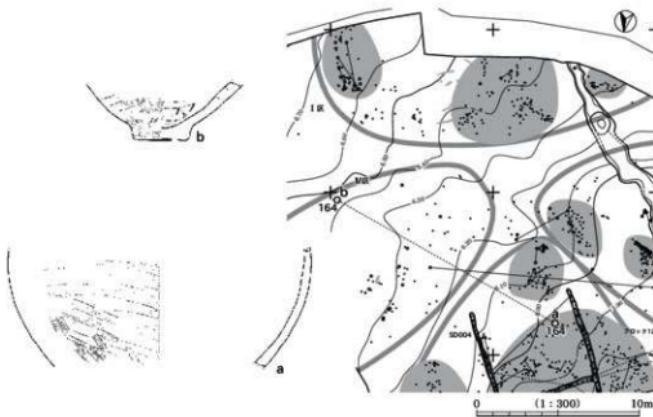
第37図は甕164の同一個体共有状況である。164は、極めて大型品であることに加えて、器壁の厚さや粗雑な作りなどから、他の古墳前期の土器と比べて特異な特徴を示しており、一見、同時代のものとは思われないほどである。胴部片aと底部片bの2つの破片が今回の調査で出土したが、明らかに同一個体と認定できるものの、それぞれに接合関係はない。特筆されるのは、底部bがIV区、胴部aがIII区ブロック12と、15mほどの距離を置いて出土していることである。bは、明らかにその場で割れた状態で出土



第35図 高杯50の接合関係



第36図 豊102の接合関係



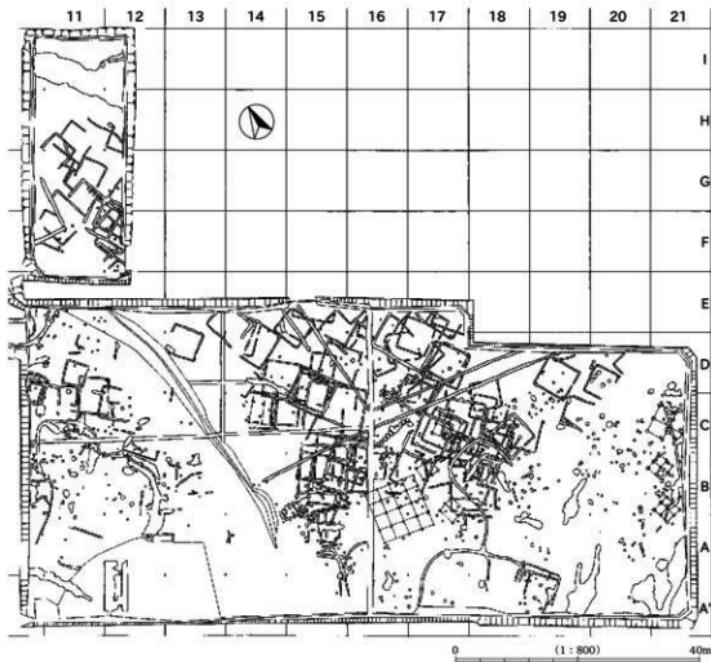
第37図 豊164の同一個体共有関係

しており（図版26-45）、胴下部から底部までほぼ完形に復元できた。またaは、その場でまとまって出土した数片を接合した結果、36×20cmの大型破片として復元することができた。大型品ゆえ、両者共に重量があり、流水などにより移動したとは到底考えられない。

以上、ここで示した接合および同一個体破片共有の3例は、いずれも人為的行為の結果を示す可能性が高い。遺跡が北西から南西に向かって傾斜する地点に立地することから、自然の営為により同一個体破片が移動したと考えるむきもある。しかし、土器の各部位が不規則に分布するのではなく、特定の部位が偏在して出土する方は、人為的行為が介在したものと考えたほうが適切と思われる。残念ながら、壺や高杯などの特定の器種がブロックから集中して出土するなど、祭祀を窺わせる出土状況を確認することができなかった。しかしながら、上記したように、故意に甕を配置したような出土状況を勘案すれば、ここで示した接合・同一個体共有関係は、当時の人々の習慣や作法にもとづく何らかの行為を反映した可能性が十分に考えられる。

3 方形区画溝

横マクリ遺跡からは、北側に開放するコ字形の方形区画溝が1基検出された。確認できる3本の溝は長



第38図 佐渡市畫場遺跡

さ6～6.5m、幅20～30cm、深さ7～12cmで、古墳前期に帰属する大量の土器を包含していた。溝は調査区外へ延びており、検出した溝が完結形ではないことが明らかである。調査では、溝内外で慎重に精査を行ったが、柱穴などの付属施設を検出することはできなかった。わずかに直径15cmほどの浅い窪み列が確認できたものの、溝の軸とは一致せず、遺構であるのか否かさえ明確ではない（図版2）。

古墳前期の遺跡では、竪穴住居・周溝を持つ平地式住居・掘立柱建物といった建物遺構の存在が知られているが、本遺跡から出土した方形区画溝は、規模や形態から推測して、それらに該当するとは思えない。最も類似する事例は、佐渡市塗場遺跡で検出された方形区画溝群である（第38図）〔鹿取ほか2007〕。国中平野縁辺の緩斜面上に立地する塗場遺跡では54基の方形区画溝が検出された。遺構の分布には粗密があり、調査区中央部では重複が激しいものの、その周辺では疎らであった。形態には、方形に溝がめぐるもの（I類）、溝の1部が欠けて開口部を持つもの（II類）、コの字状に溝がめぐるもの（III類）、L字状の溝が組み合わさり方形になるもの（IV類）の4種類が認められた。また、規模では、区画内の面積が20m²以下（小型）、20～40m²（中型）、50m²以上（大型）と大きく3種類があり、うち中型がほとんどを占めるという。報告書では、方形区画溝の各分類群が遺跡のなかでどのように分布するのか不詳であるが、遺構全体図によれば、重複が激しい遺構集中域ではI類・II類が多く、遺構が疎らな北側（11H～Fグリッド）と南側（19A'グリッド）ではIII類が目に付く。遺跡周辺の地形図から推測するに、遺跡は西側へ舌状に張り出す微高地に立地していると判断される。これが正しければ、微高地平坦部でI類・II類が多く、縁辺部にIII類が分布することになろうか。出土した土器の特徴から、これらの方形区画溝は古墳前期（5期）～中期に帰属するとされている。

横マクリ遺跡の方形区画溝は、コ字状の形態をなし、約33m²の広さを有することから塗場遺跡の中型III類に該当しよう。そして、調査区外に伸びる溝が確認されていることから、北側には重複する遺構が存在する可能性が高い。横マクリ遺跡は、南西側から北東側に向かってやや急激に傾斜する扇状地形上に立地し、試掘調査の結果などから、調査区の北側は湿地である可能性が想定されている。塗場遺跡のように、遺跡の縁辺部にコ字状方形区画溝（III類）が分布すると仮定すると、調査区南側の標高の高い地点に遺構集中域が形成されても良さそうだが、今回の調査では遺構は全く検出されなかった。糸魚川市周辺における方形区画溝の存在は現在のところ不詳である。今後、周辺地域を含めて同遺構の検出例を探索すると共に、遺跡内の立地条件も加味した検討を加えていく必要があろう。

4 玉作関連資料と内磨砥石

本遺跡から出土した古墳前期の石器は、玉作関連遺物が組成の大半を占めており、本遺跡で玉作が行われたことは疑いない。しかしながら、出土資料中には弥生時代の管玉製作のような、規格的な製作工程を示す資料を確認することができなかった。一方、本遺跡から多量に出土した滑石製剝片類の法量・形状には一定の規格性が認められ、弥生時代とは異なる製作技法の存在が推測される。よってここでは、未成品と滑石製剝片類の検討から見えてくる勾玉・管玉の製作技法について概観する。

また、内磨砥石は40点の出土が認められたが、同時期の周辺遺跡と比較して格段に出土点数が多い。バラエティーも多く、本遺跡を特徴づける石器と言える。本項では、周辺遺跡との比較を行いながら、打内磨砥石の特徴と機能について若干の考察を行う。

A 玉作について

本遺跡では、少量の玉製品及び未成品、多量の滑石製剥片類が出土し、玉製品の素材のほとんどが滑石である。本項では玉製品とその未成品、そして滑石製剥片類を用い、本遺跡における玉作工程について概観する。また白玉・垂玉については、未成品1点のみの出土で、製作工程について記述を行うことが困難であるため、ここでは勾玉・管玉についてのみ記述する。

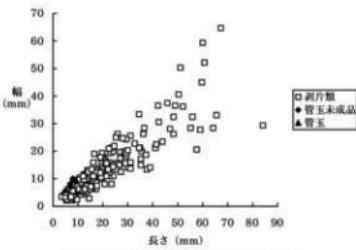
1) 管玉製作工程についての予察

製品1点、未成品6点の計7点が出土しており、管玉の素材になりうる滑石製剥片類も多数出土している。しかし、弥生時代の管玉製作工程にそのまま該当するような資料はほとんど確認することができず、古墳時代前期に該当する本遺跡では、弥生時代とは異なる工程で管玉が製作されていたと推測される。以下、弥生時代の製作工程（「原石打削→施溝→半裁→側面剥離→研磨→穿孔→完成」〔計良・椎名1961〕）との比較をとおして、本遺跡における管玉製作の特徴を見てみよう。

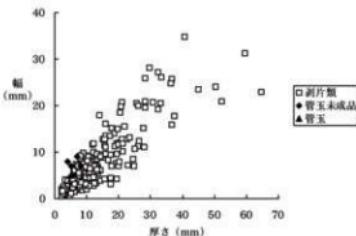
まず、原石を荒削りした際に生じた大型・部厚な剥片類が存在することから、本遺跡でも「原石打削」が普遍的に行われていたことが分かる。その後、原石を荒削していく過程で生じた剥片類から素材となる剥片が選択された（「素材選択段階」）と推測される。製品・未成品と剥片類の長幅比（第39図）、厚幅比（第40図）を比較してみると、長幅比では長さ40mm×幅30mm前後、厚幅比では厚さ30mm×幅20mm前後に法量分布の集中域が認められる。製品・未成品の法量が、長幅・厚幅比のどちらにおいても集中域の中にすっぽりと収まることから、法量集中域の剥片が管玉の素材として選択された可能性が高い。滑石は非常に軟質な石材であるため、管玉のような小型のものに対して、剥離による細部調整を行うことは困難である。したがって、主たる整形方法が研磨工程にあったと容易に想像され、実際、剥離を伴う未成品は本遺跡から出土していない。集中域よりも大きな法量を示す少量の剥片類の存在は、荒削りによって目指す法量に近づけていく工程を如実に示すものであろう。これらの事を勘案すれば、本遺跡における管玉製作は、素材剥片の形状を大幅に変更しないまま研磨に移行していたと考えられる。

続いて「施溝→半裁→側面剥離」について見てみよう。「施溝→半裁」は掠切によって素材を分割する工程であるが、これは緑色凝灰岩・鉄石英のような硬質の石材には適しているものの、滑石のような軟質石材には適当と思われない。本遺跡では、掠切痕を有する資料はヒスイ製剥片類に1点確認されたのみで、滑石製剥片類からは全く確認できなかった。また側面剥離は素材を角柱状に整形するための工程であるが、滑石では剥離による細部調整が困難と推定され、本遺跡出土資料中にも確認できないため、この工程は存在しなかったと考えられる。

「研磨→穿孔」では、穿孔段階で欠損した未成品4点の観察から、次の2種類が確認できる。



第39図 管玉・剥片類 長幅比分布



第40図 管玉・剥片類 厚幅比分布

A種（図版13—190・191）：2つの研磨面で形成された稜の内角が180度により近い値を示すもの。

表面のほぼ全面に研磨が施されていることから、より製品に近い形状であると言える。

B種（図版13—192・193）：稜の内角が鋭角もしくは90度に近い角度をなすもので、研磨が側面の一部のみに留まるため、剥離面が残される。

A種は、表面に残った稜を研磨によって除去する直前に穿孔を行った資料と判断され、最終仕上げ直前の工程品と言えよう。一方B種は、1部分のみの研磨で、石器表面にまだ剥離面を残したままであることから、A種よりも前段階の工程品と位置づけがちである。しかし、すでに穿孔が行われていることに注目すると、B種→A種という単純な製作順序を想定することができない。いずれも穿孔時に破損していることから、4点と例数は少ないながらも、穿孔段階には大きく2つの形態があった可能性がある。この2者が、製作者の意図するところではない偶発的に形成されたバラエティーであるのか、あるいは製作者のクセや製作技法の違いを反映しているか、資料的制約からここで判断することはできない。

県内における他遺跡の資料と比較してみると、新穂技法に代表される弥生時代の管玉製作や、本遺跡以外の古墳時代遺跡に認められる玉作関連資料の中でA種が一般的に認められるものの、B種は検索するることはできなかった。資料実見を伴う悉皆調査を経ていないため不確定要素を含むが、B種は当該期において一般的な工程品ではない可能性がある。本遺跡の管玉製作を特徴づける資料と言えるかも知れない。

以上の検討から、「原石打削→素材剥片選択→研磨→穿孔→仕上げ→完成」という工程が復元され、これは、滑石を多用する素材選択に大きく起因すると考えられる。しかし、資料的制約から、A種・B種の違いの成因については明らかにできなかつた。今後は資料の増加を待ち、この工程案を修正・追認していく必要がある。

2) 勾玉について

第41図 勾玉・剥片類 厚幅比分布

本遺跡からは製品1点、未成品2点が出土しており、それら全て滑石製である。勾玉についても先述した管玉のように、「原石打削→素材剥片選択→研磨→穿孔→仕上げ」といった工程が推測されるが、未成品2点について見ると、研磨作業後に剥離による二次加工が施されている。これも整形作業の一つとしてここでは理解し、よってここでは、勾玉製作工程について、「原石打削→素材剥片選択→研磨・剥離→穿孔→仕上げ」という一連の工程を提示する。

B 内磨砥石について

先述のとおり、本遺跡では40点の内磨砥石が出土している。その中には内磨砥石の素材となるものも含まれているが、この点数は周辺遺跡と比較しても非常に多量と言える。また、内磨砥石は、從来勾玉内側の屈曲部を研磨したものと言われているが、本遺跡出土のものは形態や砥面形成部位、砥面の状態から見ても、バラエティーが多く、機能・用途が全て同一であったとは考えにくい。ここでは、事実記載の項目での分類基準に基づき、内磨砥石の機能に関して若干の考察を行ってみよう。

1) 「浜山型内磨砥石」の特徴

「浜山型内磨砥石」は、富山県朝日町浜山遺跡報文において命名された〔寺村ほか1969〕。それによると、「上縁（=砥面、筆者加筆）が凸状にかつ特徴のある微波状縁を呈し、摩滅している」との説明がなされている。新潟県内では、糸魚川市田伏遺跡〔閔1972〕、笛吹田遺跡〔安藤ほか1978〕、大角地遺跡〔寺村ほか1979〕等の古墳時代遺跡においてその出土が認められ、県内では糸魚川市域に分布が集中している。田伏遺跡報文では、「砂岩または安山岩を打削った大形の剥片を利用し、側面はかならず一方に自然面をも」ち、砥面は「打撃を加えた衝撃点の反対側に形成され、磨面は微波状を呈している」とされ、「浜山型内磨砥石」の素材や用い方についても言及されている。

以上4遺跡出土の「浜山型内磨砥石」を見ると、以下の特徴を挙げることができる。

- ①砂岩や安山岩製の剥片を素材としている（大角地遺跡においては、蛇紋岩製のものが1点存在する）。
- ②砥面形成部位は、側面部にのみ砥面が形成されているもの、側面部と石器表面に砥面が形成されているものの2者がある（報告書掲載資料）。
- ③平砥石や筋砥石として使用した痕跡を残すものも少量ながら存在する。

2) 横マクリ遺跡出土の内磨砥石

本遺跡から出土した内磨砥石には、これまで指摘されてきた以外にもいくつかの特徴を見出すことができる。本遺跡では、形態・二次加工有無・砥面形成部位などから次のように分類することができる。

- I類：内磨砥石の素材となりうるもので、ほぼ無加工のものをここに一括した。砂岩製の貝殻状剥片で、二次加工と断定できないような細かな剥離痕が観察できる資料についても、本分類に含めた。
 - II類：素材に二次加工のみ施されており、砥面を形成しないもの。この二次加工は、縁部や打点付近に施されていることから、縁部の調整や打点の除去等が目的であったと考えられる。
 - III類：素材に砥面が観察できるもの。砥面と二次加工の双方が観察できる資料についても、本分類に含めている。なお、砥面の形成部位によって以下のように細分した。
 - III-1類：素材の縁部とその付近に砥面が形成されているもの。狹義の内磨砥石、もしくはそれに極めて近い特徴をもつものである。
 - III-2類：素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面と、縁部に砥面が形成されているもの。
 - III-3類：素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面に砥面が形成されているもの。縁部に砥面は観察できない。
 - III-4類：素材のほぼ全面に砥面が形成されているもの。両側縁はほぼ平行し、形状は薄い板状を呈している資料がほとんどで、形状には一定の齊一性が認められる。この点から、本類が定期的な砥石として製作された可能性が考えられる。
 - IV類：風化等で砥面・二次加工が観察が困難であるため、分類不可のものを一括した。なお、風化しているが砥面・二次加工が観察可能なものについては、それぞれの分類に含めている。
- 以上を概観すると、I類は内磨砥石の素材剥片、II類は素材に二次加工が施されているものであることから、I・II類は内磨砥石の素材もしくは未成品と認定することができよう。よって以下では、III類についてのみを対象として、本遺跡における内磨砥石の特徴について見ていく。

3) 内磨砥石III類について

III類とした内磨砥石は總点数24点で、砥面形成部位や砥面形成のあり方が多様であるため、以下の細分が可能である。

III-1類 5点出土している。素材の縁辺部とその付近に砥面が形成されている。縁辺部に見られる砥面は全ての資料において打点部とは反対側に形成され、その砥面は微波状を呈している。この点においては、本分類が、浜山遺跡出土資料中に見られるような「浜山型内磨砥石」の範疇に含まれると考えられる。

III-2類 5点出土している。素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面と、縁辺部に砥面が形成されているもの。縁辺部の砥面はIII-1類同様、打点部とは反対側の位置に形成されていることから、III-1類と同様の機能が窺える。また石器の表裏面に観察される砥面は、石器の高まった部分にのみ観察される事から、石器表面を平坦にする目的と砥石としての機能があったと推察される。

III-3類 6点出土している。素材の表裏面のいずれか、もしくは表裏両面に砥面が形成されているもので、縁辺部に砥面は観察できない。石器の表面にのみ砥面が観察される資料は、大型の筋砥石の砥面更新の際に生じた剥片であると考えられるが、裏面にも砥面が形成されるものについては、剥離後に更に砥石として使用したものである。

III-4類 8点出土しており、接合して5点となる。素材のほぼ全面に砥面が形成されているもので、両側縁はほぼ平行し、形状は薄い板状を呈している。また、形状には一定の齊一性が認められる。よって本分類は、定型的な砥石として製作されていた可能性が考えられる。また、小型の凝灰岩製筋砥石（図版13-201）との形態的類似性が注目される。

以上が、本遺跡出土の内磨砥石の特徴である。III-1・III-2類については、他遺跡で内磨砥石とされるものと共通する点が多い。一方、III-3類については、筋砥石の砥面更新を行って廃棄された剥片と考えられるが、類例が検索できない。単なる剥片と認識され、掲載されていない可能性がある。さらに、III-4類も周辺遺跡での出土例が無いため、糸魚川市周辺地域に普遍的に分布するものか否か判断することができない。しかしながら、逆にこのような砥石が周辺遺跡に見られないことが、本遺跡を特徴づける要素の一つになり得るかも知れない。小型凝灰岩製筋砥石（201）と酷似する点や、携帯性に適した法量などから、III-4類を流通を前提とした製品と考えるのは想像を逞しくしすぎだろうか。もちろん、上記の論を展開するためには資料的制約がありにも多く、想像の域を出ない。しかし本遺跡から、内磨砥石の中心的分布域のなかでも、特に多くの内磨砥石とその未成品が出土したことを勘案すると、砥石製作の可能性は指摘しておかねばなるまい。今後の資料の増加に期待したい。

要 約

- 1 横マクリ遺跡は、新潟県糸魚川市大字田伏字横マクリに所在する。西頸城山地から日本海へと伸びる丘陵の末端付近、尾根と谷とが樹枝状に入り組む谷の中に立地する。標高5.7～6.9m、海岸から400m内陸に位置する。
- 2 調査は国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴い、平成18年度に実施した。調査面積は1,340m²である。
- 3 遺跡は現地表下約1.5mに存在し、土層観察の結果から、度重なる土石流等によって埋没したことが判明した。遺跡が所在する谷は、現在も土石流警戒地区に指定されている。
- 4 弥生時代後期後半・古墳時代前期後半・古墳時代後期後半・平安時代・中世の遺物が出土したが、主體を占めるのは古墳時代前期後半の遺物である。少量出土した弥生時代後期・古墳時代後期の遺物は、上流約80mに位置する田伏山崎遺跡に由来する可能性が高い。
- 5 古墳時代の遺構は方形区画溝1基のみであり、遺跡の性格には不詳な点が多い。一方、大量の土器や石器が集積した「遺物集中ブロック」が14か所検出され、本遺跡を特徴づけるものとして詳細な観察結果を報告した。
- 6 古墳時代前期の土器には各器種が認められ、復元率も高いことから、今後、当該地域における基準資料になると期待される。
- 7 古墳時代前期の石器は、玉未成品・石核・剥片・砥石・玉原石といった玉作関連資料が大半を占め、本遺跡で玉作が行われたことが明らかである。特に、「内磨砥石」と呼ばれる横長剥片を素材とした砥石が40点出土しており、報告された遺跡としては県内で最も多い出土量となる。様々な形態が認められたことから、勾玉屈曲部の研磨だけに限定されない多様な機能の存在が想定された。
- 8 遺物の出土位置を全点記録した結果、人為的行為を推定させる土器の接合状況を確認することができた。本遺跡の性格を考えるうえで重要な所見となろう。
- 9 複数の遺物集中ブロックから、直立あるいは倒立した状態で甕が出土した。底部を欠くことから、その解釈にあたっては慎重さが必要であるが、意図的に甕を配置するような行為が行われた可能性がある。
- 10 平安時代の遺構は皆無で、若干の土器と木製品が出土したに過ぎない。しかし、農具のエブリが出土し、また、イネのプランツバールが多量に検出されていることなどから、本遺跡の近隣に水田が広がっていた可能性が高い。また、本遺跡から出土した「六」(「久」カ)の墨書き土器が、800m離れた山崎A・B遺跡から複数出土しており、両遺跡の間には何らかの交流があったと推測される。

引用文献

- 相羽重徳 2002 「第IV章遺構 2D自然流路」『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一・千家和比古ほか 1978 『笛吹田遺跡』 索魚川市教育委員会
- 尾崎高宏・相羽重徳ほか 2001 『正尺A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編、高志書院
- 春日真実ほか 2002 『奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・杉田和宏・近藤慎子・相羽重徳・松永篤知 2006 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鹿取 渉・佐治栄次 2007 『畫場遺跡』 佐渡市教育委員会
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山經塚出土の陶製筒と珠焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 川村浩司 1988 「新潟県龍峰遺跡の外来系土師器3例」『新潟考古学談話会報』第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1993 「北陸東部の古墳出現前後の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相一関川右岸下流域を中心に」『上越市史研究』5 上越市史専門委員会
- 木島 勉 1989 「立ノ内遺跡・山崎三十三塚」索魚川市埋蔵文化財調査報告書16 索魚川市教育委員会
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡一帯に営まれた平安・鎌倉時代の集落一」『第14回遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 計良由松・椎名仙草 1961 「後期弥生式文化的な攻玉法」『考古学雑誌』第47卷1号 日本考古学会
- 上越市史編さん委員会 2003 『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 鈴木郁夫 1982 「I地形分類図1地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 索魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「I概説1地形概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木俊成ほか 1988 「小出遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・春日真実 1994 「一之口遺跡東地区」新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 閑 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』 索魚川市教育委員会
- 高橋 保 1988 「立ノ内遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005a 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字彙について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2005b 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心にして」『シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』(第1分冊) 新潟県考古学会
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄・小池義人ほか 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」 青海町教育委員会
- 寺崎裕助ほか 1988 「北陸自動車道 索魚川地区発掘調査報告書IV 原山遺跡・大塚遺跡」新潟県教育委員会
- 寺沢 薫ほか 1980 「奈良市六条山遺跡」奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考古学研究所
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴ほか 1969 「勾玉の故郷 はまやま」富山県教育委員会・朝日町教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一ほか 1979 『大角地遺跡-飾玉とヒスイの工房址-』青海町教育委員会

- 土橋山理子 2004 『小野沢西遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 平野聰三・渡辺秀雄 1968 「西鶴城郡」『日本歴史地名大系15 新潟県の地名』平凡社
- 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡』巻町教育委員会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水徳寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 糸魚川市教育委員会
- 山崎忠良ほか 2004 『下割遺跡II』新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊裕之 2007 「山岸遺跡—平安時代末～鎌倉時代の祭祀・信仰の場—」『第14回遺跡発掘調査報告会』財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

土器觀察表

番号	地区	出上位置	法量 (mm)				製作経緯	消費痕跡	備考
			底面	側面	縦横	横長			
1	I	40M1 - 6 - 24	プロック7	V1	※	118.0			
2	I	40M1 - 6	プロック7	V1	※	148.0			
3	I	40M6	プロック7	V1	※	180.0			
4	I	40M6	プロック7	V1	※	180.0			
5	I	40M6	プロック7	V1	※	148.0	147.0	内：黒斑	外：光沢あるヌス
6	I	40M1 - 6	プロック7	V1	※	188.0	270.0		外：全面にヌス
7	I	41M6	プロック8	V1	※	218.0			外：ヌス
8	I	41M6	プロック8	V1	※	157.0	209.0	194.0	内：黒斑 外：全面にヌス
9	I	41M6	プロック8	V1	※	167.0		205.0	内：側面；黒斑 外：無漆下全面にヌス
10	I	41M11	プロック8	V1	※	167.0		27.0	内：黑色化
11	I	40M10	プロック8	V1	※	83.0			内：黑色化
12	I	41M6	プロック8	V1	※	60.0			
13	I	41M16	プロック8	V1	※				
14	I	40M9	プロック8	V1	※				
15	I	40M9	プロック8	V1	※				
16	I	41M11	プロック8	V1	※	162.0	221.0		
17	I	41M11	プロック8	V1	※	167.0		165.0	外：ヌス
18	I	61M9 - 10	プロック17	V1	※	90.0	104.0	130.0	
19	I	40M16	V1	※					
20	I	39M12 - 24	V1	※	126.0				
21	I	39M12	V1	※	66.0				
22	I	39M8	V1	※	112.0	61.0	27.0		
23	I	40M11 - 12	V1	※	(162)				
24	I	39M15 - 18	V1	※	114.0	229.0	48.0	215.0	内：黒斑
25	I	39M7	V1	※					外：帶状の黒斑
26	I	40M13	V1	※	(254)				
27	I	42M21	プロック5	V1	※	(32)		147.0	内：コダ、外：ヌス
28	I	42N4	プロック3	V1	※				
29	I	42M21	プロック3	V1	※				
30	I	42M21	プロック3	V1	※		20.0		外：赤印
31	I	42M23 - 24	プロック7	V1	※	87.0	76.0	19.0	外：黒斑
32	I	42M24	プロック7	V1	※	141.5			外：ヌス
33	I	40M3 - 42M7 - 42N9	プロック7	V1	※	196.0			
34	I	42N9	プロック7	V1	※	120.0	(170)	16.0	132.0
35	I	42N4 - 9	プロック7	V1	※	178.0			200.4
36	I	42N9	プロック7	V1	※	122.0	(121)		114.0
37	I	41N3 - 6	プロック6	V1	※	87.0	92.0	121.0	
38	I	41N2 - 3	プロック6	V1	※	92.0			
39	I	41N2	プロック6	V1	※	80.0			
40	I	41N8	プロック6	V1	※	159.0			外：ヌス
41	I	41N10	プロック2	V1	※	91.0			外：白線面に黒斑
42	I	41N10	プロック2	V1	※	190.0			外：ヌス
43	I	41N10	プロック2	V1	※	172.0			外：ヌス
44	I	41N10 - 15 - 42N24	プロック2	V1	※	123.0			外：ヌス
45	I	41N10	プロック2	V1	※	176.0			外：ヌス
46	I	41N6 - 10 - 15 - 19	プロック2	V1	※	177.0		178.0	外：ヌス (脚部のみ火炎)
47	I	41N10	プロック2	V1	※	7.0	191.0		外：ヌス
48	I	42N12	プロック1	V1	※	129.0			外：ヌス 内：黒斑化
49	I	42N11 - 12 - 17	プロック1	V1	※		109.0		
50	I	40H1 - II - 14 - I7 - II - 23	プロック1	V1	※	146.0	114.0	94.0	
51	I	42N16	プロック1	V1	※		132.0		
52	I	42N17	プロック1	V1	※	160.0			外：ヌス
53	I	42N11 - 12 - 17	プロック1	V1	※	160.0			外：ヌス
54	I	42N11 - 17	プロック1	V1	※				
55	I	42N11	プロック1	V1	※		22.0	160.0	外：一部にヌス
56	I	42N17	プロック1	V1	※	57.0			内：黒斑化
57	I	42N17	プロック1	V1	※	8.0			外：ヌス
58	I	42N23	プロック10	V1	※	135.0	98.5	97.0	黒斑面に黒斑
59	I	42N19	プロック10	V1	※				内：赤印
60	I	42N24	プロック10	V1	※				
61	I	42N19	プロック10	V1	※				
62	I	42N19	プロック10	V1	※	115.0			
63	I	42N3	プロック10	V1	※	154.0	126.0	27.0	
64	I	42N3	プロック10	V1	※	96.0			外：黒斑?
65	I	42N18 - 19	プロック10	V1	※	167.0			外：口・腹上半にヌス
66	I	42N16	プロック10	V1	※	134.0			
67	I	42N24	プロック10	V1	※				
68	I	42N3	プロック10	V1	※	145.0			
69	I	40H1 - III - II - 13 - II - 23	プロック10 + 1	V1	※	388.0			
70	I	42N24	プロック10	V1	※	122.0	118.0		外：ヌス
71	I	42N24	プロック10	V1	※	71.0		209.0	外：一部にヌス
72	I	42N23	プロック10	V1	※	150.0			内：黒斑?
73	I	42N23	プロック10	V1	※	154.0	211.0		外：全面ヌス
74	I	42N19	プロック10	V1	※	178.0	225.0		外：口・腹上半に黒斑 外：脚部にヌス
75	I	42N24	プロック10	V1	※				外：ヌス 内：コダ
76	I	42N19	プロック10	V1	※	28.0			外：帶状にヌス
77	I	42N16 - 20	V1	※	113.0	98.5	135.0		
78	I	42N7	V1	※	174.0				
79	I	42N20 - 24	V1	※	160.0		157.0		
80	I	41N5 - 42N6	V1	※	132.0	(300)	65.0		
81	I	41N3 - 14	V1	※	220.0	293.0	67.0	250.0	外：白線、腹上半にヌス サジ出士
82	I	41N6	S1004	1	高輪	179.0			
83	I	40N20	S1004	1	高輪	114.0			
84	I	41N23	S1004	1	高輪				
85	I	41N6 - 7	S1004	1	高輪				
86	I	40H1 - III - II - 13 - II - 23	S1004	1	高輪	94.0	84.0	132.0	

透かし：ヌタイプ

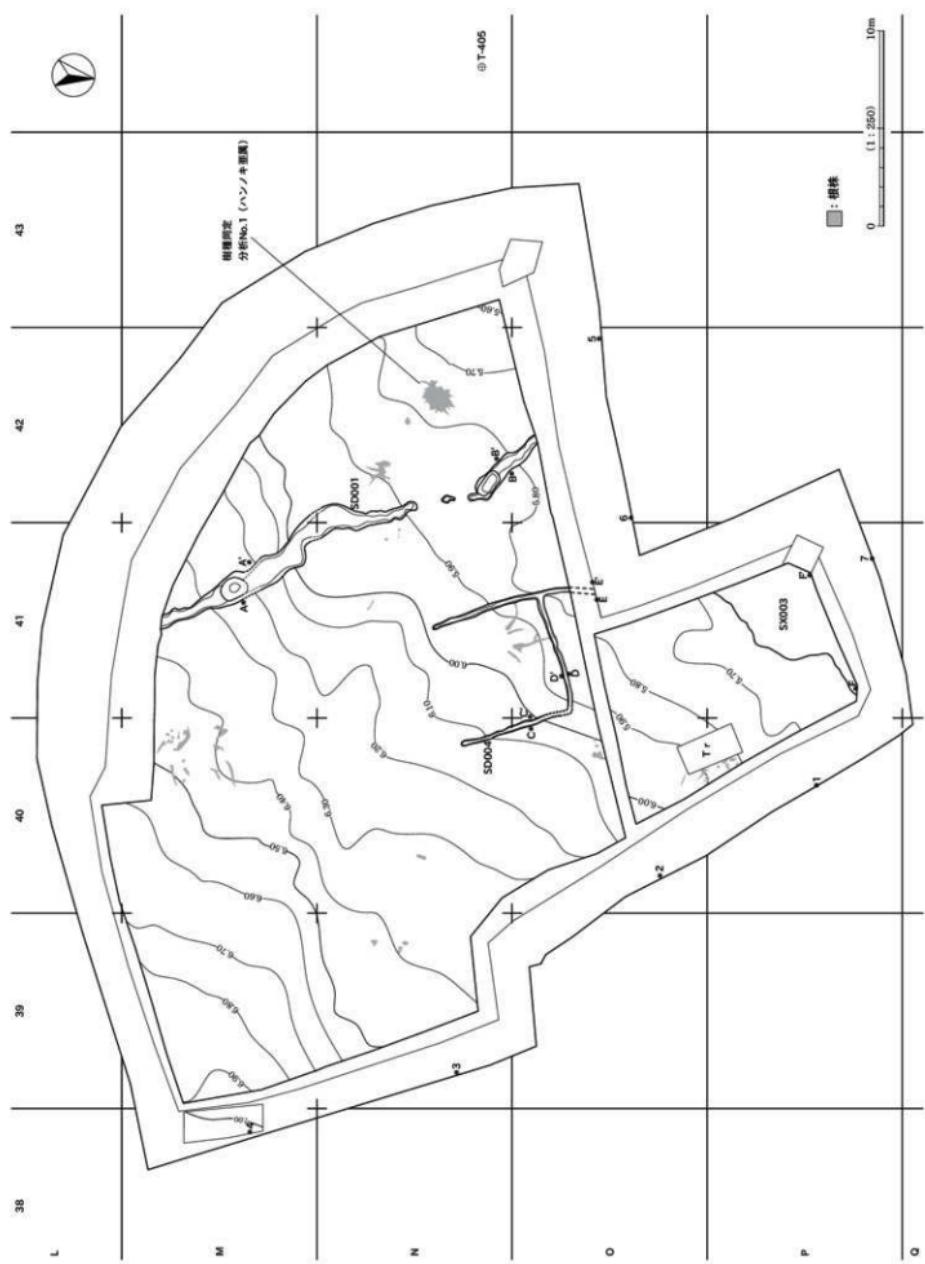
観察表

番号	測定	地質	測定位置	標高	法量 (mm)			製作状況	消費経時	備考
					通積	横積	底積			
87	III	41N18	SD004	I	側面	93.5				
88	III	41O4	SD004	I	側面	76.0				
89	III	41O3	SD004	I	側面					
90	III	40N25 4005	SD004	I	側面	171.0			内：小さな黒斑2ヶ所	
91	III	41O7	SD004	I	側面	176.0				
92	III	41N23	SD004	I	側面	186.0				
93	III	41O4	SD004	I	側面	174.0				
94	III	41O2	SD004	I	側面	133.0	(210.0)	17.0		
95	III	41O7 - 12 - 17	SD004	I	側面	188.0	66.0	126.5	外：白縁の一部に黒斑 外：スス	幼生後期
96	III	40N25 41O6	SD004	I	側面	169.0		171.0	外：側～終にスス	
97	III	41N23	SD004	I	側面	158.0				
98	III	41O9	SD004	I	側面	160.0				
99	III	41O9	SD004	I	側面	189.0			外：白の一部にスス	
100	III	41N23	SD004	I	側面	210.0				
101	III	41O6	SD004	I	側面	206.0			外：口～鰓の一部にスス	
102	III	42N18 4005 41O1 - 9	SD004	I	側面	204.0			外：口の一部にスス	
103	III	42N18 - 19 41O4 - 9	SD004	I	側面	181.0				
104	III	41N23	SD004	I	側面		30.0		外：スス 外：スス 内：コゲ	
105	III	40N25 41O1 - 5	SD004	I	側面	10.0				
106	III	41O6	SD004	I	側面	55.0				
107	III	41O7	SD004	I	側面	72.0				
108	III	41O10 - 20 - 21 - 22 - 23	VI	高林						
109	III	42N12 - 17	プロック18	VI	側面	160.0				
110	III	41N2	プロック18	VI	側面		68.0		外：スス	
111	III	41N7	プロック18	VI	側面	179.0				幼生後期 発成良好
112	III	41N7	プロック18	VI	側面	178.0		195.0	外：スス 内：コゲ	
113	III	41O16	プロック12	VI	高林					
114	III	40O6	プロック12	VI	高林		98.0			
115	III	41O10 42O6	プロック12	VI	高林	150.0				
116	III	41O8 - 11	プロック12	VI	高林					
117	III	40O10 41O13	プロック12	VI	側面	169.0			透かし：ヒタイプ	
118	III	41O9	プロック12	VI	側面				透かし：ヒタイプ	
119	III	41O10	プロック12	VI	側面				外：スス ハーネル付着物	
120	III	41O4 - 9 - 13 - 17 - 18	プロック12	VI	側面	166.0			外：側部に黒斑1ヶ所	
121	III	41O2 - 22 - 24	プロック12	VI	側面	230.0		194.0	外：側部中央に導管のスス	
122	III	41O16	プロック12	VI	側面	174.0			外：スス	
123	III	41O1	プロック12	VI	側面	164.0		196.0	外：全表面スス 内：褐色化	
124	III	41O6	プロック12	VI	側面	183.0		197.0	外：一部にスス	
125	III	41O4 - 9	プロック12	VI	側面	183.0				
126	III	41O1 - 3 - 4 - 5 - 9	プロック12	VI	側面	151.0				幼生後期
127	III	41O10	プロック12	VI	側面	159.0			外：スス	
128	III	41O9	プロック12	VI	側面	162.0			外：一部にスス	
129	III	41O8	プロック12	VI	側面		61.0		外：スス	
130	III	41O2 - 3	プロック12	VI	側面		27.0		内：褐色化	
131	III	41O18	プロック18	VI	高林		100.0			
132	III	40O13	プロック18	VI	側面				透かし：ヒタイプ	
133	III	41O11 - 13 - 17	プロック18	VI	跡	108.0			古墳層用	
134	III	41O13	プロック18	VI	跡	125.0	53.0		古墳層用	
135	III	41O17	プロック18	VI	側面	166.0	267.0	54.0	外：スス	
136	III	41O1 - 18 - 23 - 21 41P	プロック18	VI	側面	21.0			内：スス	
137	III	41O11	プロック18	VI	側面	200.0				
138	III	41O13 - 18	プロック18	VI	側面	189.0			外：口～鰓の一部に黒斑	幼生後期 幼生前
139	III	41O11 - 17	プロック18	VI	側面	164.0				
140	III	41P7	プロック18	VI	側面	160.0	164.0	168.0	外：スス	
141	III	41O17	プロック18	VI	側面	(134)		174.0	外：スス	
142	III	41O12	プロック18	VI	側面		20.0			
143	III	41O21 - 23 - 24	プロック18	VI	側面		222.0		外：スス 内：褐色化	
144	III	40O25	プロック11	VI	側面		17.0			
145	III	40O10	プロック11	VI	跡		29.0			
146	III	40O9	プロック11	VI	側面	130.0				
147	III	40O14	プロック11	VI	側面		78.0		外：スス	
148	III	40O14	プロック11	VI	側面		46.0		外：スス 内：褐色化	
149	III	40O1 - 3 - 10 - 14 - 15	プロック11	VI	側面	283.0			外：側～脚部に黒斑	幼生後期 幼生前
150	III	41O21	プロック14	VI	側面	162.0			外：スス	
151	IV	39N15	プロック14	VI	側面	88.0			透かし：ヒタイプ	
152	IV	39N15	プロック14	VI	側面	91.5				
153	IV	39N16	プロック14	VI	側面	135.0			外：スス	
154	IV	39N15	プロック14	VI	側面	160.0		156.0	外：スス	幼生後期
155	IV	40N13	VI	高林		171.0				
156	IV	40N8	VI	高林		102.0				
157	IV	40N13	VI	高林						
158	IV	40N2	VI	高林		90.0				
159	IV	40N2	VI	側面		206.0				
160	IV	40N4 - 5	VI	側面	98.0	89.5	122.0			
161	IV	40N12	VI	側面	88.0			透かし：ヒタイプ		
162	IV	40N12	VI	側面		120.0				
163	IV	40N1	VI	側面	185.0			透かし：ヒタイプ		
164	IV	40N1 41N22	VI	側面		76.0				
165	IV	40M9	VI	跡	94.0	81.0	22.0			
166	IV	40M23	VI	跡		29.0	63.0	外：側下部に黒斑	幼生後期	
167	IV	40N17	VI	側面	139.0					
168	IV	42N22	SD001	VI	高林	198.0				
169	IV	42N22	SD001	VI	側面	148.0			外：スス	
170	IV	42N22	SD001	VI	側面	172.0			外：スス	
176	IV	40N25	SD004	I	側面	124.0			幼生後期	
277	III	41P1	プロック18	VI	側面				幼生後期	

石器觀察表

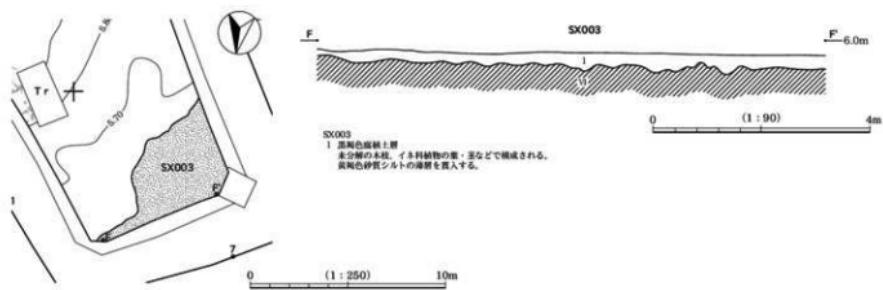
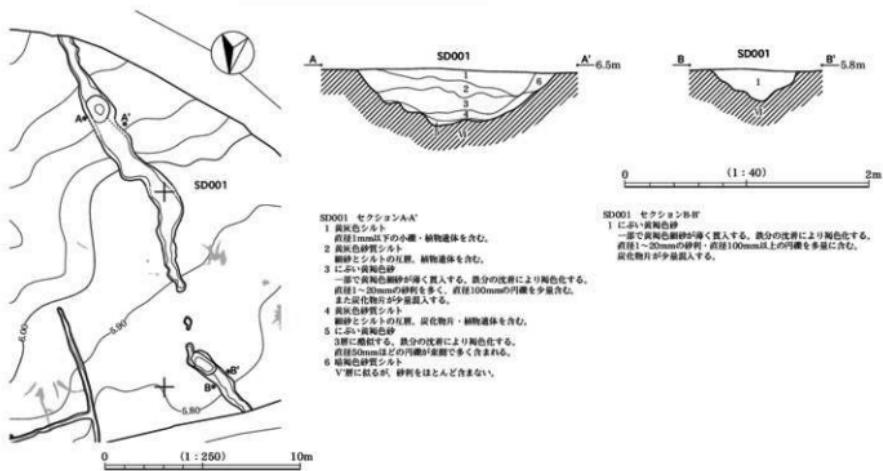
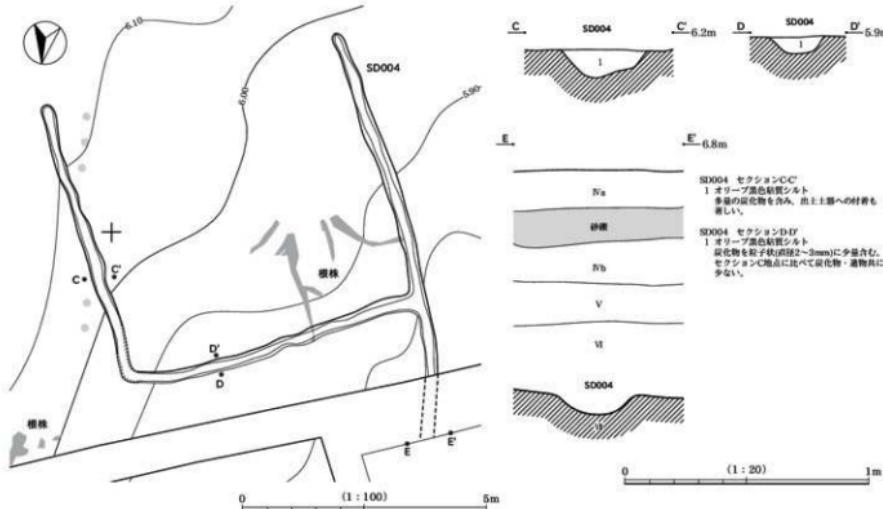
編番	地點	グリッド	遺構	絆石	遺物	分類	石材	法量				備考	
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
195	I	40M18	VII	骨玉	褐色細粒岩	1.2	0.9	0.6	0.6	0.6	0.6		
196	I	41M6	ブロック6	VII	骨玉未完成品	褐色	0.8	0.8	0.4	0.4	0.4		
191	I	41M6	ブロック6	VII	骨玉未完成品	褐色	1	0.8	0.4	0.3	0.3		
192	I	41M7	ブロック6	VII	骨玉未完成品	褐色	0.9	0.9	0.7	0.6	0.6		
193	I	41M14	VII	骨玉未完成品	褐色	0.7	0.7	0.5	0.4	0.4			
194	I	39M23	VII	骨玉未完成品	褐色	0.9	0.8	0.4	0.3	0.3			
195	I	41M17	VII	骨玉未完成品	褐色	1	0.9	0.8	0.9	0.9	0.9		
196	I	39M23	VII	洞内	褐色	1.5	1	0.6	1	1	1		
197	I	39M18	VII	原石	ヒスイ	5.3	5.8	2.6	107.5				
198	I	39M24	VII	洞内	ヒスイ	1.9	2.4	1.2	5.1	5.1	5.1		
199	I	40M8	ブロック7	VII	骨石	30.2	23.8	10.6	805.0				
200	I	39M9	VII	骨石	原石	5.9	4.9	2.3	94.8				
201	I	39M7	VII	骨石	原石	10.2	3.4	1.4	54	54	54		
202	I	39M21	VII	骨石	原石	20.9	9.8	4.6	1400.6				
203	I	40M15	ブロック8	VII	骨石	員石	7.4	8.1	4.8	313.7	褐色付石器		
204	I	39M21	VII	骨石	原石	18.2	9.2	4.9	122.6				
205	I	39M10	VII	内飾砥石	研磨	8.6	11.5	2.5	292.5				
206	I	40M25	VII	内飾砥石	研磨	11.1	16.5	3	545.4				
207	I	40M19	VII	内飾砥石	研磨	8.7	15.0	3.2	290.8				
208	I	41M12	ブロック8	VII	内飾砥石	研磨	8	12.6	1.8	42.5			
209	I	40M24	VII	内飾砥石	研磨	5.9	10.5	2.1	126.5				
210	I	40M11	VII	内飾砥石	研磨	4	9	1.8	77.7	77.7	77.7		
211	I	39M2	VII	内飾砥石	研磨	4.3	7.3	1.2	36.7	36.7	36.7		
212	I	41M15	VII	内飾砥石	研磨	6.3	16.1	2	234.7	234.7	234.7		
213	I	40M11	VII	内飾砥石	研磨	3.9	10.5	1.4	64.2	64.2	64.2		
214	I	39M11	VII	石鍬	安山岩	11.5	8.5	7.5	993.4	993.4	993.4		
215	B	42M22	ブロック5	VII	骨玉未完成品	褐色	3.1	2.4	1.2	10.3	10.3	10.3	
216	B	41M22	VII	骨玉未完成品	褐色	2.2	2.7	1.2	5.9	5.9	5.9		
217	B	41M24	ブロック19	VII	骨石	褐色	0.8	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7	
218	B	42M22	ブロック5	VII	骨石	褐色細粒岩	0.8	0.7	0.3	0.3	0.3	0.3	
219	B	42M22	ブロック5	VII	石核	褐色細粒岩	3.9	6.9	3.4	89	89	89	
220	B	42M16	ブロック1	VII	骨石	褐色細粒岩	3.9	2.6	0.8	5.4	5.4	5.4	
221	B	41M24	ブロック12	VII	洞内	褐色細粒岩	2.8	1.9	1	3.1	3.1	3.1	
222	B	42M19	ブロック10	VII	洞内	褐色	4.1	4.2	2.6	47.8	47.8	47.8	
223	B	42M19	ブロック10	VII	洞内	褐色	4.8	3.7	1.8	28.7	28.7	28.7	
224	B	42M24	ブロック10	VII	洞内	褐色	6.8	3.4	2.1	41.2	41.2	41.2	
225	B	42M24	ブロック3	VII	洞内	褐色	4.1	1.7	1.1	10.7	10.7	10.7	
226	B	41M24	VII	洞内	褐色	2.7	2.8	1.1	9.5	9.5	9.5		
227	B	41M24	VII	洞内	褐色	1.5	0.9	0.8	2.3	2.3	2.3		
228	B	42M19	ブロック10	VII	洞内	褐色	1.8	1.7	0.8	1.4	1.4	1.4	
229	B	42M19	ブロック10	VII	洞内	褐色	5.7	3.6	0.6	25.6	25.6	25.6	
230	B	42M17	ブロック1	VII	骨石	員石	9.9	8.2	4.8	579.8	黑色付石器		
231	B	41N8	ブロック6	VII	内飾砥石	研磨	4.9	6.6	1.3	36	36	36	
232	B	42N7	VII	内飾砥石	研磨	6.9	12.4	1.6	147.9	147.9	147.9		
233	B	42N16	ブロック1	VII	内飾砥石	研磨	7.3	12.5	1.8	164.5	164.5	164.5	
234	B	42N16	ブロック1	VII	内飾砥石	研磨	7.8	10.1	1	157.5	157.5	157.5	
235	B	42N6	VII	内飾砥石	研磨	8.5	13.4	1.9	192.5	192.5	192.5		
236	B	42N19	ブロック10	VII	内飾砥石	研磨	10.3	11.7	2.3	225.5	225.5	225.5	
237	B	42N19	ブロック10	VII	内飾砥石	研磨	4.9	7.5	2.3	51.6	51.6	51.6	
238	B	41N2	ブロック6	VII	洞内	研磨	7.3	6.8	2	109.8	109.8	109.8	
239	B	42N19	ブロック3	VII	石鍬	安山岩	12.8	8.1	7.8	372.5	372.5	372.5	
240	B	41N2	ブロック6	VII	白熱鐵	11.3	9.2	4.2	504.3	504.3	504.3		
241	B	40N25	S30004	VII	骨石	員石	14.9	7.7	5	684.6	684.6	684.6	
242	B	41O4	S30004	VII	骨石	員石	12.2	7.5	3.9	525.2	525.2	525.2	
243	B	41N23	S30004	VII	骨石	員石	12.8	5.1	7.8	118.4	118.4	118.4	
244	B	41O7	S30004	VII	内飾砥石	研磨	5.5	5.7	1.2	47.9	47.9	47.9	
245	B	41O7	S30004	VII	内飾砥石	研磨	6.0	10.4	2	136.3	136.3	136.3	
246	B	41O1	S30004	VII	内飾砥石	研磨	6.1	13.2	1.6	133.2	133.2	133.2	
247	B	41N18	S30004	VII	骨製石刀	研磨	8.3	6.1	2.2	130.4	130.4	130.4	骨製石器に転用
248	B	40N22	S30004	VII	石鍬	褐色細粒岩	10.9	7.8	7	907.2	907.2	907.2	
249	B	41P3	ブロック18	VII	骨玉未完成品	軟玉	3.8	2.8	0.7	12.6	12.6	12.6	
250	B	41N22	ブロック12	VII	石核	褐色細粒岩	2.7	4.1	3.1	22.5	22.5	22.5	表面墨化
251	B	40N4	ブロック11	VII	洞内	褐色	4.2	2.3	1.3	14.1	14.1	14.1	
252	B	40N4	ブロック11	VII	洞内	褐色	1.8	3.6	1.7	7.3	7.3	7.3	
253	B	40N8	ブロック11	VII	洞内	褐色	3.1	1.9	2.3	30.3	30.3	30.3	
254	B	40N8	ブロック11	VII	洞内	ヒスイ	1.6	1.6	1.2	3.4	3.4	3.4	
255	B	41N22	ブロック12	VII	内飾砥石	研磨	10.7	13.4	2.5	343.2	343.2	343.2	
256	B	41O4	ブロック12	VII	洞内	安山岩	10.4	2.2	7.4	735.8	735.8	735.8	
257	B	41O2	ブロック12	VII	石鍬	研磨	10.8	7	5.9	642.2	642.2	642.2	
258	B	41O8	VII	石核	員石	12.9	6.3	7.7	978.6	978.6	978.6		
259	B	40O12	ブロック11	VII	白熱鐵	10.7	7.3	3.8	353	353	353		
260	B	40N13	VII	骨玉	褐色	1.5	1.1	0.3	0.6	0.6	0.6		
261	B	40N13	VII	骨玉	褐色	0.6	0.5	0.3	0.2	0.2	0.2		
262	B	40N19	VII	洞内	褐色細粒岩	2.4	2.0	0.4	1.2	1.2	1.2		
263	B	40N19	VII	洞内	褐色細粒岩	4	2.2	0.8	2.7	2.7	2.7		
264	B	40N19	VII	洞内	褐色	3.1	2.6	1.2	8.2	8.2	8.2		
265	B	40N1	VII	骨石	ヒスイ	4.3	2.3	1.1	15.4	15.4	15.4		
266	B	40N23	VII	洞内	ヒスイ	2.5	2.6	1	7.9	7.9	7.9		
267	B	40M24	VII	筋砥石	研磨	39.6	23.7	12.6	17500	17500	17500		
268	B	39O14	VII	骨石	員石	13.8	7.4	7.4	1116.5	1116.5	1116.5		
269	B	39N4	VII	内飾砥石	研磨	5.6	6.8	1.6	51.4	51.4	51.4		
270	B	40N22	VII	内飾砥石	研磨	5.7	8.5	1.4	75	75	75		
271	B	41N1	VII	洞内	研磨	7.3	16	2.2	224.8	224.8	224.8		
272	B	40N18	VII	内飾砥石	研磨	7.2	13.3	2.5	232.6	232.6	232.6		
273	B	40M15	VII	骨石	員石	15.5	8.2	4.8	889.5	889.5	889.5	被覆、ブロック1-8で複合関係	
274	B	42N3	VII	内飾砥石	研磨	5.3	13.4	1.3	113.9	113.9	113.9	ブロック1-8で複合関係	
275	B	42N12	VII	内飾砥石	研磨	3.7	14.3	1.5	99.5	99.5	99.5	ブロック3とブロック6で複合関係	
276	B	42N3	VII	内飾砥石	研磨	3.7	14.3	1.5	99.5	99.5	99.5		
277	B	42N14	VII	内飾砥石	研磨	3.7	14.3	1.5	99.5	99.5	99.5		

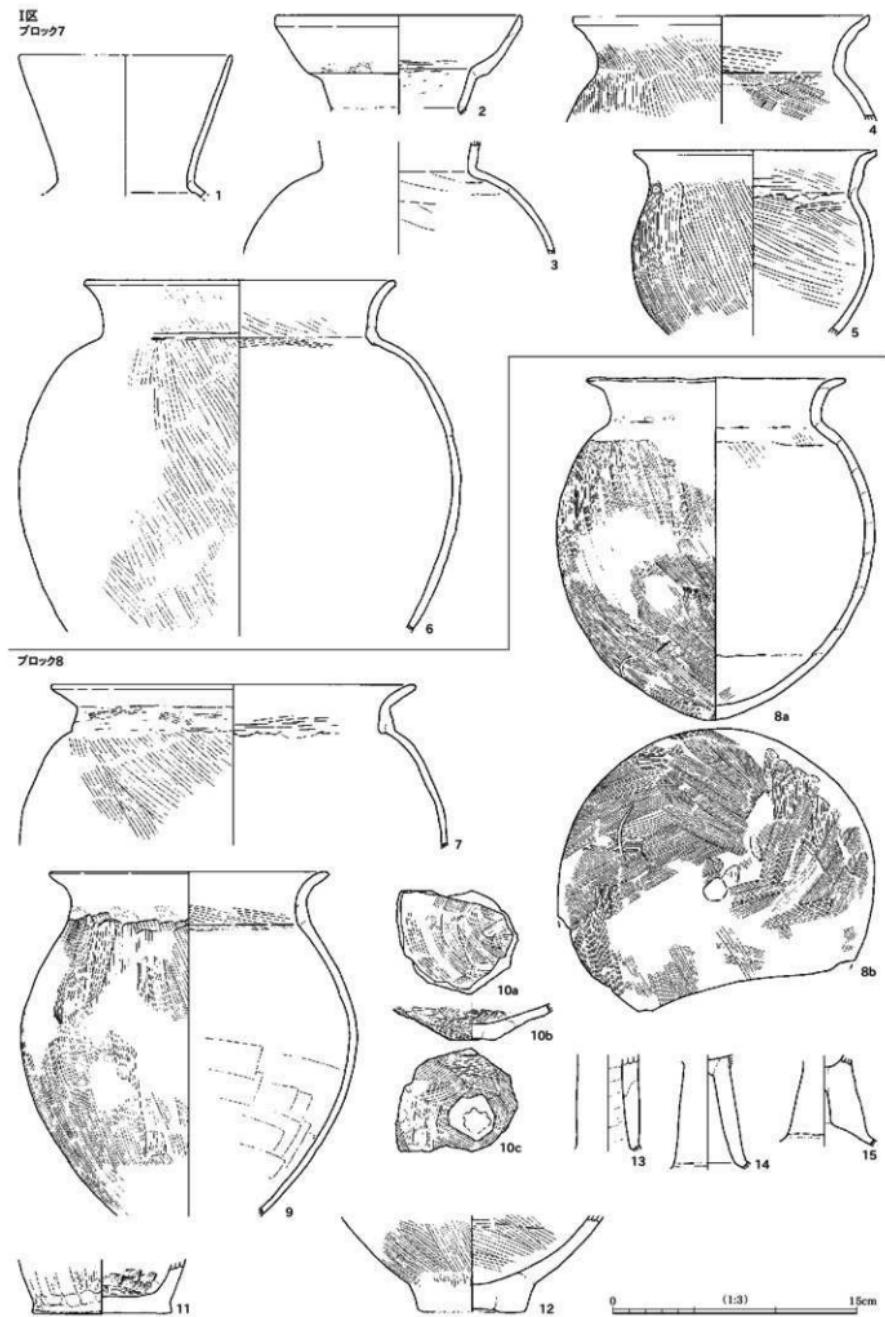
図 版



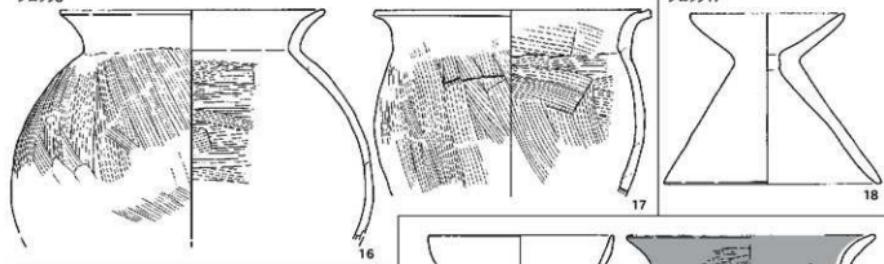
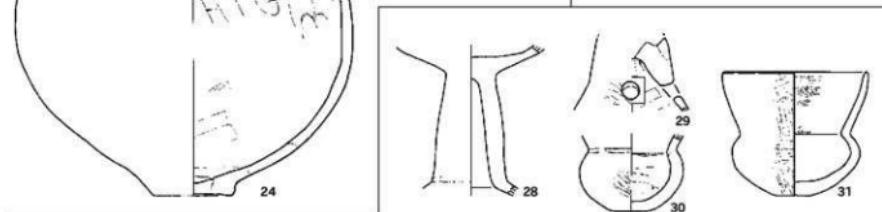
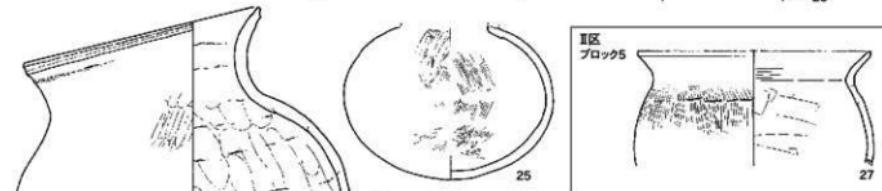
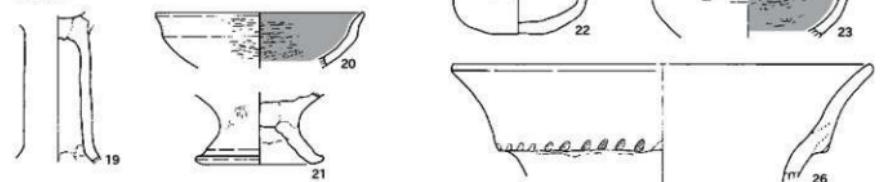
四 版 2

遺構個別圖

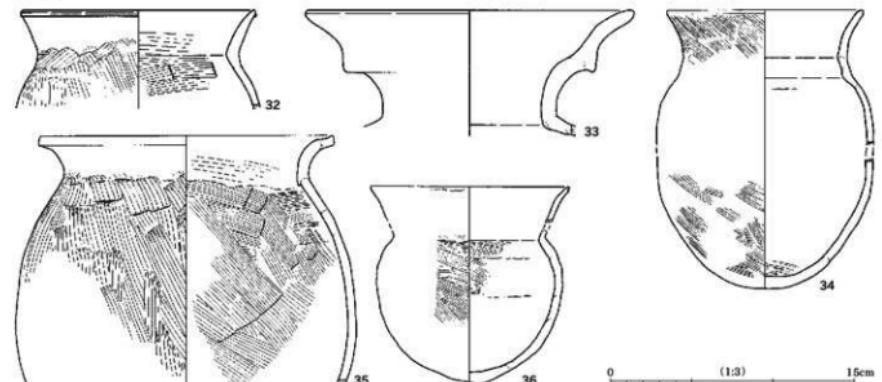




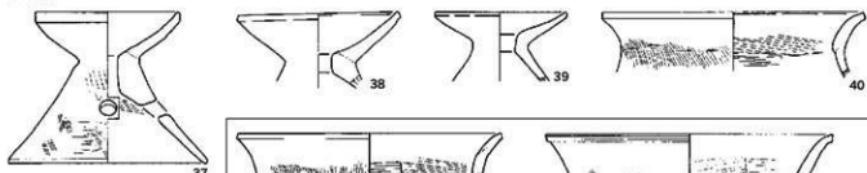
ブロック8

I区
ブロック外

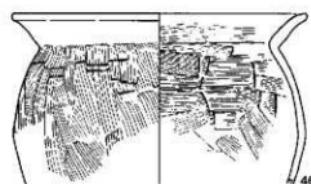
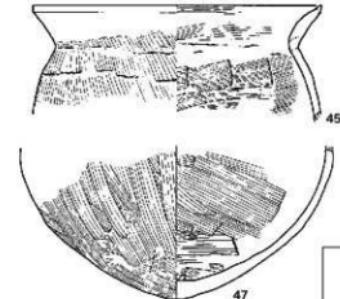
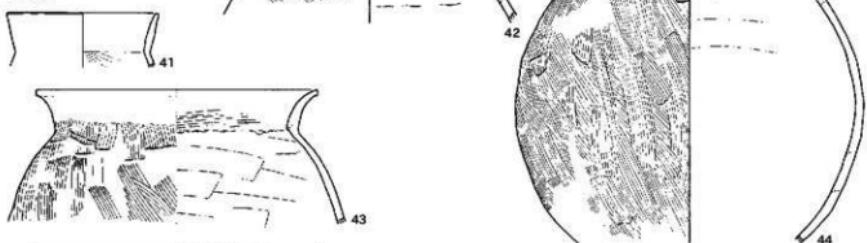
ブロック3



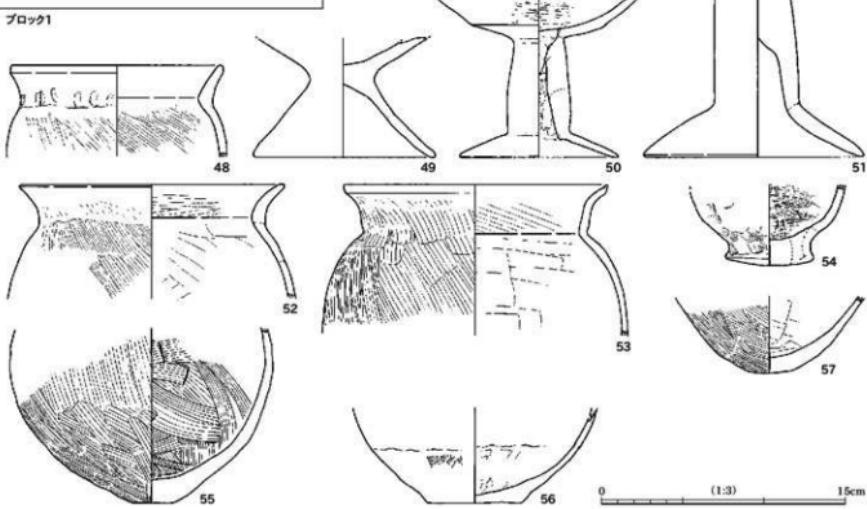
0 (1:3) 15cm

II区
ブロック6

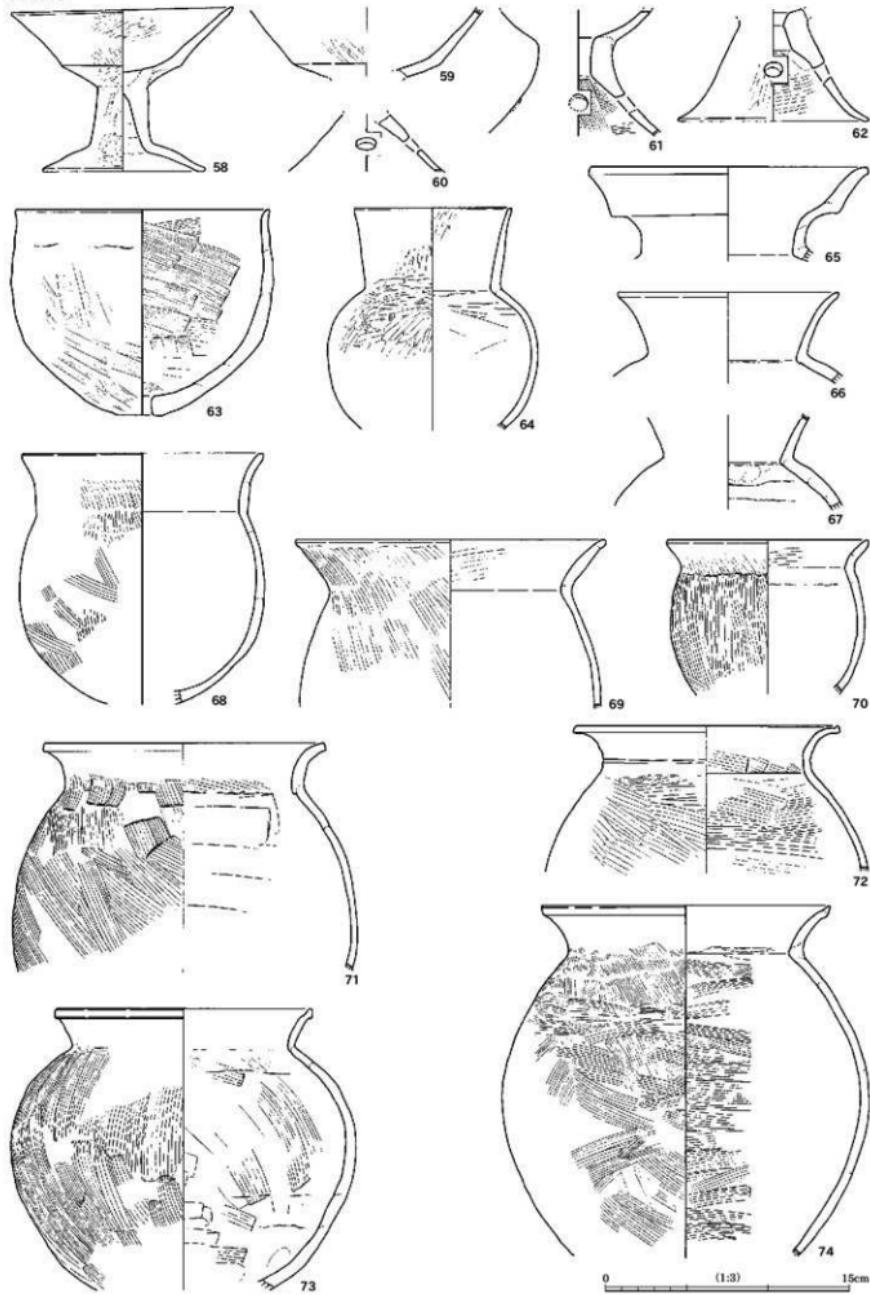
ブロック2



ブロック1

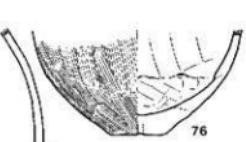
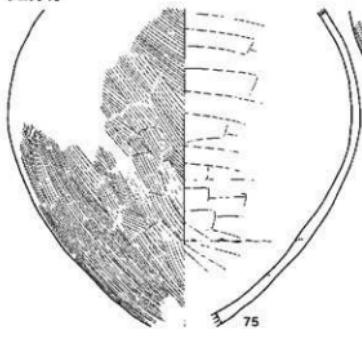
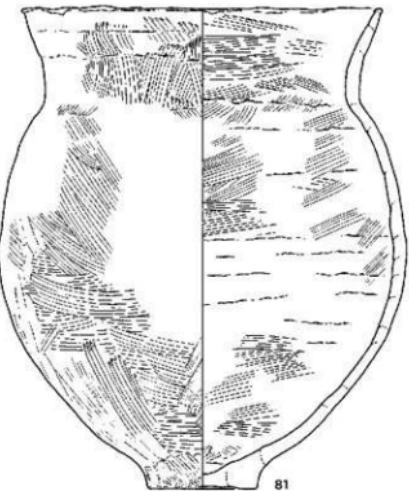
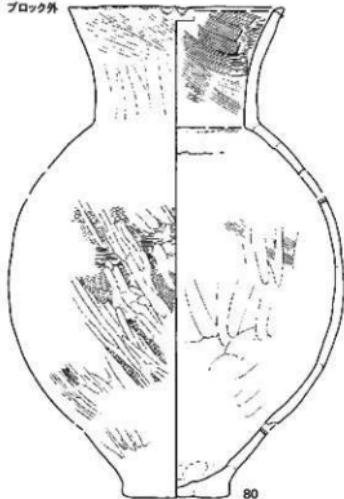
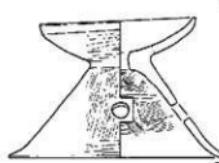
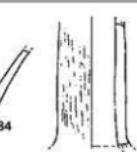
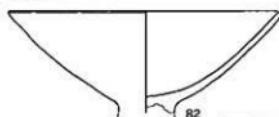


ブロック10



0 (1:3) 15cm

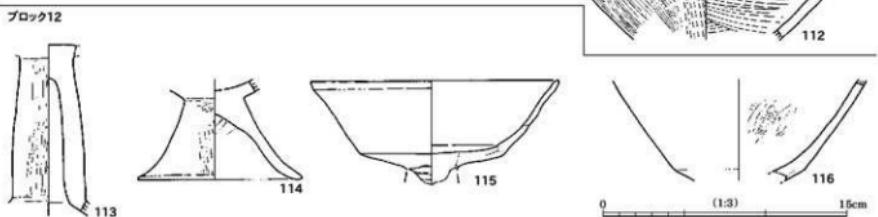
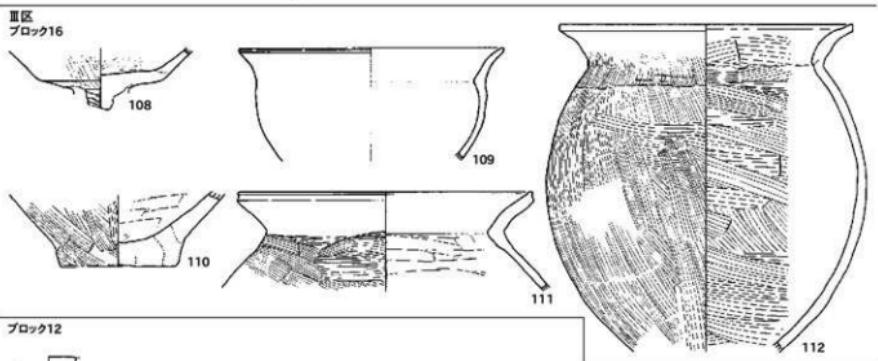
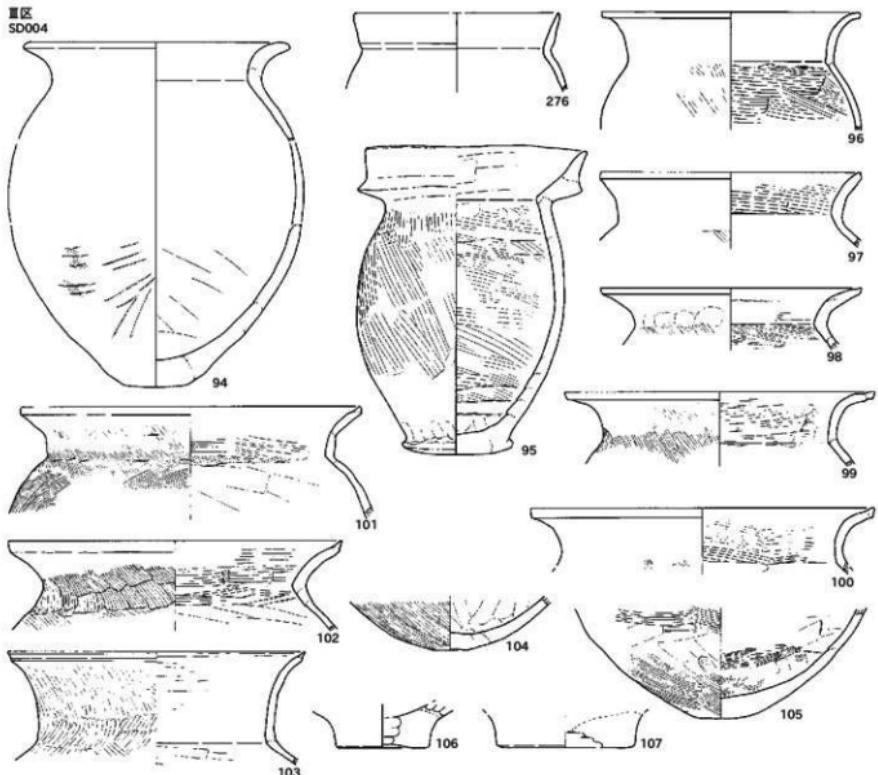
ブロック10

II区
ブロック外III区
SD004

93

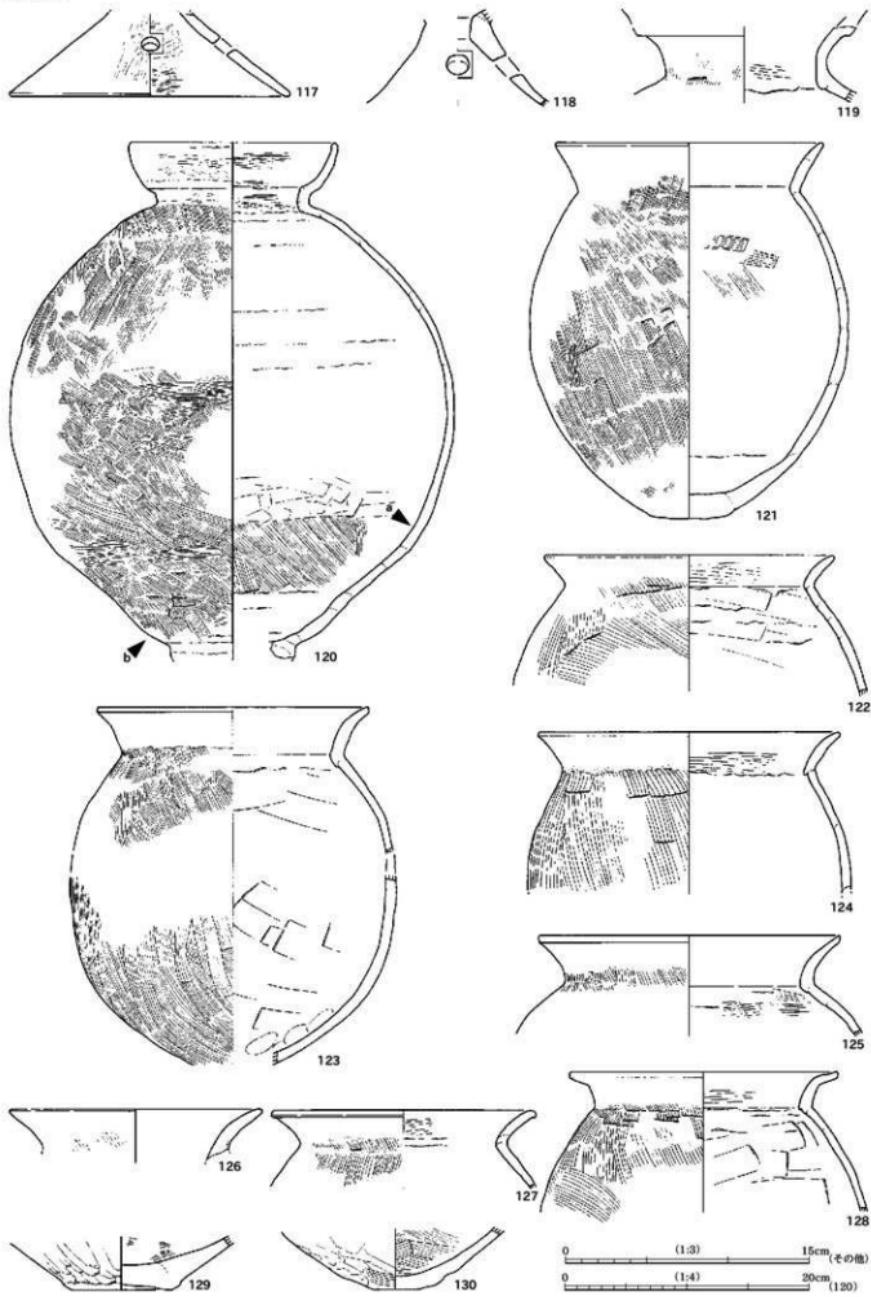
(1:3)

15cm

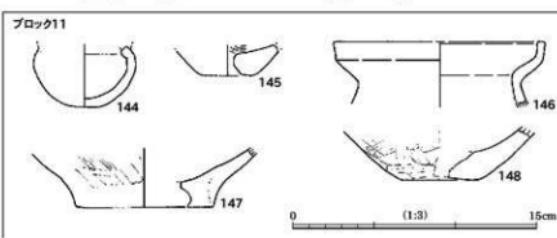
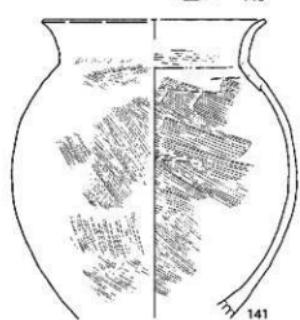
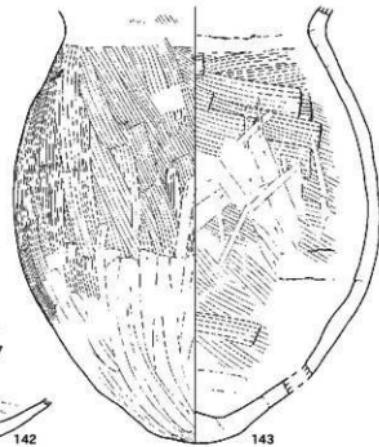
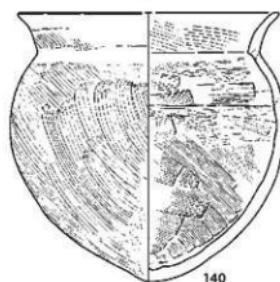
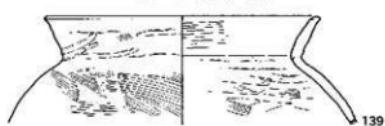
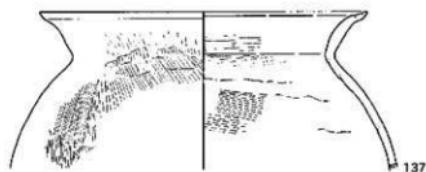
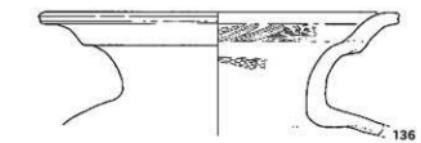
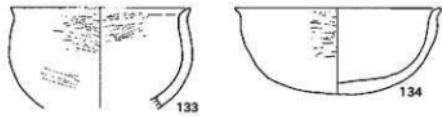
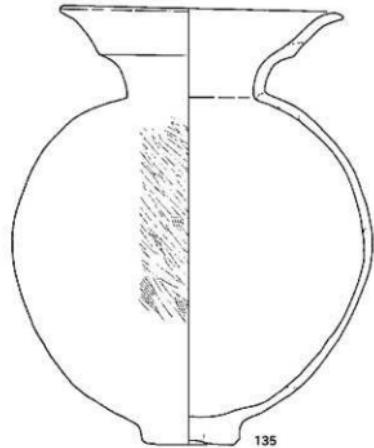
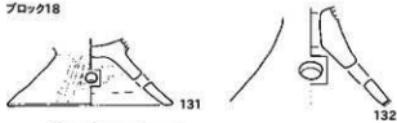


0 (13) 15cm

ブロック12



ブロック18

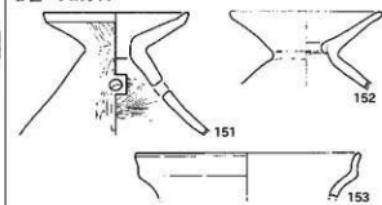


0 (1:3) 15cm

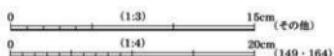
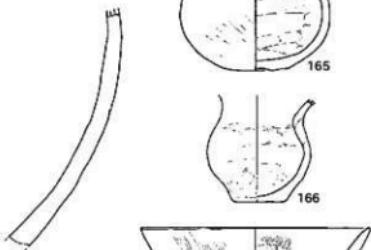
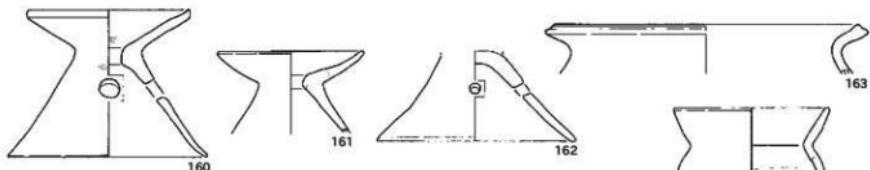
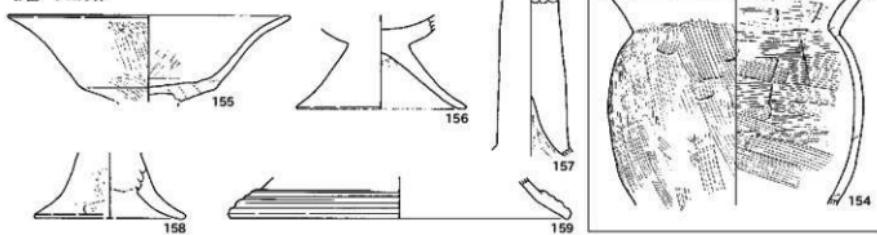
ブロック11

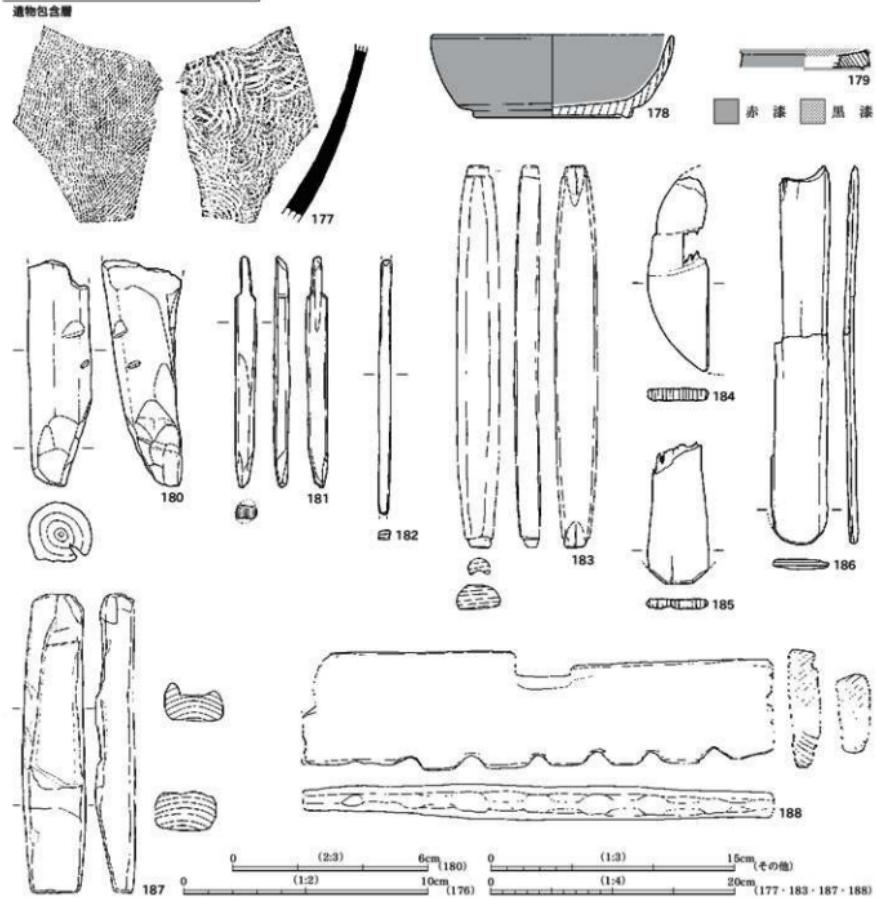
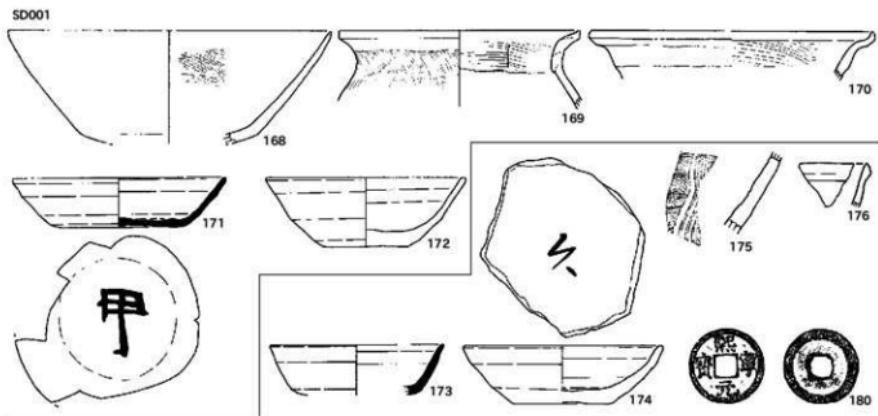


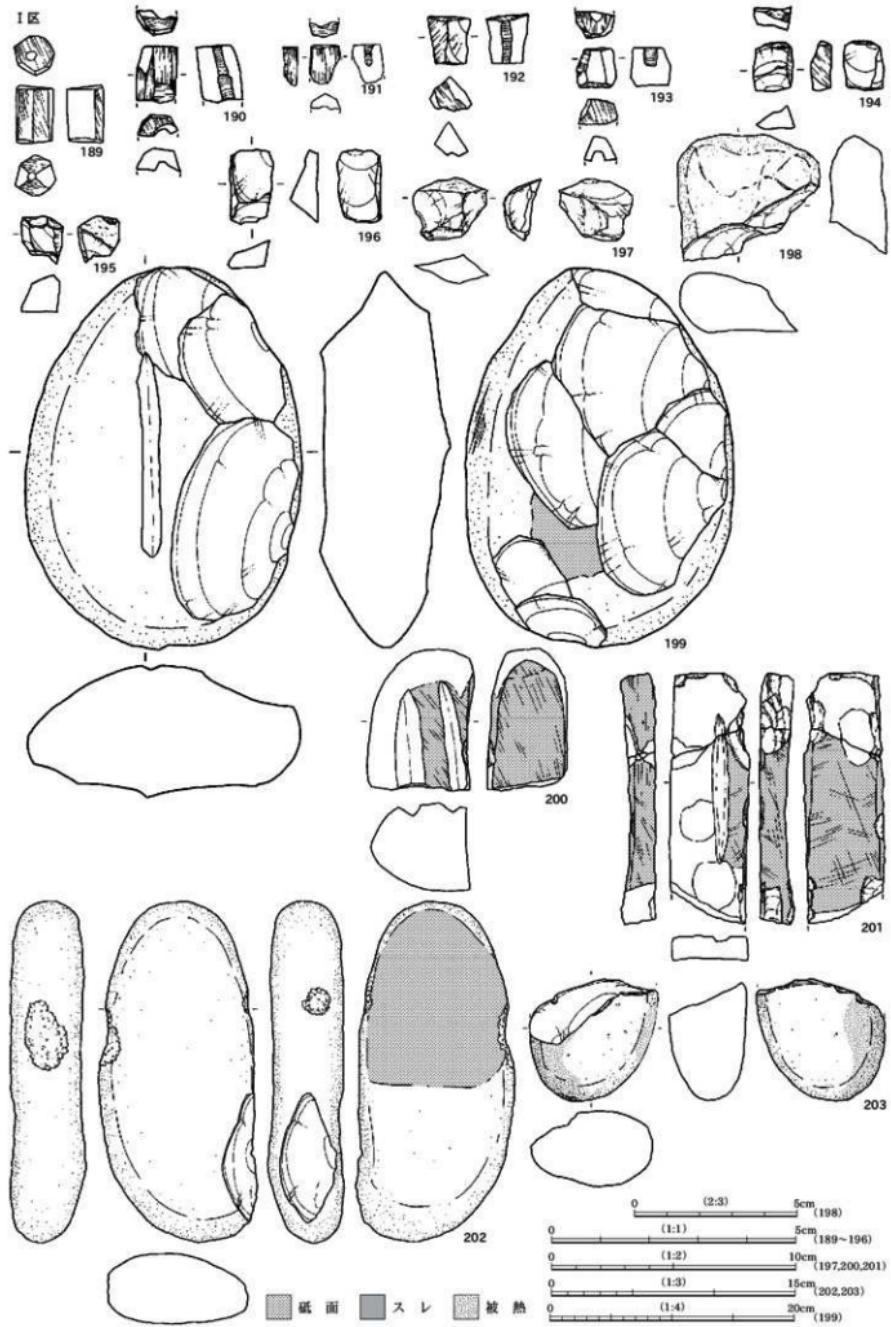
IV区 ブロック外



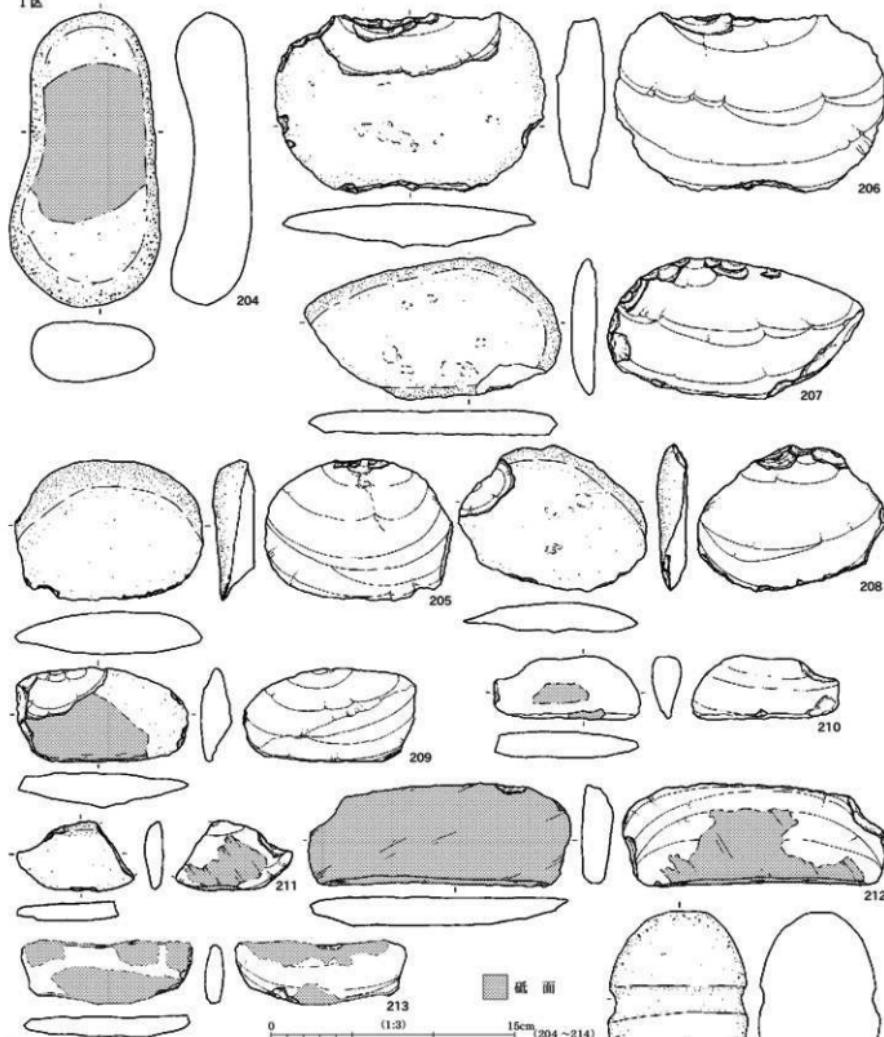
IV区 ブロック外







I区

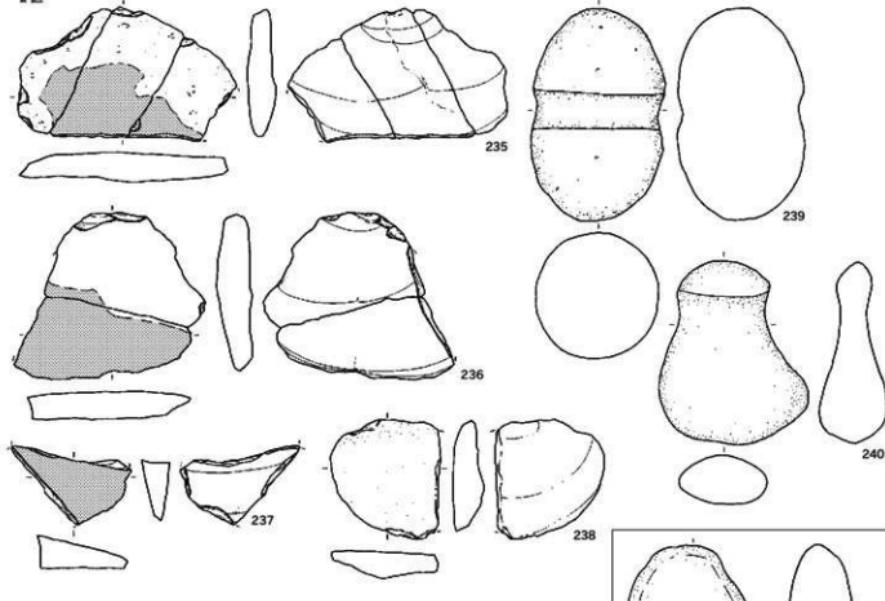


II区

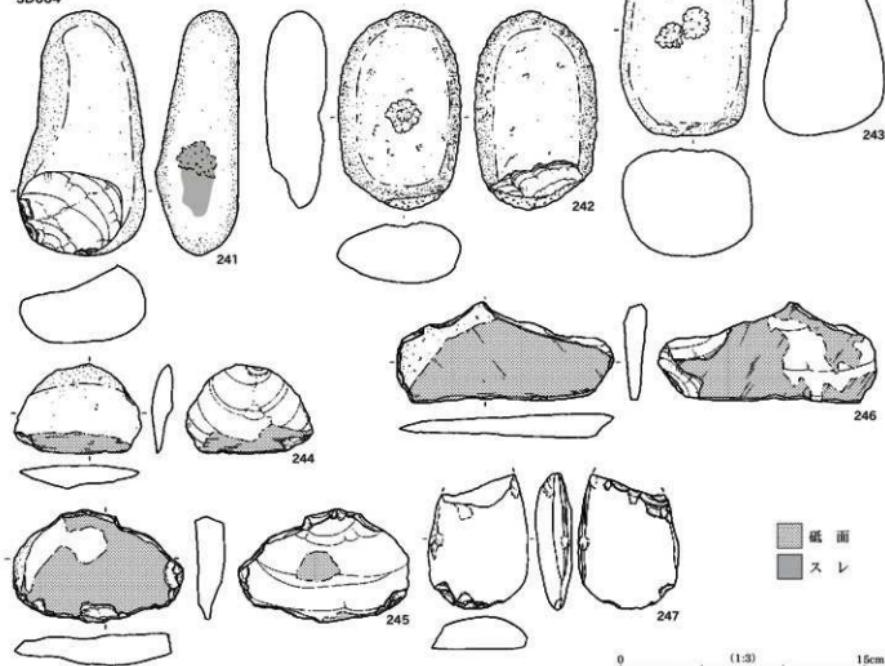
II区



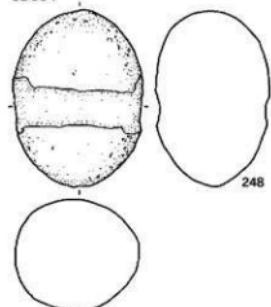
II区



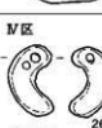
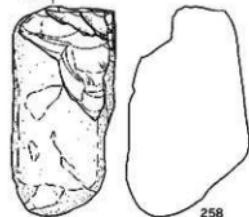
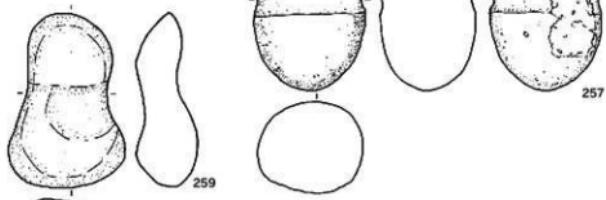
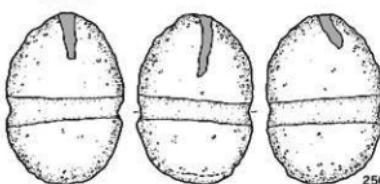
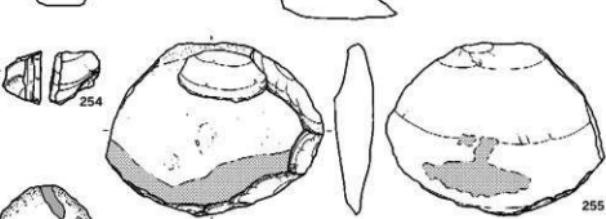
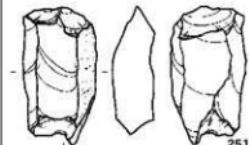
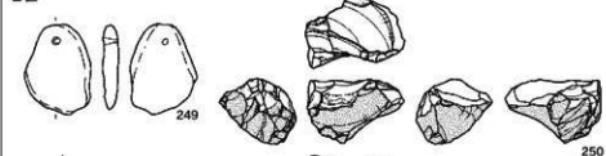
SD004



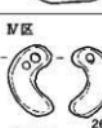
SD004



Ⅲ区



266



261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

443

444

445

446

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

461

462

463

464

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

475

476

477

478

479

480

481

482

483

484

485

486

487

488

489

490

491

492

493

494

495

496

497

498

499

500

501

502

503

504

505

506

507

508

509

510

511

512

513

514

515

516

517

518

519

520

521

522

523

524

525

526

527

528

529

530

531

532

533

534

535

536

537

538

539

540

541

542

543

544

545

546

547

548

549

550

551

552

553

554

555

556

557

558

559

560

561

562

563

564

565

566

567

568

569

570

571

572

573

574

575

576

577

578

579

580

581

582

583

584

585

586

587

588

589

590

591

592

593

594

595

596

597

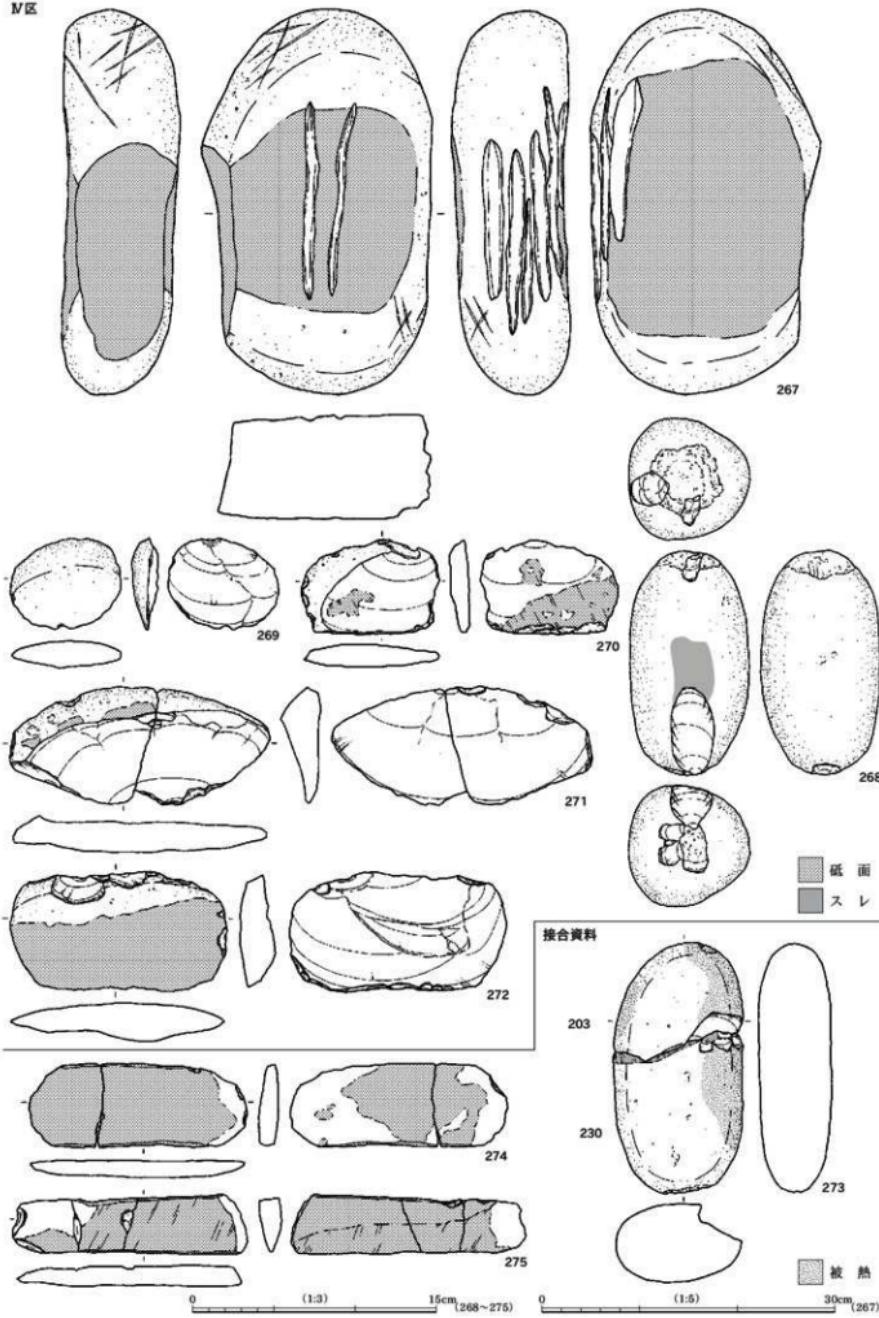
598

599

600

601

IV区





1 調査区近景（北から）



2 調査区近景（西から）



3 古墳前期の土器



4 内磨砥石



5 滑石製玉類と剥片類



6 遺物集中検出状況（北西から）



7 ブロック10 検出状況（西から）



8 ブロック10 滑石剥片類出土状況（西から）



9 ブロック10 遺物出土状況（西から）



10 ブロック7 筋延石〔199〕出土状況（北から）



11 IV区 筋延石〔267〕出土状況（南から）



12 SD004 完掘状況（北から）



13 SD004 (40N25・4005) 遺物出土状況（北西から）



14 SD004 高杯〔82〕・滑石剥片出土状況（西から）



15 ブロック1 高杯〔51〕・内磨延石〔右233・左234〕出土状況（東から）



16 III区 垂玉未成品〔249〕出土状況（東から）



17 基本層序6



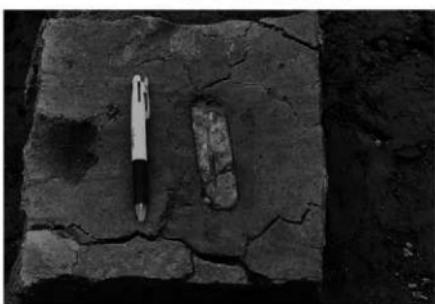
18 ブロック8 検出状況（南西から）



19 ブロック8 壺〔17〕出土状況（北から）



20 1区 壺〔25〕出土状況（北から）



21 1区 節砾石〔201〕出土状況（東から）



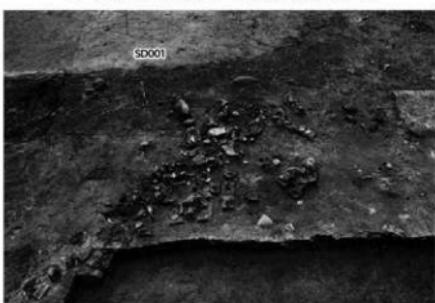
22 ブロック17 器台〔18〕出土状況（北西から）



23 ブロック3 (42M24) 遺物出土状況（東から）



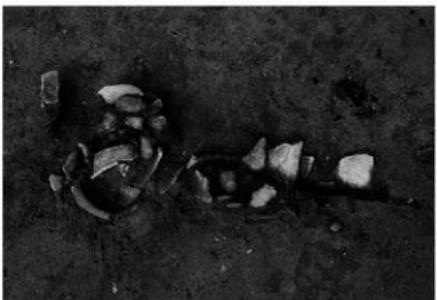
24 ブロック3 壺〔35〕・石壺〔239〕出土状況（北西から）



25 ブロック2 遺物出土状況（東から）



26 ブロック 2 遺物出土状況（東から）



27 ブロック 2 壺〔44・46〕出土状況（南から）



28 ブロック 10 検出状況（西から）



29 ブロック 10 検出状況（東から）



30 ブロック 10 高杯〔58〕出土状況（東から）



31 ブロック 10 土層堆積状況（西から）



32 SD004 完掘状況（北西から）



33 SD004 完掘状況（東から）



34 SD004 土層セクションC-C'（北から）



35 SD004 遺物出土およびピット状プラン確認状況（南東から）



36 SD004 壺〔95〕出土状況（北から）



37 ブロック12（4101～10）検出状況（東から）



38 ブロック12（4105～6） 検出状況（東から）



39 ブロック12 壺〔123〕出土状況（北東から）



40 ブロック11 壺〔149〕出土状況（北から）



41 ブロック18 壺〔136〕・壺〔142〕出土状況（東から）



42 ブロック18 壺〔136〕出土状況（東から）



43 ブロック14 器台〔左152・右151〕出土状況（北から）



44 ブロック14 壺〔154〕出土状況（北から）



45 IV区 壺〔164〕底部出土および土層堆積状況（北から）



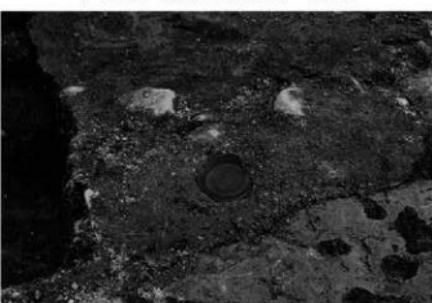
46 SD001・遺物集中ブロック 掘出状況（南東から）



47 SD001 土層セクションA-A'（北から）



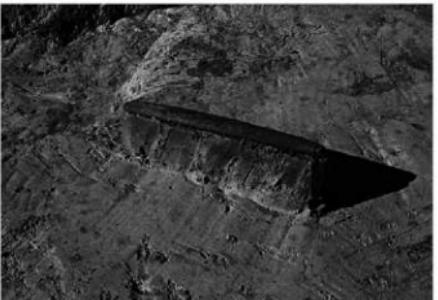
48 SD001 土層セクションB-B'（北西から）



49 SD001 須恵器杯〔171〕出土状況（西から）



50 SD001 土器器縁〔172〕出土状況（北から）



51 38M10 グリッド 浮子〔183〕出土状況（南東から）



52 III区 SX003検出状況（北から）



53 基本層序3



54 調査区近景（上空真上から）



55 調査区近景（南から） 日本海を望む

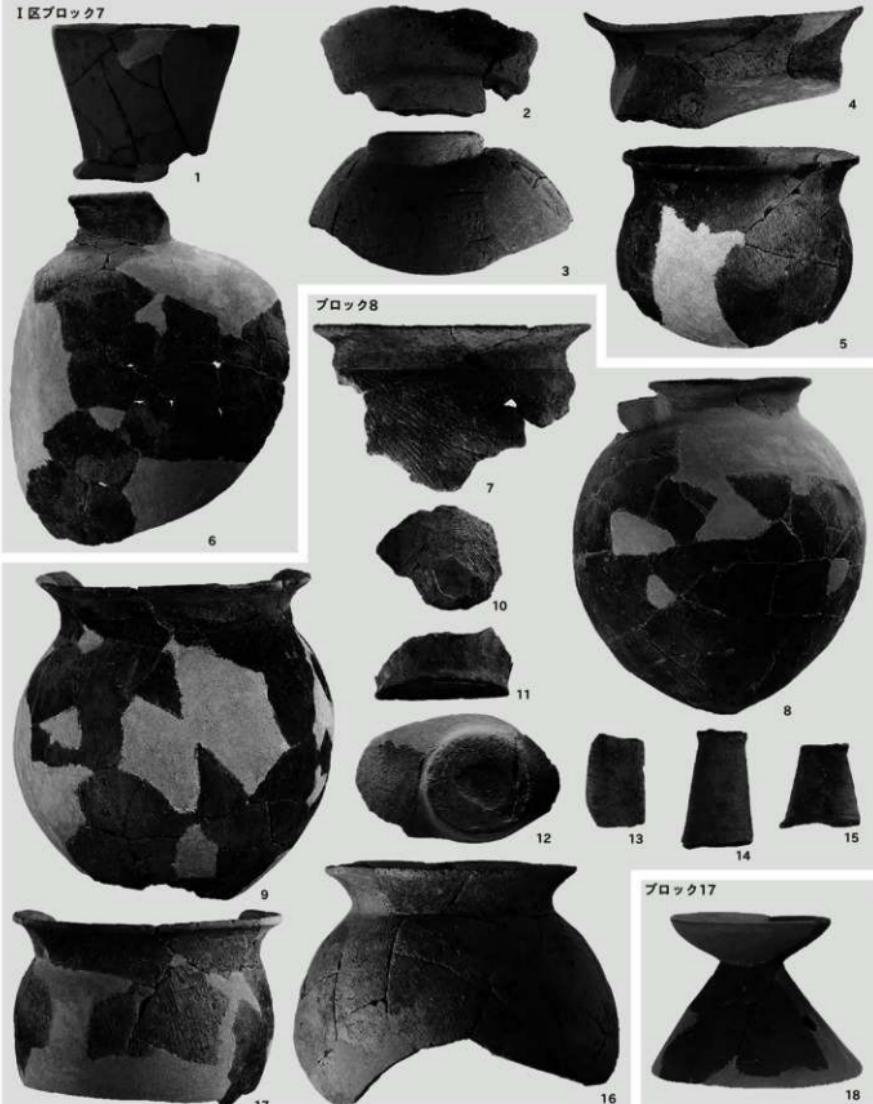


56 I区 作業風景（南東から）

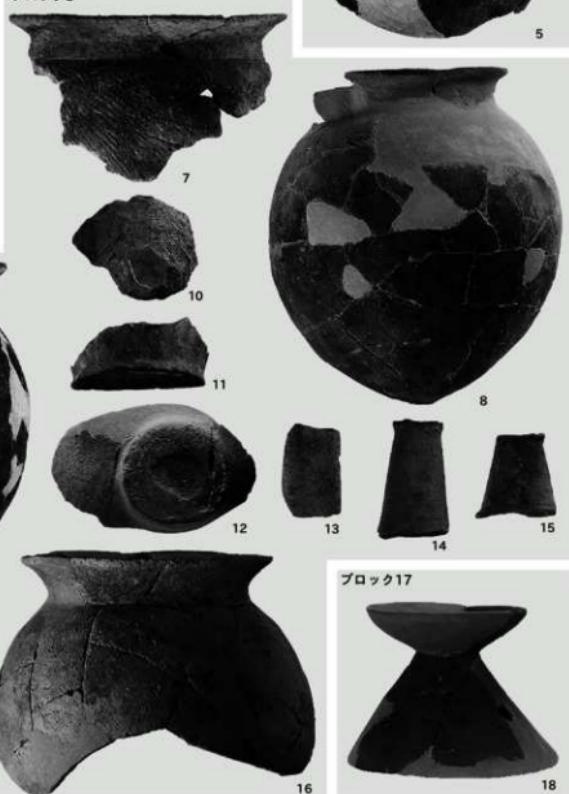


57 深堀トレンチ掘削状況（南東から）

I区ブロック7



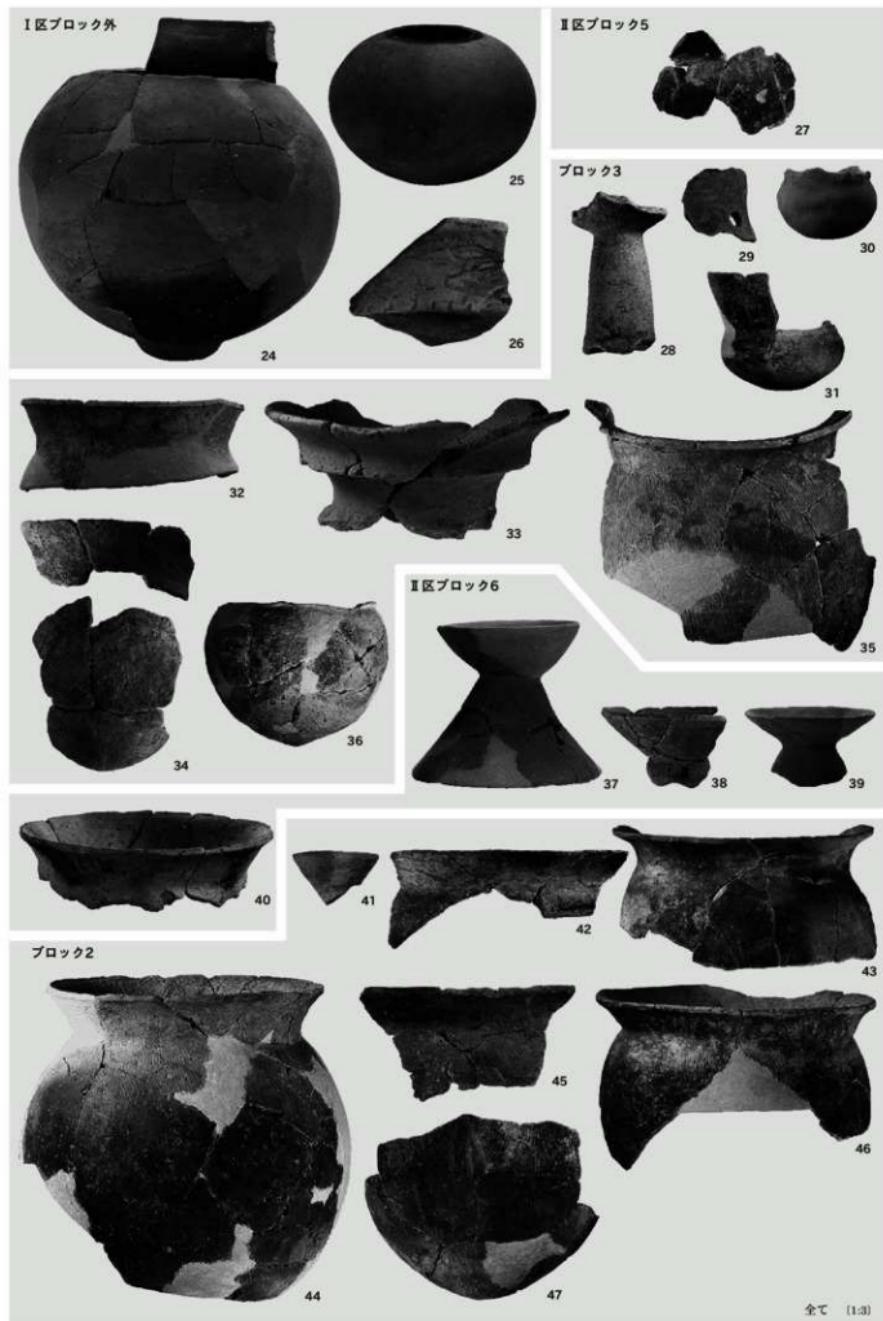
ブロック8



I区ブロック外



全て (1:3)



ブロック1

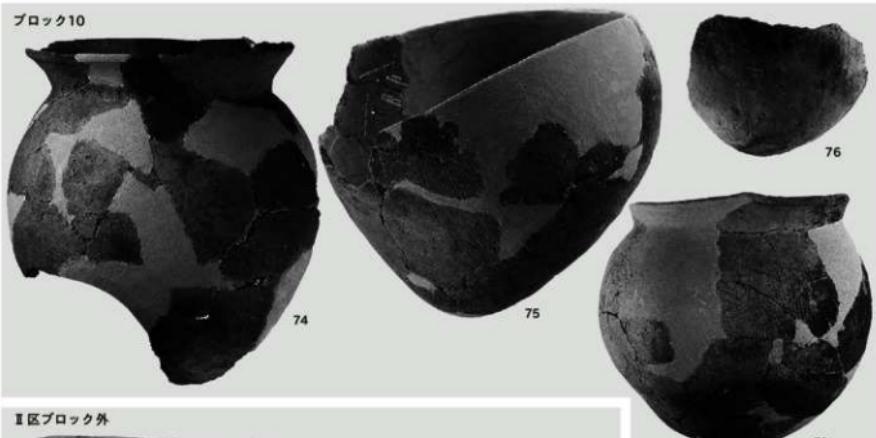


ブロック10

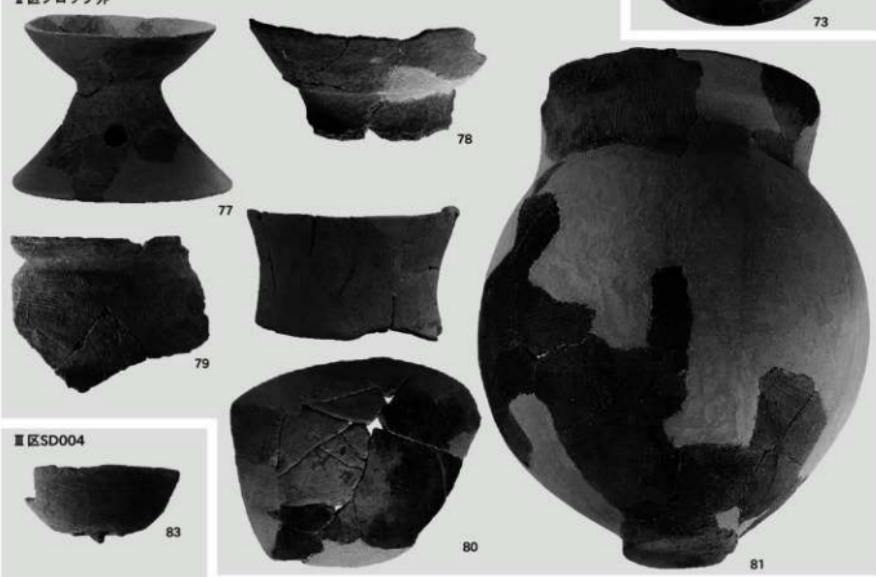


全て (1:3)

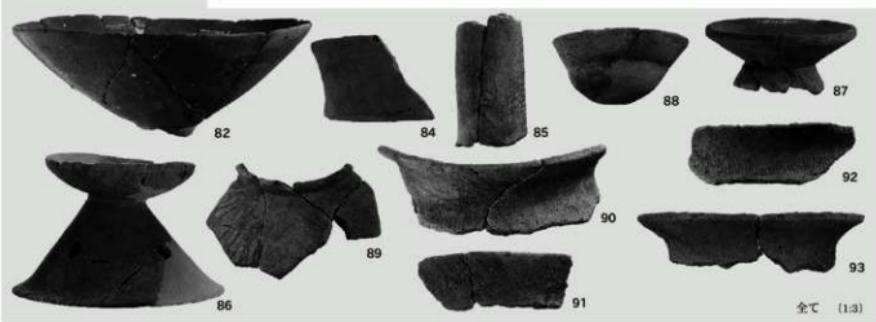
ブロック 10



II区ブロック外

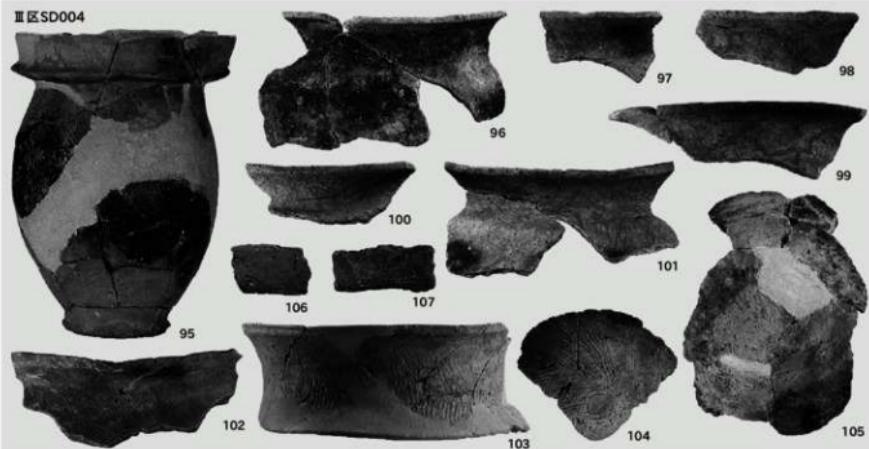


III区 SD004

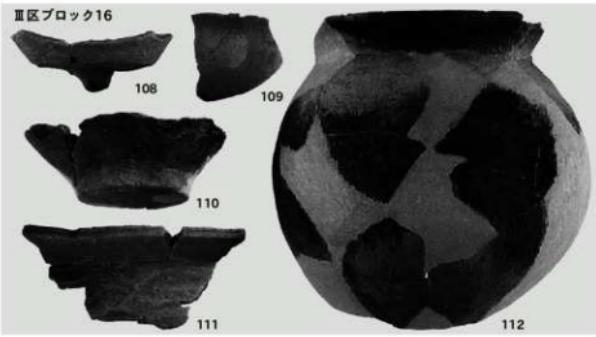


全て [1:3]

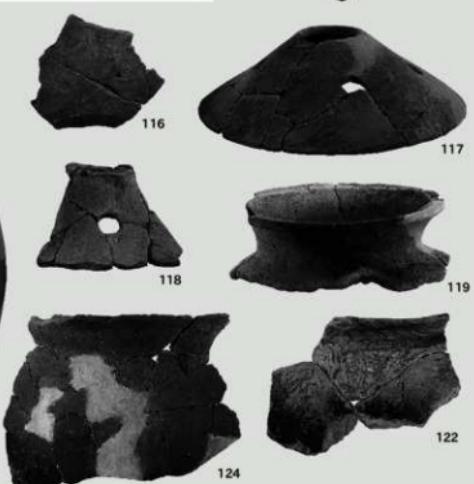
III区 SD004

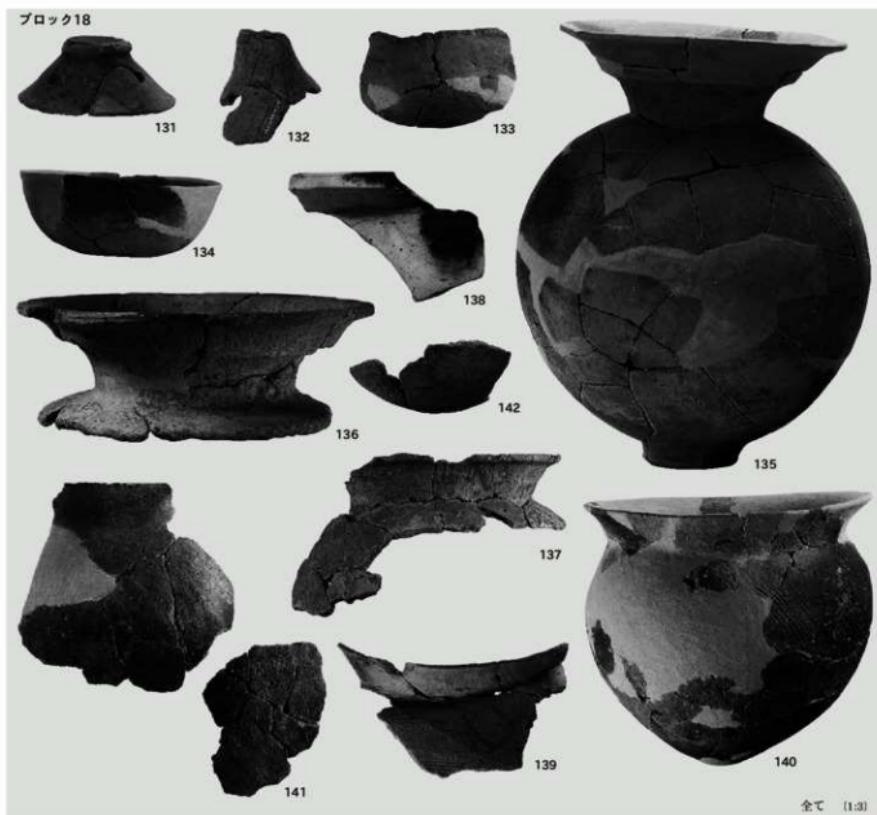
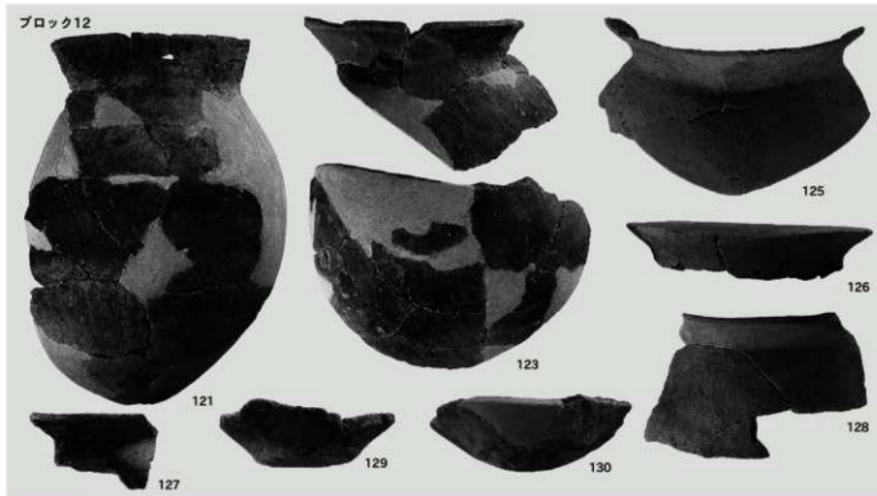


III区 ブロック 16



ブロック 12





ブロック18



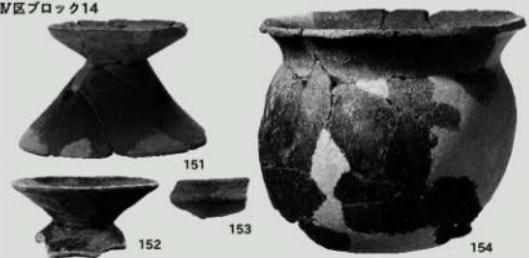
Ⅲ区ブロック11



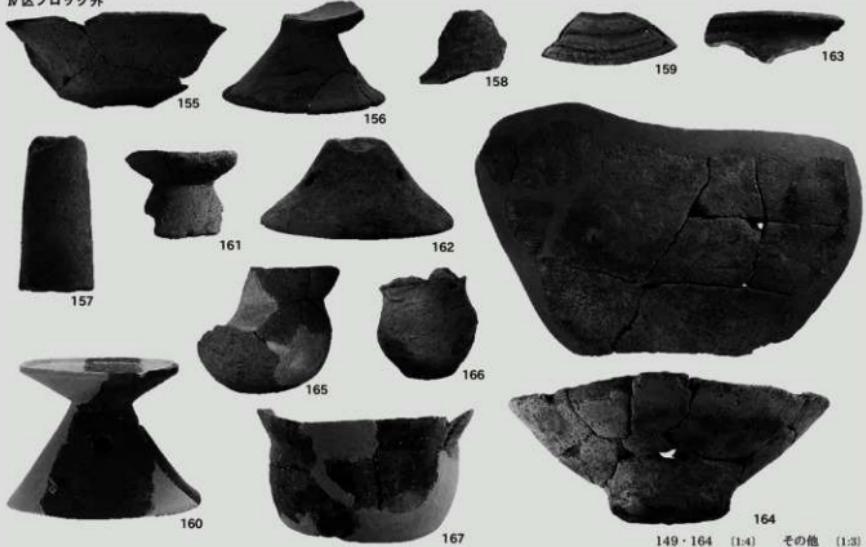
Ⅲ区ブロック外



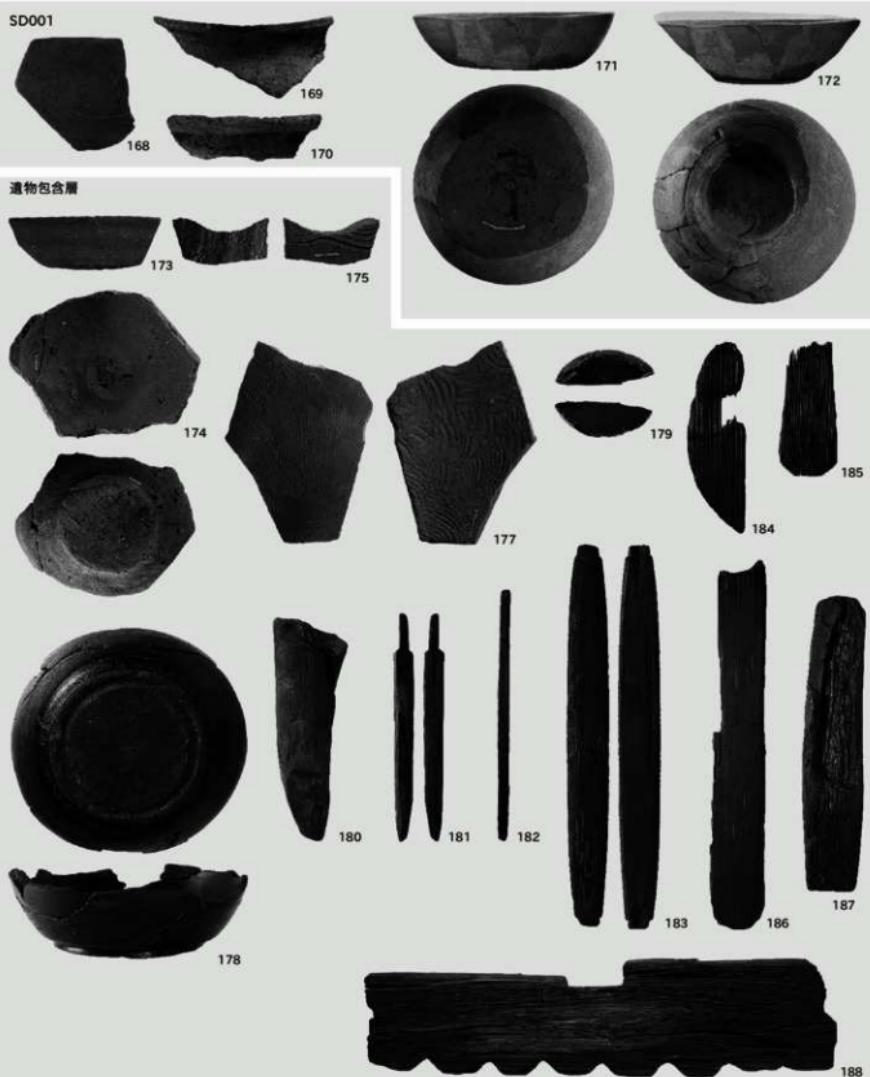
Ⅳ区ブロック14



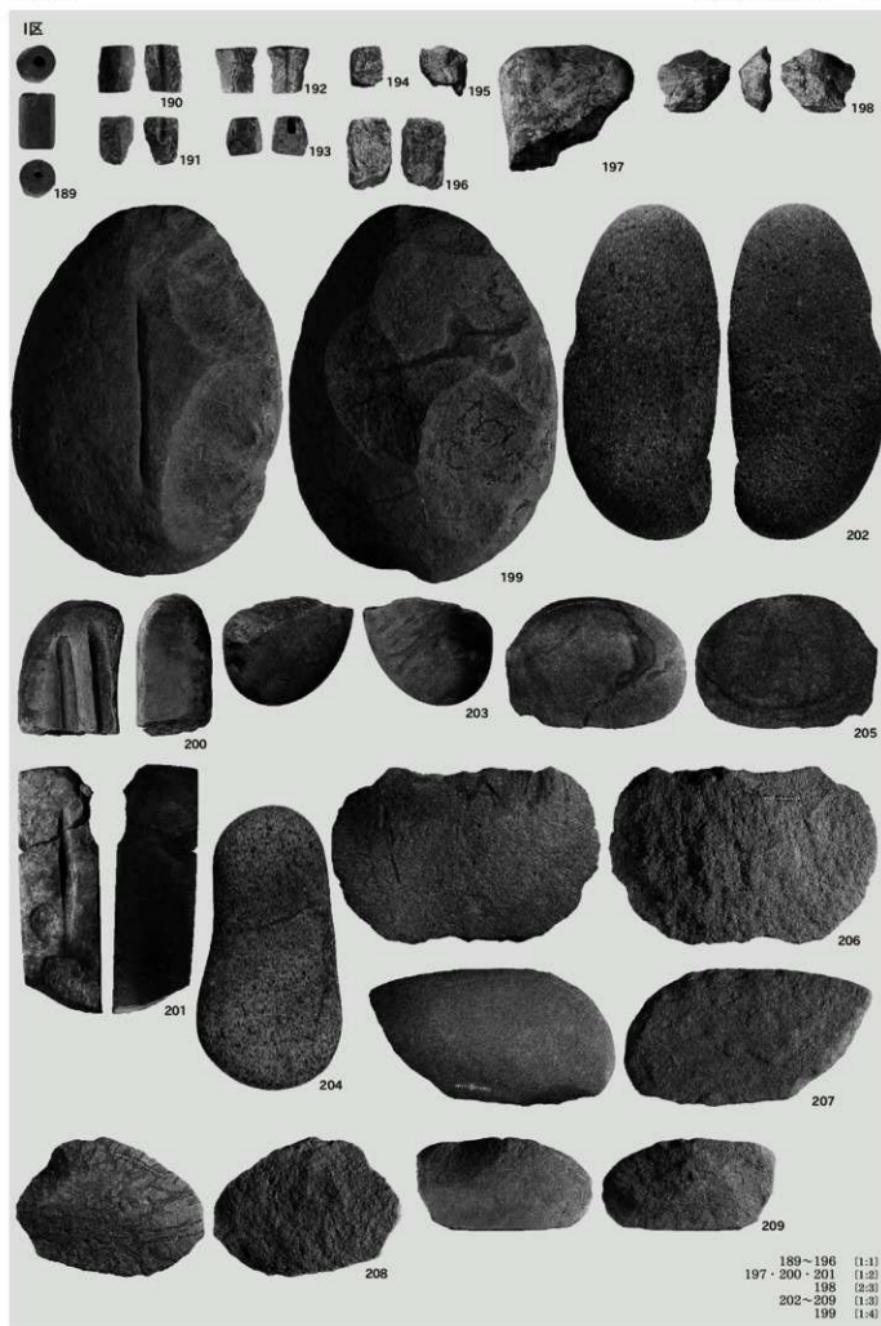
Ⅳ区ブロック外



149・164 (1:4) その他 (1:3)



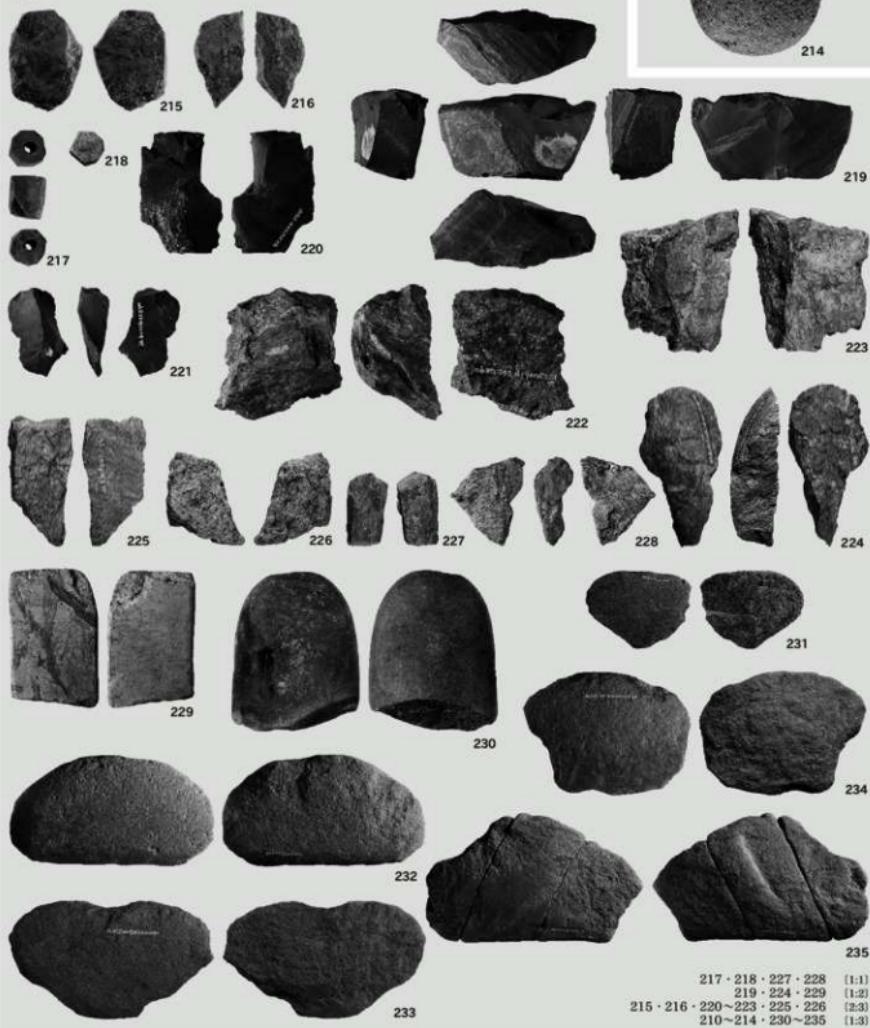
I区



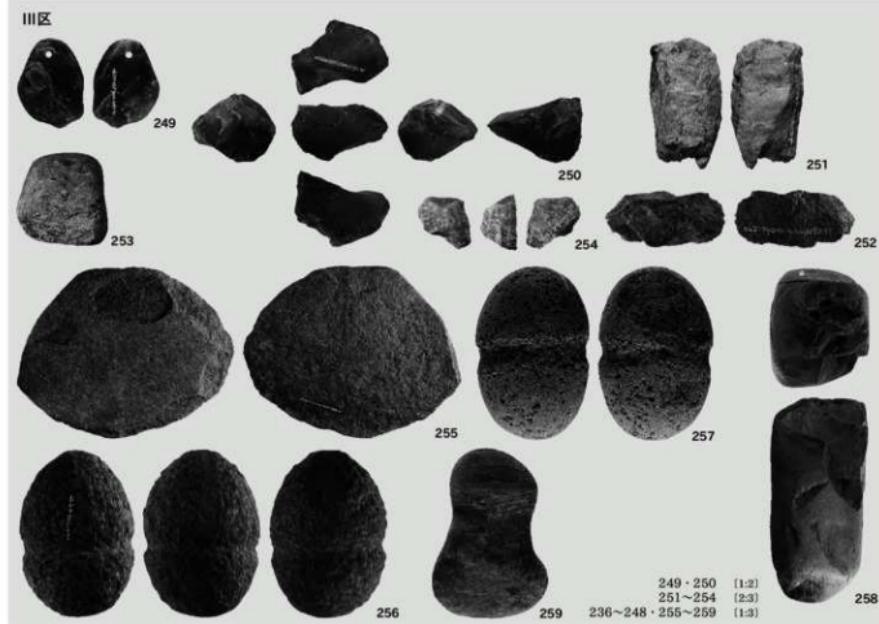
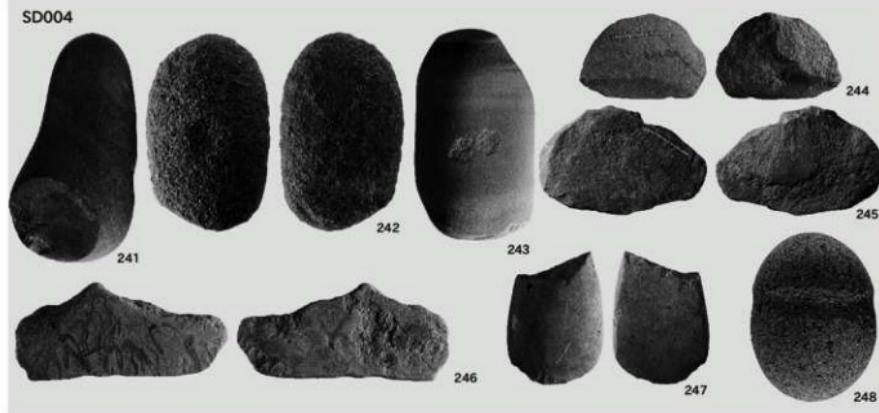
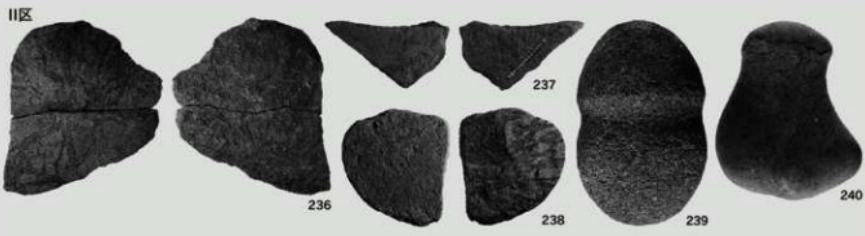
I区



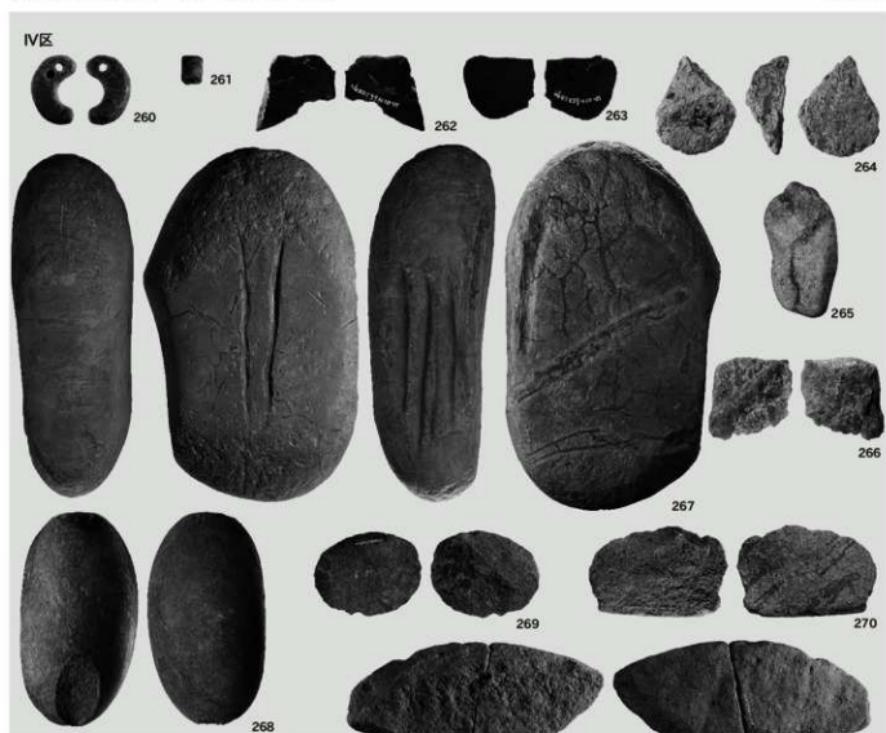
II区



217・218・227・228 (1:1)
 219・224・229 (1:2)
 215・216・220～223・225・226 (2:3)
 210～214・230～235 (1:3)



IV区



接合資料



試掘



260・261 [1:1]
262～266 [2:3]
268～275・仮9 [1:2]
267 [1:5]



1 高杯杯部の出ペン状粘土塊（図版5-50）



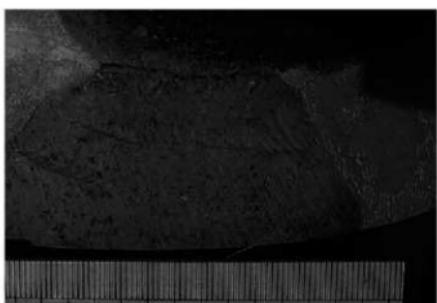
2 高杯脚部の接合痕跡（同左）



3 窄口縁A1類：外面（図版8-111）



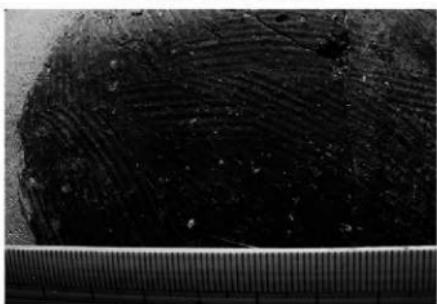
4 窪口縁A1類：内面（同左）



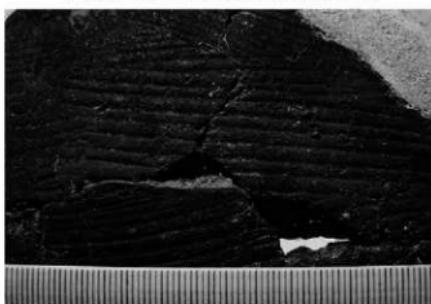
5 窪頭部のハケメ（図版8-112）



6 剥落部で認められる粘土積み上げ痕（図版9-120）



7 条間の狭いハケメ（図版8-112）



8 条間の広いハケメ（図版7-81）

報告書抄録

ふりがな	よこまくりいせき							
書名	横マクリ遺跡							
副書名	一般国道8号系魚川東バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第188集							
編著者名	渡邊裕之・入江清次(埋文事業団)、桑原 健(株式会社みくに考古学研究所)、株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2008(平成20)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
横マクリ遺跡	新潟県糸魚川市 田伏字横マ クリほか	15216	281	37度 03分 09秒	137度 53分 58秒	20060801～ 20061206	1,340 m ²	国道8号系魚川東 バイパス
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
横マクリ遺跡	遺物包含地	縄文時代		石器(磨製石斧)				
	遺物包含地	弥生時代後期		土器	南西約80mの田伏山崎遺跡に 由来するものと考えられる。			
	集落の縁辺部か	古墳時代前期	方形区画溝 1基	土器、玉作関連資料 (管玉・勾玉・管玉 未成品・勾玉未成 品・白玉未成品・石 核・剥片・滑石原 石・ヒスイ原石・筋 砥石・内磨砥石・平 砥石・磨石類)、石 器(石鍬)	滑石を主体とした玉作遺跡で あるが、住居や工房などの遺 構の存在は不明。大量の土器 が集積した遺物集中ブロック では、意図的に土器を配置し たかのような出土状態や、土 器を割って、異なるブロック に廻棄するなどの行為が確認 されており、遺跡の性格を知 るうえで重要な所見を提示し ている。			
		古墳時代後期	遺物集中ブ ロック14 か所			南西約80mの田伏山崎遺跡に 由来するものと考えられる。		
	平安時代～中世		土器		南西約80mの田伏山崎遺跡に 由来するものと考えられる。			
			土師器、須恵器、珠 洲、木製品		エブリが出土。近隣に水田が 存在する可能性が高い。			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集
一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書II
横マクリ遺跡

平成20年3月28日印刷
平成20年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社
〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1-25
電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集『横マクリ遺跡』 正誤表

頁	行	誤	正
60	上から1行	B類(18)や鉢(13)なども…	B類(8)や鉢(13)なども…